一九三〇年代二つのスポーツインターナショナル関係史（Ⅰ）

上野卓郎

目次

はじめに
第一部　一九三三年から三五年末まで
第一章　スポーツプレス（アクサミット）編文書の分析
第二章　関係改善形成史――一九三三年から三四年末まで
第一節　一九三三年の二つのスポーツインター
①　SASIプラハ国際事務局会議（三三年五月）
②　RSIアムステルダム国際指導協議会（三三年九月）
第二節　関係改善の始まり――一九三四年初頭から夏まで
①　SASIチューリヒ決議（三四年一月）
②　RSI執行委員会呼びかけ（三四年二月）
③　パリ反ファシズム・スポーツマン行進へのSASI参加問題

④　RSI六月アピール「国際スポーツ統一戦線の基礎」
⑤　SASIのパリ集会準備委員会への書簡（三四年八月）
第三節　SASIカールスバード総会前後――一九三四年九―一二月
①　RSIのSASIへの九・二二書簡
②　SASIカールスバード総会とSASIのRSIへの一〇・七書簡
③　エルヴィン・レポート
④　総会直後の往復書簡
第四節　フランス労働者スポーツ組織統一総会と二つのスポーツインター
第三章　最初の交渉（一九三五年三月一日、プラハ）
第一節　交渉への始動
第二節　交渉の記録
①　アルヒーフ資料と公刊資料の比較
②　双方の協定提案
③　「コミュニケ草稿」とそのイニシアティヴ
④　SASIの交渉報告と「プロトコル」
第三節　三・一交渉後の展開――四月の往復書簡
①　RSIのSASIへの四・一二書簡
②　SASIのRSIへの四・一六返信
③　RSIのSASIへの六・二書簡
第四章　二度目の交渉（一九三五年九月六日、プラハ）

第一節　三五年六月の往復書簡
① ＳＡＳＩのＲＳＩへの六・二一書簡
② ＲＳＩのＳＡＳＩへの六・二九書簡
第二節　二度目の交渉を前に
① 三五年八月の二つのアクサミット論説
② ＳＡＳＩの交渉前の動向
第三節　九・六交渉とその結果
① 「共同コミュニケ」と「呼びかけ」（ベルリン・オリンピアード・ボイコット）
② ＲＳＩの交渉総括――ＳＡＳＩへの書簡と無署名論説
③ アクサミット論説「統一への序幕」
④ 交渉についてのプロレタリア運動世界への報告
第五章　ＳＡＳＩプラハ国際協議会（三五年一一月三〇日・一二月一日）
① 事前報道から
② 協議会についての報告
③ 協議会決議
④ 総括における「労働者スポーツとスポーツ人民戦線」論　（本稿ここまで）

〔第二部・予定目次〕

第二部　一九三六年初頭から一九三八年まで
プロローグ　ＲＳＩ書記局プラハ移転のＳＡＳＩ報道（三六年一月）

第一章　「人民スポーツ」をめぐるドイチュ・アクサミット論争（三六年二月）
第一節　ドイチュ「警告」
第二節　アクサミット「警告――そしてそれだけか」
第三節　二つのスポーツインターの思想的境位
第二章　ＲＳＩプラハ国際協議会（三六年三月七、八日）
第一節　『国際スポーツ評論』三六年三・四月号協議会特集号
第二節　「ＳＡＳＩ幹部会会議プロトコル」（三六年春）
第三節　「ＲＳＩ第七回プレナム決議」（日付けなし）
第四節　『スポーツプレス』第七号（三六年三月一二日）
第五節　「ジャクソン・メモランダム」
第三章　未発の三度目の交渉――三六年六月の往復書簡
第一節　ＳＡＳＩからソ連身体文化最高評議会への一・二一書簡と『国際スポーツ・プレッセディーンスト』四月一六日号記事
第二節　ＳＡＳＩからソ連身体文化最高評議会への六・一〇書簡とＲＳＩへの六・一三書簡
第三節　デヴリーガーからＳＡＴＵＳ、ＴＵＬへの六・一五書簡と『国際スポーツ・プレッセディーンスト』六月二四日号記事
第四節　ドイチュからアクサミットへの六・二五、六・二七書簡
第五節　『国際スポーツ評論』三六年八月号記事と『国際スポーツ・プレッセディーンスト』七月一六日号記事――未発の事実経過とソ連スポーツ部局問題
補論　ベルリン・オリンピアード反対運動、バルセロナ人民オリンピアードと二つのスポーツインターの関係

第四章　ＳＡＳＩアントワープ総会（三六年八月）
第一節　ＳＡＳＩの総会予告と結果報告
第二節　『総会への一九三四―三五年に関する報告』（プラハ、一九三六年）
第三節　「情報資料」と「一参加者の記録」（アクサミット文書）
第四節　ドイツ公安資料――「帝国保安本局情報ディーンスト第一二号」の総会報告
第五節　ＲＳＩによる総括――『国際スポーツ評論』三六年九月（アクサミット論説）と一〇月号（無署名論説）
第五章　アントワープ労働者オリンピアード準備、スペイン人民支援をめぐって
第一節　ＳＡＳＩ幹部会（三六年一〇月二〇日）
第二節　アクサミット「共同でアントワープへ」（『評論』三六年一一月号）
第三節　スペイン人民支援、国際統一委員会開催問題
第四節　ＳＡＳＩ幹部会（三六年一二月三〇日）
第六章　アントワープ労働者オリンピアード（三七年八月）
第一節　さまざまな報告から
第二節　同時代の評価
第三節　ＳＡＳＩブリュッセル総会（三八年五月）での総括
第七章　三八年の二つのスポーツインター
第一節　ブルジョアとの協力？――カルニン「国際労働者スポーツのスポーツ政策的問題」（『ＳＡＴＵＳスポーツ』三八年五月二五日号）
第二節　インターからナショナルへ？――アクサミット「プラハ・ソコル祭典について」（『ルントシャウ』三八年第三〇号）
第三節　ＳＡＳＩブリュッセル総会――三〇年代スポーツインター最後の総会

総括
① スタインバーグのスポーツインター史像について
② ソ連と二つのスポーツインターと反ファシズム・スポーツ運動について
③ 人民スポーツインターへの芽――戦後未完の国際人民スポーツ運動構想の史的源泉

はじめに

両大戦間期、二つの労働者スポーツインターナショナル（以下スポーツインター）が存在した。一つは、一九二〇年九月ルツェルンで創立した社会主義労働者スポーツインターナショナル（SASI）、もう一つは、一九二一年七月モスクワで創立した赤色スポーツインターナショナル（RSI）である。前者は創立時「労働者体育・スポーツ連盟国際連合」を正式呼称とし、創立会議地にちなんで「ルツェルン・スポーツインター」（LSI）と呼ばれたが、一九二七年ヘルシンキ総会後、上記のように呼称した。それは社会主義インター、社会主義労働組合インターとの結びつきを明らかにした証しであった。後者は創立時「体育・スポーツ労働者・農民組織国際連合」を正式呼称としたが、RSIを通称とし、スポチンテルンとも自称した。これは国際共産主義運動の一組織であった。

こうして二つのスポーツインターの形成は、社会主義と共産主義の分離・対抗という一九一七年ロシア革命後の社会主義・労働者運動史の展開に対応した国際労働者スポーツ運動のイデオロギー的・組織的表現であった。

先行研究には形成期を論じたフランツ・ニッチュ論文[1]、二〇年代を論じたヘルベルト・ディールカー論文[2]があるが、三〇年代のものは単独ではない。

二つのスポーツインター関係史を通史として論じた研究にアメリカの未公刊学位論文、デイビット・スタインバーグ『赤旗の下のスポーツ。一九二〇―一九三九年の赤色スポーツインターナショナルと社会主義労働者スポーツインターナショナルの間の関係』[3]（一九七九年）がある（以下スタインバーグ学位論文）。彼の公刊論文は「労働者スポーツインターナショナル。一九二〇―一九二八年[4]」と「労働者スポーツと統一戦線。一九三四―三六年[5]」である。

スタインバーグ学位論文の構成は次のようになっている。第一章、労働者スポーツ運動の始まりの概説、第二章、二つのスポーツインターの成立を「イデオロギー、目標、戦術」に関して（「ルツェルンとモスクワ」という規定で）論じ、第三、四章、二つのスポーツインター関係の《第一局面》（一九二一―二五年）とその中断（一九二五―二七年）の詳論、第五、六章、一九二八年以前のＲＳＩの展開、統一戦線戦術（下からの統一戦線）の論述、関係の《第二局面》として第七章、スポーツインターでの、第八章、ドイツでの関係断絶・敵対期（一九二九―三三年）の描写、第九章、「統一の試み」としての関係の《第三局面》（一九三三―三六年）を論じ、さらに、第一〇章「最後の数年」（一九三五―三九年まで）で二つのスポーツインターの関係を越えるベルリン・オリンピック反対運動やオリンピック理念擁護国際委員会、バルセロナ人民オリンピアード準備・中止などの展開、一九三七年アントワープ第三回労働者オリンピアードの共同（ソ連参加・ＲＳＩチェコ組織の排除）による実施などの記述、最後に、第一一章「エピローグ」、大戦中のロンドン「亡命ＳＡＳＩ」と戦後スポーツインターのＣＳＩＴとしての出発の比較的短い記述とともに、総括的なスポーツインター関係史像の提出。

上記の《第一局面》、《第二局面》、《第三局面》の区分規定は、小論によるもので、スタインバーグ自身が与えたものではない。この学位論文の記述の重点は、第二局面（関係断絶・敵対期）にあり、それによって第三局面の展開への視点も制約されている。その一見総括的な記述にもかかわらず、スタインバーグの研究においては第三局面の歴史

的な位置付けが相対的に低いと言わざるを得ない。もちろんそこからは資料的にも参照すべき貴重な引用を利用することができる。しかしながら、その資料の批判的な検討は不可欠であり、場合によっては典拠資料の再審にとどまらず、小論による新たな資料の提出は彼の論述の書き換えを必要とする。総括的なスポーツインター関係史像をめぐる議論は後に保留し、ここでは資料問題についてのみ見ておきたい。

《第三局面》の史的展開を描くのにスタインバーグが典拠とした資料は、主にフランスのＦＳＴ／ＦＳＧＴの『スポーツ』、スイスの『ＳＡＴＵＳスポーツ』であり、ＲＳＩに関しては特に『インプレコル』、部分的にコミンテルン、共産青年インター文書で、直接的なＲＳＩ文書はなく、ＲＳＩの『国際スポーツ評論』、ＳＡＳＩの『国際スポーツ・プレッセディーンスト』は僅かしか利用されていない。再審し得る資料の取扱いには議論の余地がある。アルヒーフ資料では、ＦＳＧＴアルヒーフ資料が英文文献で初めて提出されたことをその成果として確認すべきであるが、一方で、《第二局面》までは一部利用されたボンの社会民主主義アルヒーフ・ＳＡＳＩ（デヴリーガー）文書をここでは取り上げていないこと、ＳＡＳＩ総会文書（一九三六、三八年）を参照していないこと、を指摘しなければならない。

スポーツインター史研究にとって基本的な問題は資料集がないことである。小論はこの資料集編纂の基礎的研究として位置付けられる。

小論が国際的にも初めて提出するアルヒーフ資料は、上記ボンのもの以外に、プラハの国立文書館、チルシュ博物館、カレル大学図書館、ロンドンの国立労働史博物館、旧イギリス共産党アルヒーフ、ウォーリック大学図書館モダン・レコードセンター、ウィーンの国立図書館、コブレンツ、ポツダムのブンデスアルヒーフから得られた独文、英文のものである。『国際スポーツ評論』（一九三三―三六年巻）はボンの社会民主主義アルヒーフ所蔵の三五年巻第七

号―三六年巻を補うライプツィヒ大学図書館所蔵写真版（一九三三―三五年巻第六号）で、なお欠号があるものの[6]ほぼ全体が揃い、本研究の主要資料として活用することが可能となった。『国際スポーツ・プレッセディーンスト』は一九三三、三四、三八年巻が未入手だが、三五―三七年巻がプラハ・カレル大学教育学部図書館から入手できた。[7]バーゼル市図書館所蔵の『ＳＡＴＵＳスポーツ』の関係頁コピーは、フランツ・ニッチュ博士（マールブルク）から提供されたものである。[8]

小論の課題は、何よりも同時代資料の収集に基づく史実と史的展開の構造の明確化である。これによって一九三〇年代スポーツインター関係史（関係史全体の《第三局面》）の国際スポーツ運動における歴史的意義を実証するものである。この《第三局面》のハイライトは、一九三四年八月のパリ反ファシズム・スポーツマン行進とＲＳＩのＳＡＳＩへの交渉申し出、三五年三月の最初の交渉、九月の二度目の交渉での二つのスポーツインターのベルリン・オリンピック・ボイコット共同アピール、一一月のＳＡＳＩの、三六年三月のＲＳＩの、各国際協議会、六月のＳＡＳＩ訪ソ代表団・二つのスポーツインター三度目の交渉の不発と往復書簡、三七年八月のアントワープ第三回労働者オリンピアードの共同開催である。しかし、このハイライトのみを取り上げるだけでは関係史の構造を明らかにすることができない。小論では、このハイライトの前後の過程を資料から描き、かつ資料比較を試み、国際的な研究でも未発表のアルヒーフ資料をこのなかで利用することによって詳細な記述を与え、研究の空白を埋めることを方法的意識とする。まず、先行研究が全て同時代の基本資料としながらその全体の分析も紹介もしていない一つの文献の資料批判的検討の論述から小論は始めなければならない。

（1）Franz Nitsch, Die internationalen Arbeitersportbewegungen. in: A. Krüger / J. Riordan (Hrsg.), Der inter-

nationale Arbeitersport. Pahl-Rugenstein 1985, S. 174-209. 上野卓郎編訳『論集　国際労働者スポーツ』民衆社、一九八八年、二三六―二八六頁（抽訳）。なお、上野「国際労働者スポーツ運動の形成」、伊藤・出原・上野編『スポーツの自由と現代』下巻、青木書店、一九八六年、三七五―四〇〇頁。

(2) Herbert Dierker, Die Beziehungen zwischen Luzerner Sportinternationale / Sozialistischer Arbeiter-Sportinternationale und Roter Sportinternationale (1920/21-1928/29). in : Teichler, H. J. (Hrsg.), Arbeiterkultur und Arbeitersport. Clausthal-Zellerferd 1985. S. 159-167. これは次の単行本に加筆修正されて収録されている。H. Dierker, Arbeitersport im Spannungsfeld der Zwänziger Jahre. Essen 1990. なお、上野「スポーツインターナショナル史研究・序説」、『研究年報一九八八』一橋大学体育共同研究室編、一九八八年、でディールカー論文を論じた。

(3) David Alexander Steinberg, Sport under Red Flags : The Relations Between the Red Sport International and the Socialist Workers' Sport International 1920-1939. The University of Wisconsin-Madison, Ph. D. (History), 1979.

(4) D. A. Steinberg, The Workers' Sport Internationals 1920-28. in : Journal of Contemporary History, 13, 2 (April 1978). D. Steinberg, Die Arbeitersport-Internationalen 1920-1928. in : Gerhard A. Ritter (Hrsg.), Arbeiterkultur, Königstein/Ts. 1979, S. 93-108.

(5) D. A. Steinberg, Workers' Sport and the United Front 1934-36. in : Arena Review, 1979.

(6) 『国際スポーツ評論』(Internationale Sportrundschau) は、一九三三年八月（第一年巻第一号）から三六年一二月（第四年巻第十二号）まで発行された。なお欠号分は、第一年巻第一、二、四号、第二年巻第一二号、第三年巻第一号であり、その所蔵先は不明である。ボンには第三年巻第七―一二号と第四年巻合本の原物が所蔵されている。ライプツィヒの写真版はモスクワ、コペンハーゲン、個人所有から得られたものだという。スタインバーグ学位論文が第三局面の記述で『国際スポーツ評論』を利用したのは、第一年巻第一号と第二年巻第一号（一九三四年一月）だけである。

(7) この入手にあたって一九九四年プラハ在外研修中だった切刀俊雄氏の協力を得たが、その全巻の入手は今後の課題である。

(8) ニッチュ博士の論文における年譜的な「国際労働者スポーツにおける諸会議」での出典に一九三〇年代では特に『ＳＡＴ

USスポーツ』が多いことに注目し、その所蔵先を訊ねたことを契機に、博士所有のコピーを拝受する幸運に恵まれた。なお、注(1)の英文版（いくつか異同あり）ではその年譜的な部分のみが付録として収録された。Franz Nitsch, The Two International Worker Sport Organisations: Socialist Worker Sports International and Red Sport International. in: A. Krüger/J. Riordan (ed.), The Story of Worker Sport, Human Kinetics 1996, pp. 167.

第一部　一九三三年から三五年末まで

第一章　スポーツプレス（アクサミット）編文書の分析

一九三〇年代二つのスポーツインター関係史の基本資料として常に引用される文献とは『労働者スポーツの統一をめぐって――RSIとSASIの間の往復書簡と記録文書集成』（プラハ、発行年表記なし［一九三六年］[1]）である。先行研究はこの文献の編者をRSI書記カルロ（あるいはカレル）・アクサミットと表記するのが常であり、この表記に疑念をはさむ者はいなかった。小論はまずこの編者表記の不正確さを明らかにすることにする。

この文献の編者および発行者は、原書タイトルによれば、「スポーツプレス（カルロ・アクサミット）」である。発行年表記がないが、一九三六年に間違いはない。なぜなら、その収録記録文書は一九三六年三月のRSIプラハ国際協議会[2]のものまでだからである。発行地プラハは一九三六年当時、RSI書記局と月刊誌『国際スポーツ評論』編集

所の所在地であった。その双方を代表したのがアクサミットであるが、後者の編集所が一九三六年三月から最終号の十二月まで「スポーツプレス・フェアラーク」であることは、各号の巻末表記を見れば明白である。[3] それにもかかわらず、これまでそれを指摘した先行研究はなく、この雑誌の当該号の編集者アクサミットだけを表記してきたのである。このことがこの文献の編者表記に「スポーツプレス」を表記しない誤りと関連していたと思われる。小論ではこの文献をスポーツプレス（アクサミット）編文書と略称することにする。

すでに述べたように、この文献の全体を分析したものはおろかその概観を論じたものもなかった。単に同時代資料として部分的に利用されたのである。その編者の正確な表記もされず、全体の分析もされないまま、つまみ食いにされてきたこの文献を、小論はまず全体的に分析し、他の同時代資料とつき合わせて、この文献所収の書簡、記録文書の史料的価値を確認する。そのさいそれが他の公刊史料にもなく、ここからしか得られない資料であるのか、むしろ同様の事項に関する他の資料の方がより正確に、あるいは連関が明確に把握できるのではないか、という視点で整理する。こうしてこの文献が対象とした事柄について同時代資料の補完とともに、この文献のこの時点での運動のなかで果たそうとした意味と限界の確認が行われるであろう。

スポーツプレス（アクサミット）編文書は、一九三四年一月から三六年三月までの二つのスポーツインターの往復書簡、記録文書の公表によってその関係の統一・共同への発展を資料的に根拠づけるものであった。そしてこれによって三六年三月段階のＲＳＩの方針の正当性をも裏付けようとする意図を持っていた。

この文書は小見出しだけで編集されていて、分節化されていないため、いささか把握しづらい。小論では以下のように編別構成し直し、小論が加えた大見出しを［　］で表し、原書の小見出しを「　」で各項に配して、その典拠資料を明示していくことにする。なお一や（一）の番号は小論が加えたものである。

一「序文に代えて」――一九三六年三月七・八日のＲＳＩプラハ国際協議会でのアクサミット演説の抜粋。その全文は『国際スポーツ評論』第四年巻第三・四号（一九三六年三・四月）に掲載されている。

二「統一への新たな芽：一九三四年一月」――（一）「分裂に反対し統一に賛成して」は、一九二一年から三三年までの労働者スポーツの統一運動史の極めて短い記述。（二）「ＳＡＳＩ、ソ連スポーツ運動のボイコットやめる」は一九三四年一月六日のＳＡＳＩチューリヒ事務局会議決議の引用（他に資料あり―後述）とその解釈。

三「パリ反ファシズム・スポーツマン行進と二つのスポーツインター：一九三四年八月前後」――（一）「ＲＳＩ、パリ反ファシズム・スポーツマン行進を呼びかける」は「スポチンテルンの当時のアピール」を引用するが、これは「戦争とファシズムに反対する戦線を築こう！　万国のスポーツ実践する勤労者へのアピール」の部分引用で、この時期に予定されたモスクワ・スパルタキアードの計画中止とその代替としてのパリ行事という重要な箇所を省略したもの。この全文は、『国際スポーツ評論』第二年巻第三号（一九三四年三月）と、『政治・経済・労働運動ルントシャウ』（以下『ルントシャウ』）一九三四年第二〇号に掲載されている。（二）「ＳＡＳＩ、統一した行進に反対する」に引用されるのは『プレッセディーンスト』一九三四年五月（日付け不明）号で、これはＳＡＳＩの『国際スポーツ・プレッセディーンスト』のことである。後の（五）でこの引用報道は「五月決議」と呼ばれる。（三）「パリ集会準備委員会のＳＡＳＩへの返信」は、日付けなしだが、後の（五）で一九三四年七月九日と判明する書簡であり、『国際スポーツ評論』第二年巻第八号にも掲載されている。（四）「ＳＡＳＩ会員、パリ集会に賛成」は資料引用なしの記述で、これは他の資料でも確認できない。（五）「ＳＡＳＩのパリ委員会への書簡」は、また日付けなしだが、後の四の（一）から一九三四年八月初めという日付けが判明する。さらに『プレッセディーンスト』一九三四年八月一〇日号の記事の指摘、それへのコメント。ここでＳＡＳＩ書簡を「八月決議」、先の（二）のものを「五月決議」と呼び、

両者を比較している。(六)「統一一色のパリ・スポーツマン行進」は、『国際スポーツ評論』第二年巻第九・一〇号(一九三四年九・一〇月)からの再録と言われるが、アクサミット「パリ・スポーツ集会の成果について」とは明記されていない。

四［統一交渉への始動：一九三四年九―一二月］――(一)「RSIのSASIへの統一申し出」は、一九三四年九月だけで日が表記されていないが、次の(二)で二二日と判明するSASI事務局とSASIカールスバード総会への長文の書簡。他の資料にもある(後述)。(二)「カールスバードでのSASI総会」には、チェコ社会民主主義新聞『プラーヴォ・リドゥ』(日付けなし)の報道(この記事を引用した『国際スポーツ評論』第二年巻第九・一〇号での「ルツェルン・スポーツインターナショナルの総会」によれば、一〇月九日)、総会決議の引用、SASI幹部会のRSIへの書簡(日付けなし。総会閉会日発送というSASI資料により一九三四年一〇月七日と確定できる。)の引用がある(これらも上記『国際スポーツ評論』論説にある)。(三)「RSI、カールスバード決議について」には、SASI書記シラバのRSIへの書簡(一九三四年一〇月二六日)とRSI書記局の返信(日付けなし)、『プレッセディーンスト』一九三四年一二月末(ママ)号の記事の引用がある。

五［最初の交渉：一九三五年三月一日、プラハ］――(一)「SASIとRSIの間の交渉」は、RSIとSASIのそれぞれの協定提案を収録するが、他の資料で確認できるこの交渉のプロトコルやコミュニケについては言及していない。(二)「RSIの新たな提案」は、一九三五年四月一二日のショルダクとアクサミット署名のSASI事務局への書簡で、他にアルヒーフ英文異文書簡が次の(三)のそれとともに存在する。(三)「SASIの返答」は、三五年四月一六日のドイチュとシラバ署名のRSIへの書簡。(四)「RSIはその努力を続ける」は、三五年六月二日のショルダクとアクサミット署名のSASIへの書簡。(五)「カール・ビューレン、SASI技術部長としての役職

を辞任」には、三五年六月（原書には日の表記なし）のビューレンのSASI会員への声明からの引用があるが、その全文はビューレン（モスクワ）「誰が統一を阻んでいるか？」『国際スポーツ評論』第三年巻第八号（三五年八月）である。

六［二度目の交渉：一九三五年九月六日、プラハ］――（一）「新たな交渉を前に」は、三五年六月二一日のSASIのRSIへの書簡と、三五年六月二九日のアクサミットのSASIへの書簡を含むが、これは他の資料（後述）にも収録されている。（二）「RSIとSASIの代表の二度目の会合」は、交渉の結果の総括としてのRSI執行委員会のSASI事務局への書簡（日付けなし）である。日付けは他の資料でも特定できないが、書簡の中で「アビシニア人民に対するイタリア・ファシズムの戦争」との言及があり、三五年一〇月三日がイタリアのアビシニアへの公然たる侵攻開始であることから、この時期であると推定される。この交渉総括についてはアクサミット「統一への序幕（SASIとRSIの間の交渉について）」『国際スポーツ評論』第三年巻第一〇号（三五年一〇月）がプロトコル的な報告をし、（二）では収録されていない二つのスポーツインターの「ベルリン・オリンピック・ボイコット」共同アピールがここに収録されている。

七［SASIプラハ国際協議会：一九三五年一一月三〇日・一二月一日］――（一）「SASIの国際協議会」は、その概要記述と決議の引用。（二）「労働者スポーツの統一――差し迫った必然性」（ショルダク演説再録）は、SASI国際協議会でのソ連代表ゲストとしてのショルダクの演説の再録である。原書の小見出しは、「SASI諸連盟とのソ連の身体文化運動の協同」、「ブルジョア・スポーツ連盟チームとのソビエト・スポーツマンの対戦の問題について」、「一九三六年ヒトラー・オリンピアードに対する闘争の問題」、「外交でなく、ヒトラー・オリンピアードに反対する大衆動員を」、「一九三七年アントワープ労働者オリンピアードの共同の実施に関して」、「労働者スポーツの統

一の問題」である。(三)「ソ連へのSASI代表団に関する提案」は、三六年一月二一日のSASIのソ連身体文化最高評議会への書簡で、三度目の交渉のモスクワでの可能性を示唆する。

八「一九三六年三月段階のRSIの方針」――(一)「スポチンテルンは統一をめざす闘争の強化を呼びかける」、(二)「スポーツ運動の当面の任務についての決議から」のいずれもRSIプラハ国際協議会の決議であるが、他の報告・決議を含む全文が『国際スポーツ評論』第四年巻第三・四号(三六年三・四月)に掲載されている。

以上が、スポーツプレス(アクサミット)編文書の編別構成と各項目の資料である。この中で他の資料にも触れた項目の他に、言及するのを後回しにした項目についてこれから資料調査の結果を記していこう。

二の(二)での一九三四年一月六日のチューリヒSASI事務局会議決議は、『オーストリア労働者トゥルネン・スポーツ新聞』第十一年巻第一号(三四年一月)のこの会議の報道(会議日付けなし)の中で、「ルッセンシュピーゲル(ロシア人競技)」の項目に文書引用と同文のものが再録されている。一方、スイスの『SATUSスポーツ』第二五年巻第三号(三四年一月十七日)の報道では、会議日付けを「一月六・七日」と記しているが、決議は掲載していない。

三の(六)に関連する資料に、『ルントシャウ』一九三四年第四四号の「赤色スポーツインターナショナル、国際解放委員会への公式の加入を決議」でのRSIの解放委員会への書簡(日付けなし、七月二二日以前と推定される)と解放委員会書記局のRSIへの返信(日付けなし、RSIの書簡七月二二日受理とある)と、同誌第四五号の「パリでのファシズムと戦争に反対する国際スポーツ集会」の記事がある。なお、この時期の重要な資料として一九三四年六月のRSI執行委員会アピール「国際スポーツ統一戦線の基礎――万国の勤労スポーツマンと組織へのアピー

ル」『国際スポーツ評論』第二年巻第七号（三四年七月）特別付録七頁分を取り上げるべきである。ここで初めてベルリン・オリンピック準備への反対闘争への共同を中心とする国際プロレタリアスポーツ統一戦線の方針が打ち出されているからである。四の（一）は、『国際スポーツ評論』第二年巻第九・一〇号（一九三四年九・一〇月）と、『ルントシャウ』一九三四年第五三号に、全く同一のものが「社会主義労働者スポーツインターナショナルの事務局と総会へ――全ての勤労者スポーツマンへ！」（RSI執行委員会書記局の呼びかけ）のタイトルで掲載されている。

四の（二）ではロンドン文書館所蔵のイギリス代議員エルヴィンのレポートがある。

五の（一）は、『国際スポーツ・プレッセディーンスト』一九三五年三月四日号の「プラハでのSASIとRSIの最初の交渉」の記事と、『ルントシャウ』三五年第一五号の「労働者スポーツ運動の統一をめぐって」の論説での二つのスポーツインターの協定提案再録で補完される。前者が「コミュニケ」を公表しているのに、後者はこれを取り上げていない。プラハの文書館で発掘された「一九三五年三月一日、プラハでのSASIとRSIの共同会議のプロトコル」と三つの添付文書（二つは双方の協定提案、もう一つがコミュニケ草稿）を見ると、コミュニケ草稿は手書きで「SASIとRSIの審議（公式コミュニケ）」とタイトルが付けられていて、内容は『国際スポーツ・プレッセディーンスト』で再録されたものと同一である。草稿の最後の一行の一部の判読不明箇所が再録によって判読できるということも記しておきたい。

五の（二）と（三）は、ロンドンの文書館で発掘された同一日付けの英文書簡が幾分異なる形で内容を短く記したものとして参照される。RSIからの書簡の発信地がここではストックホルムと明示されている。（四）は、『国際スポーツ評論』第三年巻第七号（一九三五年七月）の「労働者スポーツにおける統一はやって来るか？　一九三五年六月二日のRSIのSASIへの書簡」と同一であるが、この掲載の「編集者後記」が資料的に重要である。（五）は

既述のように『国際スポーツ評論』でのビューレン論説が補完されるべきだが、この中で、一九三五年四月二〇日のビューレンのＳＡＳＩ事務局への書簡が再録されている。

六の（一）に関して、『ルントシャウ』一九三五年第三六号のアクサミット「赤色スポーツインターナショナルと社会主義スポーツインターナショナルの間の新たな統一交渉を前に」と、『国際スポーツ評論』第三年巻第八号（一九三五年八月）の無署名論説「新たな統一交渉を前に」が、幾つかの異文を含みながらもほぼ同様の内容を記している。無署名論説の筆者がアクサミットであることは明らかであるが、ここでは異文が重要である。

七に入る前に、スポーツプレス（アクサミット）編文書が収録しなかった重要な論説の所在を指摘しなければならない。それは、『国際スポーツ評論』第三年巻第一一号（一九三五年一一月）のアクサミット「労働者スポーツマンとスポーツ人民戦線」である。

七の（一）、（二）に関して、『国際スポーツ評論』第四年巻第一号（一九三六年一月）の「ＳＡＳＩの国際協議会とその決議」が若干の異同を含んだ論説となっている。これは、スポーツプレス（アクサミット）編文書が収録しなかった一九三六年二月のドイチュ・アクサミット論争の引き金となった論説である。

八については既述の通り、『国際スポーツ評論』第四年巻第三・四号（一九三六年三・四月）――これはいわばＲＳＩプラハ国際協議会特集号である――によって詳しく把握できるし、そうしなければならないが、これに関わるプラハ文書館資料からの発見資料が合わせて見られなければならない。それは、「スポチンテルンの第七回プレナム決議」というタイプ稿で、内容からその時期は一九三六年二月中旬から三月初めまでのものと推定される。さらに関連する重要資料として、ロンドン国立労働史博物館から発見された『スポーツプレス』第七号（プラハ、一九三六年三月一二日）がある。これはＲＳＩ国際協議会の速報版である。同時にこの博物館から発見されたこの協議会に関する

「ジャクソン・メモランダム」も、いくらかイギリスに引き寄せたメモだが、参照すべきであろう。ボンの社会民主主義アルヒーフ所蔵の「ＳＡＳＩ幹部会議プロトコル」（日付けなし、手書きで「一九三六年春」とある）に、ＲＳＩ国際協議会と関連する報告が見い出される。なお、これまで挙げた資料の原文表記は小論での引用のさいに注記する。

結局、スポーツプレス（アクサミット）編文書からしか読むことができない資料は、次の四点である。すなわち、三の（二）の『プレッセディーンスト』一九三四年五月（？日）号でのＳＡＳＩ通知、（五）のＳＡＳＩ書簡（三四年八月初め）、四の（三）のシラバのＲＳＩへの書簡（三四年十月二六日）とＲＳＩ書記局の返信（日付けなし）。これらは『国際スポーツ・プレッセディーンスト』の一九三四年巻が入手できれば、ほとんど確認されると思われる。

これまでの分析から総括的にスポーツプレス（アクサミット）編文書を特徴づければ、大半すでに同時代公刊物に掲載された書簡・決議・報告・論説の選択的集成であり、これによって関連・補完資料の調査が可能になる同時代の第一級の展望台的文書であると言うことができよう。しかし、これをそのまま第一次史料とすることには批判的にならざるを得ない。ましてこれが収録する資料の時期を越えて一九三〇年代全体に関わるスポーツインター関係史文書として位置付けることは、誤りである。あくまでも一九三四年から三六年初頭までのものとして限定されて初めて上記の特徴づけができるのである。

さらにこの文書の特徴として指摘すべきことは、「ソ連への配慮」とでも言うべき面があることである。それはＳＡＳＩプラハ国際協議会でのショルダク演説の再録に見ることができる。この時ショルダクはＲＳＩ代表としてでなくソ連の代表としてゲスト出席し演説したのであり、ＳＡＳＩもそうしたものとして出席、演説をショルダクに許していた。実はＳＡＳＩの側もソ連とＲＳＩとの関係を使い分けようとした。つまり、国家機関としてのソ連身体文化

最高評議会とのパイプは維持しつつ、ＲＳＩとは直接的な関係を結ぶことをなるべく避けようとしたのである。このＳＡＳＩの「使い分け」戦略、この時点でのソビエト・スポーツの国際関係における二つのスポーツインターの位置付け、あるいは国際スポーツ運動への関わりという問題もスポーツインター関係史の論点の一つである。「虚構の理想化」イデオロギーの片鱗を伺わせるショルダク演説の再録によって「ソ連への配慮」を実証することはできる。これはしかし、当時の国際共産主義運動の一組織としては当然のことであったとも言える。すなわち、歴史的制約ということなのであり、文書はそれを反映しているにすぎない。そのかぎり敢えて特徴とするのは不当かもしれないが、スポーツインター史の論点と関わるので、やはりこの点は取り上げるべきだと考える。

最後に、労働者スポーツと人民スポーツの思想のＲＳＩあるいはアクサミットの展開を見るにはこの文書は不十分であると言わなければならない。

（1）　Um die Einheit des Arbeitersports. Briefwechsel zwischen der RSI und der SASI und Dokumentensammlung. Herausgeber: Sportpress, (Carlo Aksamit) Praha II, Tešnov 4. o. J. [1936] 以下、Sportpress, (Aksamit), ibid. と表記する。この文書はプラハのチルシュ博物館文書部から得られた。なお、ニッチュも他の先行研究と同様の編者表記をしていた。

（2）　ニッチュはこれを「ＲＳＩ第五回大会」としたが、誤りである。Nitsch, ibid., S. 206. [上野編訳、二七七頁]　――当時その誤記を明らかにすることができなかったのは、原資料を入手していなかったためである。

（3）　『国際スポーツ評論』の一九三六年三月から一二月までの巻末表記は次の通りである。「『国際スポーツ評論』は月に一回発行。一部販売価格：一・五〇Ｋｃ。年決め予約：チェコスロヴァキアー一三Ｋｃ、外国―二〇Ｋｃ。発行人・編集責任者：カレル・アクサミット。編集・管理・発行：スポーツプレス・フェアラーク。プラハⅡ　テシュノフ、四―Ⅱ。電話：六三八―一五。郵便貯金口座：一九〇六六　カルロ・アクサミット、プラハⅡ。印刷：Jar, Seß und Comp、プラハⅠスチェパン

スカ　二四。新聞印紙付きの郵便発送のために、Nr. 59. 395-VII-1936の下での郵務局の裁決によって許可される。差し出し郵便局プラハ25」。

一九三五年までのコペンハーゲンからプラハに移転したばかりの『国際スポーツ評論』第四年巻第一号（一九三六年一月）の巻末表記は次の通りであった。「発行人・編集責任者エミール・フルシェル。編集・管理：プラハⅡテシュノフ、四―Ⅱ。印刷：Jar, Seß und Comp.、プラハⅠスチェパンスカ　二四」。第二号（二月）ではフルシェルに代わってアクサミットの名前が入るだけで、あとは全く同じである。

第二章　関係改善形成史――一九三三年から一九三四年まで

「統一をめざす闘争は決して新しい問題ではない。我々は過去年間も繰り返しこの問題に真剣に取り組んできたし、労働者スポーツ運動の統一を創造するスポチンテルンの年来の努力はよく知られている。しかし今我々は別の政治的状況に生きている。全般的状態での変化は我々の課題の解決にとっても新しい条件を作り出し、我々にその時々の課題を、与えられた状況に応じて、新たに具体化することを求める。今日の状況から出発すれば労働者スポーツ運動の統一は前よりももっと時間の命令である」。「フランスとスペインの輝かしい実例は我々に、統一した労働者スポーツ運動がスポーツにおける反動を駆逐することができ、その国のスポーツ生活での決定的要因になることを示している」。「統一の反対者はＳＡＳＩの内部でまだ強い影響を持っている。それに対して我々は、常に統一への発展を促進しようと思う全ての者と進み、ＳＡＳＩ内部の勢力を支援する用意があることを強調するものである。疑いなく今日までＳＡＳＩとスポチンテルンの間の関係は改善されており、我々はそれが今後も改善されるという希望を表明する。

我々の間に原則的な意見の相違があるが、それは労働者スポーツ運動の利益にとって共同の闘争を進めるいかなる障害でもある必要はない」。「我々は今後もＳＡＳＩと協議する用意があり、協議の積極的な成果も期待する。だがどんな場合も各国で協議の成果だけを待ってはならない。インターナショナルの協議とは独立して、スポーツマンの要求の実現のための統一的な行動を、しかしとりわけヒトラー・オリンピアードに反対する共同の闘争を進めることが重要である」[1]。――これはスポーツプレス（アクサミット）編文書の「序文に代えて」（一九三六年三月七日のＲＳＩプラハ国際協議会でのアクサミット演説の抜粋）からの引用である。ここで「関係改善」という二つのスポーツインター関係史の段階と展望が示されている。それでは「関係改善」の形成の前史はどのように記述されているか、同文書の二の（一）を見よう。

「数十万の労働者スポーツマンが、一九二一年（チェコスロヴァキア）、一九二二年（フランス）、一九二七年（フィンランド）、一九二八／二九年（ドイツ、スイス、チェコスロヴァキア、アルザス・ロレーヌ、イギリス）、一九三〇／三一年（ノルウェー）など、彼らが作った連盟からその意志に反して社会民主主義指導者によって排除された。同時に労働者スポーツ運動の革命的部分に対する闘争に被さったのがソ連のスポーツ運動に対するボイコットであった。労働者農民スポーツ組織国際連盟（スポチンテルン）は労働者スポーツの全てのこれらの革命的勢力をその旗の下に結集し、精力的に労働者スポーツ運動における分裂政策に対して闘った」。「その後の数年の出来事はスポチンテルンが正しい闘争を進めたことを示した。例えば一五〇万の会員を持つ誇るべきドイツ労働者スポーツ運動をその指導下に集めたドイツにおける統一の最大の反対者ゲラート、ヴィルドゥンク等がヒトラーの前で惨めに降伏したことが示された。ヒトラー・ファシズムに対する闘争でドイツ労働者スポーツマンはその隊列を再び繋ぎ始めていたのに、彼らは、ナチスがその奉仕を見合わせた後では、消極的態度に引きこもった。一九三三年ドイツでの、その後のオー

ストリアでの出来事は国際労働者スポーツ運動を新しい状況の前に置き、労働者スポーツの統一の確立をめざす闘争にとって新しい展望が開かれたのである」[2]。

とすれば、やはり「画期」としての一九三三年ヒトラー政権によるドイツ労働者スポーツ運動解体に直面した二つのスポーツインターの認識・態度を知る必要がある。これは従来の研究が示さなかった資料によって示される。

第一節　一九三三年の二つのスポーツインター

①　SASIプラハ国際事務局会議（三三年五月）

SASIについては、ボンの社会民主主義アルヒーフ所蔵の『社会主義労働者スポーツインターナショナル通信』第二号（一九三三年五月）の「一九三三年五月六日、プラハでの社会主義労働者スポーツインターナショナル国際事務局会議に関する議事録[3]」（プロトコル担当ハンス・ガストゲープ）から見ることができる。

開会挨拶でドイチュが、「共産主義者が繰り返し幾つかの国でスポーツマンとの統一交渉を引き起こそうと試みていることを伝えた。社会主義労働者スポーツインターナショナルはチューリヒの社会主義労働者インターナショナルの土台に立っている。政治党派が国際的基準での交渉に入るならば労働者スポーツインターナショナルはこの決議に従うだろう。独自の交渉を進めることや国毎の交渉を可能にすることは拒否されねばならない」と述べ、これは「承知された」という（一頁）。創立以来の会長ブリドー（ベルギー）は欠席。「今回の議長代理にデヴリーガーが指名された。幹部会を代表してドイチュが報告した」（二頁）。そのドイチュ報告は次の通りである。

「我々がリエージュで前回の総会に集まった時［一九三二年］、今日の状況は実際に誰も予見することができなかった。ドイツ労働者スポーツ運動は抑圧された。だが今日ドイツの同志が誤りを犯したかどうかについて語るべきでは

ない。誤りは常に犯されるであろう。現実に大きな歴史的過程が雪崩のような速さで起こった」。「ドイツにおける出来事が社会主義の最後を意味するというのは真実ではない。それは闘いにおける一つのエピソードである。反革命はたしかに今ドイツで勝利している。だが反革命に再び革命が続くであろう。ドイツの労働者スポーツ運動は今ここに代表を持っていない。今やまさに言わなければならぬ。民主主義の価値は今や全世界の労働者階級によって認識されるだろう。民主主義が擁護されねばならない。労働者スポーツ連盟は恐慌にもかかわらず極めて良く保ち、多くの所で、また多くの国で重要な進歩をこの数か月達成することができた。ドイツの出来事はオーストリアにも遡及した。オーストリアで党の個々の組織が解散させられた時でも活動は継続され、オーストリア労働者階級はびくともせず生き生きとしていると言うことができる。オーストリア労働者階級はあくまで闘わずに挫かれることはないだろう。我々はオーストリア労働者階級の獲得物を擁護し、赤いウィーンを擁護する」（二一―二三頁）。ドイツでの敗北の責任は問わない、次の決戦場はオーストリアだという認識が確認できる。次にこの時期の各国の運動の状況についてシラバの報告が概観を伝える。

要約的に引用すれば、ベルギーでは運動は良好な進歩、リエージュでの総会でフットボール・ゲームでの観衆の教育の問題に従事、救急隊の組織化着手、フランス労働者スポーツマンは販売組織設立、婦人スポーツ運動に取り組み、同盟祭典を三三年にゲプヴァイラーで予定、イギリスはドイツの情勢を残念に思いイギリスでの労働者スポーツのための宣伝強化が軌道に乗ったことを伝え、スイスではそこでのファシズム運動が住民の中で特別な土台を見出していないが、二万三千フランの国家の補助金が取り消されたこと、フィンランドでも一九三二年以来国家の補助金が取り消されたが、活発なスポーツ活動が存在すること、チェコスロヴァキアではメーデーが華やかに始められ、国家が労働公債を発行、ファシズム運動は国家によって全ての方向の民主主義党派の助けで効果的に克服され、ＤＴＪは三四

年に同盟祭典を準備していること。「他の国からはこの間いかなる報告も届かなかった。特別な一章はドイツである。ガストゲープはSASIの委託で三月にライプツィヒとベルリンに出かけ、「ATSBライプツィヒ」同盟学校の思い掛けない「ナチスによる」占拠のまさに一日後に着いた。ドイツの同志はインターナショナルのために活動することができないから、今や交替されねばならない。我々は大きな損害を受けた。SASIは今や一九二〇年のルツェルンでのように八〇万の所属者だ。だが我々は二四連盟であり、力強く引き続き活動しなければならない」（三頁）。「プレッセディーンストは今やアウシッヒで発行されている」（四頁）。

ミューラーが発言し、「私はプレッセディーンストの指導部を引き受けた。だが、各国からの資料の供給は非常に乏しい。チェコスロヴァキアのドイツ国境地域はヒトラー宣伝に強力に晒されている。（中略）チェコスロヴァキアのドイツ労働者トゥルネン・スポーツ同盟では再びしばらくの間共産主義者の統一戦線マヌーバーが前面にあった。組織指導部はこの運動をつけ上がらせないことができた」（四―五頁）という。一方、デヴリーガーが「ベルギーとフランスでは労働者スポーツ組織の状態は良好である」と述べ、「フランスでの我々の運動は北フランスでも南フランスでも、アルザスでも大きな進歩をした。（中略）ブルジョア民主主義はなおその伝統を保っている。メーデーでは至る所で十分な闘争精神があった。共産主義者も条件を付けずに我々と行進した。共産主義者問題は現在我々のところではアクチュアルではない。我々は我々の組織からインターナショナル全体でドイツのより厳しいボイコットを考えに入れることを提案する」（五頁）という注目すべき認識を示した。

カルニンがバルト三国について要約次のように報告。ラトヴィアで六百人の会員増加、国家補助金は従来通り、農民同盟が民主主義的であり続けるかぎりファシズムには土台がない、議会は全ての国民社会主義者を国外追放する法律を採択し、ファシズム全国組織は禁止された、我々のスポーツ同盟は平穏だ、エストニアでのスポーツ活動は良好

で、ラトヴィアの防衛同盟の手本に従って小国でも防衛同盟を編成した、リトワニアでは我々は何らの組織も持たず、社会主義青年組織がスポーツセクションを設置、特別な状況を持つメーメル地域とは良好な結びつきが存在する。我々はどんな場合も他の国でドイツの同志への顧慮によってヒトラーと国民社会主義に厳しく挑戦し、厳しい言葉を使うことを思い止まってはならない。ヒトラーはドイツだけでなく国際的な危険だからだ（五―六頁）。

スカンジナヴィアについてコスチアイネンが報告、「ノルウェーでブルジョア・スポーツマンが三月五日までに大勢一塊になって我々の労働者スポーツ組織になだれ込んだ。三月五日にヒトラーが勝利したとき、ノルウェーの同盟は仲介者によって再びモスクワと交渉した。ノルウェーではドイツ労働者運動のことに非常に腹を立てこの印象の下に共産主義者と再び交渉した。ノルウェーでの政治的啓蒙は首都を例外として非常に弱い。スポーツ政策を我々の軌道に導くために私は私の帰り旅でノルウェーと再び結びつきを取ろうと思う。スウェーデンでは運動はゆっくり前進している。公式の党と労働組合の機関は労働者スポーツに反対している。労働者スポーツが支点を持つのは青年と婦人の組織だけだ。フィンランドでは政治的状態は公的にはラトヴィアと同様である。だが非合法にはファシズムは非常に活発だ。ファシストは再び一揆を計画している」（六頁）。

ガストゲープがＳＡＳＩへのオーストリアＡＳＫÖの要求を提起、「ＡＳＫÖは三月五日の後、労働者スポーツインターナショナルの状態［の分析］に取り組み、いくつかの要求を提起した。すなわち、一、国際プレッセディーンストと国際通信はチェコスロヴァキアで発行されるべきだ、二、インターナショナルで活動できないドイツの同志は他の同志によって置き換えられねばならぬ、三、必要ならインターナショナルの財政的支援でももっと強力な国際スポーツ交流を、というものだ。ＡＳＫÖの委託で私はプラハ、ライプツィヒ、ベルリン、アウシッヒを訪れた。三月に提起されたこの要求は今日無条件の必然性になった。（中略）ＡＳＫÖの部分組織が解散させられ、あるいは当局

によって活動が中止されても、別の形で活動がなされている」（六頁）。

この会議で会長に選出されたギュルヴィクの発言は重要である。「状況は確かに難しいが、悲観的になるいわれは全くなく、むしろ楽観論者であり続けねばならない。私はドイツの同志の不在を残念に思う。私は決して有罪宣告をしたくはないけれども、ドイツの同志が理念よりも組織を高く置いたことは確認されねばならない。プロレタリアートはドイツで何が起きているかを知らねばならないし、国際プレッセディーンストは真実を報告しなければならない。幹部会は補充されねばならない。このためには総会しか権限がないけれども、重大な状況のため今日行われねばならない」。「我々が今日実施する人事変更は単に臨時的な、次の総会までのものとみなされ得る。もっと多くの国民を事務局に引き入れねばならない。だが私は、ドイツ労働者スポーツ運動が再び自由になるときそれがインターナショナルの指導部におけるふさわしい地位を与えられるだろうと確言することができる」（六―七頁）。

ドイツから提出された報告（無署名）、「［労働者スポーツ・身体育成］中央委員会［ZK］はドイツ帝国身体運動委員会への受け入れを可能にするために帝国身体運動委員会と交渉した。内相フリッケの指令で受け入れは拒否された。労働者トゥルネン・スポーツ同盟はその会館［ライプツィヒ］の占拠のためだけに帝国政府機関に抗議した。ZKの請願は、指導的同志が約二五〇〇万から三〇〇〇万マルクのドイツ労働者スポーツの財産を守ろうと思ったことを考慮すれば当然であろう。ドイツの同志の規律は非常に大きかった。闘争への指令はなかった。だが青年は再び闘おうとし、組織を再建するために絆を結ぼうと思っている。同盟の所有は完全に抵当に入っておらず、今や国民社会主義者の手にある。スポーツ上の国境の往来は保持されねばならない。多くの同志は社会民主主義とインターナショナルに忠実であり続けている」（七頁）。――だが、この「弁明」についての議論の記録はなく、「ドイツの同志によって占められていた役員の充当」について議論され、次のように決議された。ギュルヴィク（パリ）が会長に、ミュ

ーラー（アウシッヒ）が事務局で協力し国際スポーツ・プレッセディーンストの指導部を任され、デヴリーガー（リエージュ）が技術部長代理に、ガストゲープ（ウィーン）が監査委員会に選ばれ、役職全部は次の総会までとされた。こうしてゲラートの会長が解任され、ドイチュ会長、シラバ事務局長は留任した（七頁）。

会議は、「ＳＡＳＩとドイツ」（ドイチュ、シラバ）、「ＡＳＫＯへの表明」（シラバ、カルニン）、「我々は世界労働者スポーツデーを祝う！」（ドイチュ、シラバ）の三つの決議を「ＳＡＳＩの事務局を代表して」の各署名を付して採択した。このうち「リエージュでのＳＡＳＩの第六回総会の決議に従って（中略）六月二五日、初めて世界労働者スポーツデーを祝う」第三の決議から次の部分を取り上げよう。

「確かにかつて強力な労働者スポーツ運動を示した一つの国では世界労働者スポーツデーが我々の精神で祝われることができないであろう。ヒトラードイツでは社会主義スポーツは土台を失った。このヒトラードイツからは文明化した世界全体がその共感を奪う。ヒトラーの恩寵による国民社会主義者によって進められる強制的同一化された民族的スポーツ組織とは、世界は、特に労働者スポーツマンは、いかなる交流も保持することができないであろう」（九頁）。

なおこの会議でデヴリーガーがアントワープでの第三回労働者オリンピアードの準備活動について報告し、「ベルギーで一九三七年と定めるには不明確な情勢にもかかわらず、討論の後一致して決議された」。さらに、「冬季オリンピアードの開催にはスイスが予定され、スイスの連盟がこれに関する提案を事務局に報告することを委任された」（九頁）が、これは後にチェコスロヴァキアに変更されることになる。

② ＲＳＩアムステルダム国際指導協議会（三三年九月）

ＲＳＩについては、『国際スポーツ評論』第一年巻第三号（一九三三年一〇月）の「スポーツ運動の国際的状態とＲＳＩの任務」[4]（一九三三年九月ＲＳＩ国際指導協議会の決議）、「万国のスポーツ実践する労働者へ！　赤色スポーツインターナショナルの協議会の呼びかけ」（これは『ルントシャウ』一九三三年第三四号にも掲載[5]）を要約的に引用しながらこの時期の認識と方針を確認することにする。

前者は七項目にわたって情勢と任務をテーゼ的に論じている。（一）「ソビエト同盟における社会主義建設の成功によって支えられる革命運動は――ドイツにおける労働者階級の一時的後退は別として――成長し、ブルジョアジーの社会的支柱である社会民主主義の側での労働者階級内部の分裂を克服している。資本主義世界は加速的テンポで新たな戦争と革命に近づいている」。（二）「ブルジョアジーは彼らのファシズム軍隊に適した予備軍の養成を配慮している。この分野での彼らの最も強力な手段の一つはスポーツであり、その役割は資本主義的恐慌の時期における大衆のファシズム化と軍国主義化のための安上がりな手段として極めて重要である」。「ブルジョアジーは時折警察的な様々な手段をスポーツによる兵役前教育の義務的導入、学校での軍事スポーツ的要素の導入、労働キャンプの創出の形態で用いている」。これは「一般に労働者スポーツマンに、特にブルジョア連盟にいるスポーツ実践する労働者にも激しい抵抗に出会っている」。「ブルジョアジーはその結果として労働者スポーツ運動を完全に抑圧することに移行し」、「民族ファシズム的、改良主義的スポーツ組織内部での彼らの活動を強めている」。（三）「改良主義的ルツェルン・スポーツインターナショナルは同様にドイツでの彼らの運動を闘わずにファシズムに引き渡した社会民主主義スポーツ指導者の裏切りの結果として危機に陥った」。ドイツでの裏切りを「社会民主主義スポーツ指導部の分裂政策の論理的帰結」と労働者スポーツマンは見ている。大衆は「ＬＳＩ指導者を見捨て始めている」。「大衆へのその影響の沈下を食い止めるためにＬＳＩの指導者は今や左翼的なマヌーバーの助けで反ファシズム闘士としての仮面を被ることを

試みている。彼らの本性を大衆の前に暴露し、スポーツ実践する大衆への彼らの影響を清算することは現在の時期での全ての労働者スポーツマンの中心的任務である」。（四）「ブルジョア・スポーツの始まりつつある危機、ＬＳＩの政治的破産、ファシズム的・改良主義的スポーツからの大衆の離脱の最初の兆候等々は我々に、危機からの革命的出口のための闘争への労働者スポーツマンの隊列の革命的統一の確立にとっての最良の客観的前提を作っている」。（五）「すでに叙述されたスポーツ運動の状態との連関で、ブルジョアジーは労働者スポーツ運動に対するテロルと迫害措置を増している。これが部分的に現実の大衆組織への労働者スポーツ連盟の転換を困難にしている」。「資本主義世界恐慌の数年にＲＳＩは一連の国々で新しい組織を作ってきた」。「ドイツの赤色スポーツ運動は生き続け、労働者スポーツマン大衆をヒトラー独裁に反対しソビエトドイツのための闘争に動員している」。「ＲＳＩはその隊列においてすでに労働者スポーツの前衛を統一しているが、これは不十分である。そのセクションを大きな大衆運動に転換する分野では確かに重要な成果が記録されるべきだが、それはまだ果たされなかった。それは将来にとっても主要任務の一つとして残っている」。（六）「一九三四年モスクワでのＲＳＩの世界スパルタキアードの準備」が「全ての実践的活動の中心点でなければならない」。「世界スパルタキアードまでの段階に全てのスポーツ実践する労働者の統一戦線を確立することが相変わらず主要任務であり続ける。一九三三年秋の数か月は我々の組織の現状の自己批判的検査、全ての分野での大衆活動の展開、地方的地域的規模での大きな大衆スポーツ行事と来夏のうちの企業スパルタキアードの準備に活用されねばならない」。（七）「これらの任務の成就と平行して国際スポーツ章『プロレタリア階級闘争への準備』の普及の強化とプロレタリア的能力試験の組織化が進む」。「ロシア一〇月革命の記念日の一九三四年一一月七日までにＲＳＩのどのメンバーも国際スポーツ章を持とうとの合言葉を提起することが肝心だ」。

これと同時に「一九三三年九月初め、赤色スポーツインターナショナルの国際協議会の代議員一同」の名で出され

た後者の「呼びかけ」は、「ドイツの赤色スポーツ統一闘争共同体の代表の報告を受け取った後、血まみれのヒトラー独裁の確立と結びついたドイツの出来事に立ち入って従事した」として、次のように述べた。

「ドイツでファシズムに道を用意したのは誰か。資本主義に対する統一的なプロレタリア闘争戦線の創造を体系的に妨げたのは社会民主主義ではなかったか。ヒトラーによる権力掌握の瞬間にさえ全ての勤労者のゼネラルストライキを妨げたのは社会民主主義指導者ではなかったか。その創立四〇周年の年にドイツ労働者スポーツ運動をファシズムに自発的に引き渡したのは誰か。少しの抵抗もせずに数百万の運動をファシズムレジュームの前への降伏に導いたのは社会民主主義スポーツ指導者である。他のボスと一緒にドイツ労働者スポーツ運動を裏切ったのは改良主義ルツェルン・スポーツインターナショナルの会長ゲラートである」。この後、RSIが統一戦線のために闘ったし闘うことが表明され、「万国のスポーツ実践する労働者！　ドイツ労働者スポーツマンの英雄的闘争を支援しよう！　ドイツの労働者スポーツ運動のための国際連帯基金への募集を組織しよう！　監獄と強制収容所にいるファシズムの犠牲者の解放のために尽力しよう！　テールマン、トルグラー、ディミトロフ、数万の反ファシストを連れ出そう！　改良主義連盟の労働者スポーツマン！　全ての国で同じ裏切りを犯している諸君の社会民主主義指導者の責任を取らせよう！　赤色スポーツインターナショナルの旗の下に結集しよう！　一九三四年モスクワでのRSIの世界スパルタキアードの準備をしよう！　力強い国際的に統一した反ファシズム・スポーツ戦線を作ろう！」という訴えで終わっている。

ここでのRSIの認識は各国の状況分析も具体的な共同の展望も欠如した「改良主義指導者裏切り者」論であった。したがって、一九三三年秋の時点では二つのスポーツインターにいかなる関係も生まれることはなかった。翌年一月のSASI決議、二月のオーストリア、フランスの出来事とRSIの新たな提案によって状況も認識も変化する。

第二節　関係改善の始まり――一九三四年初頭から夏まで

①　SASIチューリヒ決議（三四年一月）

一九三四年一月六日、チューリヒでのSASIの事務局会議は次の決議を採択した。

「以前に決議された方針を保ったままで、ロシア国家連盟（ママ）との競技会を開催することは各国の自由裁量に任される。決議は追って沙汰あるまで効力があり、連盟はそれぞれの競技ののち報告すべきである。いかなる共産主義的扇動も止めなければならない。個々の国々の反対派グループとの競技と競技会は許されない[6]」。

これに対してスポーツプレス（アクサミット）編文書は次のように解釈した。「この決議によってSASI指導部はそれ以前の会議、特にヘルシンキ（一九二七年）とプラハ（一九二九年）のSASI総会ならびにウィーン（一九三〇年）の事務局会議の、ソ連のスポーツ運動をボイコットする通達を廃棄した。この決議は、一方でソビエト同盟に対するSASIスポーツマンの共感の増大と、ソビエト・スポーツマンと関係を持ちたいという彼らの要求の結果として成立し、他方でSASIはドイツの労働者スポーツ運動の崩壊後国際スポーツ交流のための新たなパートナーを捜さなければならなかった。ソ連の力強いスポーツ運動は政治的、技術的、財政的にこれに最もふさわしいと思われたのである。この決議が労働者スポーツにおける国際統一戦線を形成しようとする意志から厳命されたものでないことは、決議の最後の文章の資本主義国でのRSIの競技と競技会を相変わらず禁じる文章で分かる[7]」。既述の通りこの解釈を記す同時代資料は見出されない。

いずれにせよここから三〇年代の関係改善が始まったのである。

② RSI執行委員会呼びかけ（三四年二月）

RSIは一九三四年二月、「戦争とファシズムに対する戦線を作ろう！ 万国の勤労スポーツマンへの赤色スポーツインターナショナル執行委員会の呼びかけ」[8]を発した。スポーツプレス（アクサミット）編文書が引用を省略した重要な部分を中心に、ここでの認識と提案を見よう。

「ドイツに続いて今やまた資本主義はオーストリアでその最後の暴力手段を投入した。血まみれのファシズム独裁が勤労者に対して荒れ狂っている」。「この数週間のフランスの出来事は、フランス・プロレタリアートがファシズム的発展の危険にいかに立ち向かったかを示してきた」。「だが、ドルフス・ファシズムに対するオーストリア労働者の英雄的なバリケード闘争もそれを更に一層明瞭に表現した」。「全世界の労働者スポーツマンは、社会民主主義指導者によって陰険に見殺しにされながら全国家権力の優勢とファシスト徒党に対して立派に任を果たしたオーストリア労働者の英雄的な闘争を歓迎する」。

「ブルジョアジーはスポーツをファシズム的意味での大衆のイデオロギー的感化と帝国主義戦争のための肉体的軍事技術的準備への最も抜きんでた手段の一つとして利用している。イタリアとドイツで、ポーランドとユーゴスラヴィアでブルジョアジーは青年の強制軍事化をすでに法制的に確保した。『民主主義』スイスでさえ青年の強制軍事化に関する法律が準備されている。だが他の国でも身体運動のための組織は直接であれ間接であれ国防省の監督下に置かれ、あるいは活動的な軍人による指揮が実施されている。赤色スポーツインターナショナルに結集した万国の階級意識を持つ勤労スポーツマンは（中略）ファシズムと帝国主義戦争に反対し労働者階級の解放をめざす全てのスポーツ実践する労働者の強力な国際的統一戦線の確立のために闘っている。この合図においてモスクワでの世界スパルタキアードへの準備が行われた」。

ここまでは一九三三年九月当時の認識と提案の総括的記述と言ってよい。しかし、スポーツプレス（アクサミット）編文書で省略された次の部分が重要である。「だが最近の事件によって高まった帝国主義戦争とファシズムの厚かましい突撃の危険は、労働者スポーツマン大衆の闘争戦線と闘争方法の思い切った拡大を要求している。それゆえ赤色スポーツインターナショナル執行委員会は、世界スパルタキアードの開催者としてのソビエト同盟のスポーツ組織と、ＲＳＩの最も重要なヨーロッパのセクションと一致して、大規模な反ファシズム行進と、戦争とファシズムに反対する国際的なスポーツコングレスを資本主義国で開催し、モスクワでの世界スパルタキアードを延期することを決定した。この行事とコングレスの場所としてパリが選ばれた」。

これはすなわち、一九三三年九月の協議会決議の重要な変更を意味した。「パリのための序幕として全ての国で聖霊降臨祭に統一協議会とコングレスと結び付いた反ファシズム・スポーツ集会が実施されるべきである。全ての勤労スポーツマンを区別なく動員し、反ファシズム・スポーツ戦線を形成することが重要である。最も大胆なエランと最大のエネルギーで改良主義とブルジョアのスポーツ指導者の有害な影響からの勤労者の引き離しをめぐる闘争が進められねばならない」。

パリの反ファシズム・スポーツマン行進は八月一一―一五日と定められ、これへの参加問題が二つのスポーツインターの関係に動きを与えることになる。

③　パリ反ファシズム・スポーツマン行進へのＳＡＳＩ参加問題

スポーツプレス（アクサミット）編文書は、ＳＡＳＩ指導部の反応として「一九三四年五月に彼らのプレッセディーンストによって次のようなパリ・スポーツ集会に関する通知を広めた」との引用をしている。これは後の資料で

「五月決議」と呼ばれるものである。

「パリで今年『国際反ファシズム・スポーツ集会』が行われるという。これに対してSASIの事務局は、ことは共産主義者の行事でありSASI連盟とその会員の参加は拒否されるべきだと知らせている」[9]。

パリ集会準備委員会（バルビュス、パンレヴェ議長、マンシォン書記）は七月九日[10]にSASIに書簡を出して、「SASIの事務局の決議に我々はパリでの国際反ファシズム・スポーツマン行進の共同の実施にSASIを新たに招待することをもって答え」た。

「RSIの全ての組織の他にSASIの一連の組織、ブルジョア・スポーツ陣営にいる勤労者、それ以上に多数の傑出した知識人（作家、医者、様々な研究所の代表）が、スポーツ実践する大衆の力強い国際統一戦線の形成への準備委員会の訴えに応じた」。「効果的に発展している国際スポーツ統一戦線の運動は、SASIの決議、パリ・スポーツマン行進が『共産主義的』行事であり、これへのSASI連盟の参加は拒否されるという決議によってかなりの妨害を受けた。我々はこの決議を残念に思うとともに、八月パリでの国際スポーツマン行進は決して政党政治的共産主義的行事ではないことを宣言する。これについては準備活動のこれまでの経過と、区別なしの全ての反ファシズム・スポーツマンの統一を目標とするそのプログラム全体ならびにパリ集会の実施のための準備委員会の構成から明らかである。この委員会には圧倒的多数の非共産主義者が属し、様々な非共産主義的スポーツ・文化組織を代表している。そのうちの幾人かは社会党員である。国際スポーツマン行進の組織化のためのイニシアティヴがRSIから発しているもののこの集会は決してRSIだけの行事ではない」。「他の組織の参加によるRSIの行事ではなく、戦争とファシズムに対する、スポーツの軍国主義化とファシズム化に対する闘争を進めようとする区別なしの全てのスポーツマンとスポーツ組織の共同の行動なのである。それに合致してあらゆる組織はその勢力とその参加者の数に従って準備

委員会に代表される権利がある」[11]。

このパリ準備委員会の統一戦線と共同の思想は、従来のＲＳＩの路線とは異なる、新たなアプローチを示していた。議長のバルビュスは作家でファシズムに反対する文化擁護運動の代表者であり、パンレヴェは首相の息子[12]で、書記のマンションはＲＳＩに属するフランスＦＳＴ書記長であった。

④　ＲＳＩ六月アピール「国際スポーツ統一戦線の基礎」

ＲＳＩ執行委員会は一九三四年六月、極めて長大なアピールを『国際スポーツ評論』第二年巻第七号（一九三四年七月）特別付録で発表した。それは「国際スポーツ統一戦線の基礎――万国の勤労スポーツマンと組織へのアピール」[13]というものであった。これは反ファシズム・スポーツ綱領の性格を持つという点で重要であるだけでなく、ここで初めてベルリン・オリンピック準備への反対闘争の方針が打ち出されている点で画期的でもある。原文七頁にわたる全文を要約的に引用しよう。

まず、「新たな世界戦争、新たな諸民族殺害は、いつでもどんな瞬間にも地球のどの地点でも始まり得る」と、「新たなサラエヴォになり得る」地域として「ザール、ダンツィヒあるいはオーストリア」が挙げられ、「戦争準備には住民の全ての階層が引き入れられる。スポーツ組織も政治的生活の渦に引き入れられた」ということを指摘し、「スポーツ組織は軍隊外部の軍事的養成の大衆陣営に転化して」おり、「排外主義、民族主義、兵営精神――これがブルジョア・スポーツ組織の精神的内容だ」との認識を示して、次のように提起する。「我々スポーツマンが一日も笑ってはならない時が来た。共同で、仲間のように、新たな帝国主義戦争のためのファシズム徒党と弾丸の餌食となる予備役軍人にスポーツマンが転化することに反対する闘争が進められなければならない」。そして「唯一の国際的な労

働者・農民スポーツ同盟――赤色スポーツインターナショナルに結集する六百万のスポーツマンは、諸君に、万国のその他の組織の勤労スポーツマンに以下のアピールを向ける」とした（一頁）。以下、「世界のスポーツマン」あてと「改良主義連盟のスポーツ同志」あてに分かれる。

前者で、「労働者スポーツ連盟だけではファシズム的軍国主義的スポーツ組織に反対する闘争の負担に耐えることができない。なぜなら、彼らの背後には資本主義体制の装置全体の力があるからである。だが、全ての勤労スポーツマンの強力な結集した力はブルジョア・スポーツ指導者の計画の実現を阻止することができる」と説き始める。次に「数百万の勤労者は今日なおブルジョア・スポーツの心ならずもの虜である」という現状認識を展開する。「身体的文化の代わりに勤労者は軍事的教練を受けさせられ、ブルジョア・クラブでいわゆる指導者原理、民主主義的自治に代わる盲従、全ての勤労者の友愛的連帯に代わる民族主義、排外主義、クラブ愛国心（パトリチスムス）、頂点での買収、様々な寄付金による素朴な会員の略奪、高い会費、等に出会う」。「多くの勤労者はブルジョア・スポーツのこの労働者敵対的、反革命的役割をまだ認識していない。しかし他の多くは何が問題であるかを認識した。彼らはスポーツも階級闘争の外部に立たないことを知っている」と、スポーツにおける労働者階級内部の階級意識問題を設定し、階級意識を持った「彼らはスポーツの分野でも資本主義に反対し社会主義を求める闘争を進める課題を提起した」こと、「社会主義秩序のみが健康な生活と人間の全面的な肉体的精神的発展のための全ての条件を作るであろうということを知っている」こと（二頁）、「彼らの見解と目標の正当性はソビエト連邦、目的意識的に一貫して平和のために闘い社会主義を築く世界で唯一の国での身体文化運動の生活からの無数の例によって証明される」（二―三頁）ことをもって「ブルジョアジーの虜」となっている労働者が階級的に自覚するように促した。「ファシズム独裁の国、ドイツ、オーストリア、ブルガリア、ハンガリー、ポーランドで労働者スポーツマンは困難な条件下でファシズムレジ

ュームに反対する英雄的な闘争を進めている。ブルジョア民主主義の国、チェコスロヴァキア、フランス、イギリス、スペイン、アメリカで彼らは他の労働者と一緒に勤労人民の貧困の原因たる資本主義の打倒のための積極的な闘争を進めている。これらの労働者スポーツマン大衆の名で我々は諸君に、民族性、人種、政治的確信の区別なしの勤労スポーツマンに呼びかける」として、次のアピールを発した。「ブルジョア・スポーツに反対し、スポーツの仮面の下での軍国主義化とファシズム化に反対して闘おう」、「オーストリアにおける武装蜂起の炎の中で、ヒトラーの革鞭の下で、増大する貧困と上昇する失業にさいして、改良主義的道での資本主義社会の社会主義的無階級社会への平和的改造の可能性についての最後の幻想はその最期を受け取ったし受け取っている。ファシズムと戦争に対する闘争において革命的統一が鍛えられる」、「ブルジョアジーとその代理人によってスポーツを実施する労働者を分離するために立てられる全ての隔壁を打破し、国際的なプロレタリア・スポーツ戦線を確立するよう要求する」（三頁）。

「その基礎の上で国際的統一戦線が確立されるべき一連の実践的措置」として以下の八項目を提案する。（一）スポーツ組織の軍国主義化に関する法律の導入（「軍事的養成のスポーツ的形態」、「強制スポーツ」）反対の共同行動。（二）法律導入された国では法律を実践で不可能にする措置としてスポーツ的ストライキの組織化、軍事的練習の阻止、軍事的行事への欠席、軍隊スポーツ的目的のための全ての手段の拒否。（三）防衛スポーツや軍隊体操の練習時間導入の形態での学校での軍国主義化反対の闘い。（四）勤労奉仕キャンプでの青少年の軍国主義化に反対する全般的攻撃の組織化（四頁）。（五）生計の悪化に反対する闘い（「スポーツだけでは健康を与えない、あるいは保障しない。最も重要な前提は健康な住居、十分な栄養、相応の衣服で、全て労賃から支払われるべきだ。」）と、勤労スポーツマンのための具体的な経済的・文化的部分要求の提起とその実現の闘い（「労働者の財布からブルジョア行事に一グロッシェンも出すな」）（四―五頁）。（六）ブルジョア的軍国主義的スポーツ行事への反対と、対抗行事をブルジョ

ア的行事そのものにおいてもその外部でも組織すること。「まず第一に共同でヒトラー・ドイツでのブルジョア・オリンピアードの準備に反対する闘争が進められねばならない。ヒトラー・オリンピアードに労働者の一グロッシェンも出すな、一人の勤労者もオリンピアードへの準備に参加するな！」（七）ブルジョア的・ファシズム的スポーツ運動の内部への反対派労働者スポーツグループの形成（内部での阻止、分解とプロレタリア部分の戦線引き込みのため）。（八）勤労スポーツマンの略奪に反対する闘争（労働者スポーツマンによるスポーツ練習場の自由な利用、国家と自治体によるファシズム的軍国主義的スポーツ連盟の補助金交付反対、勤労者の身体文化的目的へのこの金の引き渡し要求、労働者スポーツフェラインとその行事の課税反対、交通手段の広範な割引を）（五頁）。

後者、「改良主義連盟のスポーツ同志」へのアピールは、彼らの指導者への批判から始まる（五―六頁）。その部分は省き、「革命的スポーツ組織と諸君のスポーツ組織の間の統一の確立のために提案する」とした以下の十一項目を要約的に取り上げよう。

（一）ファシズム的軍国主義的スポーツとその措置に反対する闘争を共同で同志的に進めること。（二）ＲＳＩ、ＳＡＳＩの連盟が存在する国での共同のスポーツ行事の実施。（三）反ファシズム・反戦の労働者スポーツ共同の国際的行動の実施。まず一九三六年モスクワ世界スパルタキアードの準備と一九三六年ベルリン・ブルジョア・オリンピアード反対闘争の共同の組織化を。（四）ＬＳＩ連盟から除名された革命的労働者スポーツマンを再び受け入れること、ＲＳＩもそうしたグループを再び受け入れる用意があると言明する。（五）ＬＳＩ連盟内部での自由な意見表明の許可（「無党派であれ社会民主主義的、サンジカリスト的、アナーキスト的信条を持つ者であれ、ＲＳＩ組織の会員であり得るように」）。（六）ブルジョアジーが互いに憎み合い戦争を準備している国々の労働者スポーツマンの間の国際的競技とスポーツ集会の組織。とりわけ八月のパリでの反戦反ファシズム国際スポーツマン行進への積極的参

加を。（七）赤色スポーツに反対する闘争の中止（六頁）。（八）ソビエト連邦の身体文化組織との結び付きの強化・拡大（六―七頁）。（九）国内的、国際的規模での勤労スポーツマンの共同のスポーツ協議会とコングレスの組織。八月のパリでの国際反ファシズム・スポーツコングレスへの参加を。（十）宣伝文献の共同編集と大衆への普及。（十一）ファシズム独裁下の労働者スポーツマン支援の共同募金の組織（七頁）。

これが「労働者スポーツマン隊列の闘争統一の基礎」とされる。

最後に、「全ての所で勤労スポーツマンの共同の委員会を統一戦線の機関として、区別なしの全ての勤労スポーツマンの共同の闘争の遂行のための機関として作ろう！」と呼びかけるが、その趣旨はソ連擁護論に帰結する。すなわち、「この委員会は統一的意志を代表し、全てのスポーツ勢力を動員し、統一した勤労スポーツマン大衆を資本主義の打倒に向け、社会主義の勝利のための、ソビエト連邦、全ての国のプロレタリアの唯一の祖国の擁護のための闘争に導くであろう」（七頁）。

⑤　ＳＡＳＩのパリ集会準備委員会への書簡（三四年八月）

スポーツプレス（アクサミット）編文書所収で今のところ他で得られないユリウス・ドイチュ署名のＳＡＳＩ事務局のパリ集会準備委員会への書簡［一九三四年八月初め］[14]は、全文引用する必要がある。これは「パリ集会の開催直前に届いた」という。

「八月一一―一五日パリでのあなたがたのスポーツ集会に参加するようにとのあなたがたの新たな招待に、我々は、今年の七月九日のあなたがたの書簡の到着以前にＳＡＳＩの各国代表の協議会［この史実は資料的に確認できない］[15]があなたがたの示威行動に代表を派遣しないことを決議したことを謹んでお知らせ申し上げます。我々はこの機会に

我々を分ける意見の相違に立ち返る必要はないとみなします。我々を政治的に分かつものは、労働者階級全体が差し迫るファシズムに対して闘わねばならない瞬間には、従属的な役割しか演じません。あなたがたの示威運動に参加しないというSASIの決議は、決して戦争の危険とファシズムに対する共同の闘争の拒否ということを含むものではありません。SASIはただ実践的観点に支配されてきました。すでに今年の一月にチューリヒでの事務局会議で戦争とファシズムに対する幾つかの大きな国際的示威行動を開催することが決議されました。この決議は当時全ての労働者新聞に発表されました［これはオーストリアとスイスについて確認できる］。当時決議された最初の示威行動は数週間前プラハで行われました。[16] 周知のようにプラハ示威行動はかつてない最大の大衆示威運動の一つでした。数日前にはさらにスイスのルツェルンで労働者スポーツマンの一大示威運動が、そしてヘルシンキで力強い表明が行われました。八月初めには社会主義青年組織と共同してリエージュで国際スポーツ集会があります。我々はこの示威運動に四万から五万の労働者が集まるだろうと見込んでいます。最後に八月三一日にはイギリスのドルチェスターで大きな行事が行われますが、これはイギリス労働組合連合とイギリス労働党との共同で開催されるものです。[17] したがってSASIに加盟する連盟は今年一つどころでなく四つの反戦反ファシズムの大きな示威運動に参加することがあなたがたにも分かるでしょう。我々自身が強力な国際的大衆示威運動を開催するのですから、我々は我々の連盟をさらにそれ以上の大衆示威運動に代表を派遣するよう招待する必要はないとみなします。我々によって開催される示威運動の政治的作用は非常に大きいと見込まれますので、戦争の危険とファシズムに対して我々の力全体を投入するという我々の決意を表明するのにパリでの新たな証明は必要でないでしょう」。

スポーツプレス（アクサミット）編文書は、これが一九三四年八月一〇日のSASI［原文RSIは誤り］プレッセディーンストに掲載されていることを指摘し、次のようなコメントを加えている。

「上記の手紙で伝えられたＳＡＳＩの新しい決議の中には確かにパリ集会の準備と実施に参加するようにとのその支部への要請はないが、また五月決議［『国際スポーツ・プレッセディーンスト』三四年五月（日付け不明）号記事のこと］のような明確な禁止はもはや強調されていない。この意味で八月決議［上記の手紙のこと］は一歩前進である。ＳＡＳＩが今やその参加を拒否するのはもはや『共産主義的行事』が問題であるからでなく、実践的観点からすでに一九三四年一月にチューリヒで、今や実施されるいくつかの大きな行事が決議されたからだ。［その意味では］一月にチューリヒで、戦争とファシズムに対する闘争の合図としての共同のスポーツ行事を実施するための共同のプランを仕上げることが必要だったのである。にもかかわらず周知のようにチューリヒでのＳＡＳＩの同じ一月会議でソビエト同盟のスポーツマンとのスポーツ関係の受け入れは許されたのに対して今後もＳＡＳＩ支部には資本主義国でのＲＳＩの支部とのスポーツ交流に応じることは禁じられることが決議された。この決議にもかかわらず準備委員会はパリ・スポーツ集会への参加のためのＳＡＳＩの会員の数度の招待によって、実際に戦争とファシズムに対するスポーツの軍国主義化とファシズム化に対する闘争のためのスポーツにおける統一の形成に取りかかる意志を示した。この関連で今手元にあるＳＡＳＩの公式の説明を歓迎しないわけにはいかない。その中でパリ・スポーツ集会への不参加に関するＳＡＳＩ指導部の決議は戦争とファシズムに対する共同の闘争の拒否を意味しないことが言われている。これは別の言葉で言えば、ＳＡＳＩ指導部は共同の闘争が必要であり、――政治的な意見の相違にもかかわらず――可能であることを承認するということである。この承認はしかしＳＡＳＩをこれまでまだ生じなかった多くのことに義務づける。政治情勢の発展と今後のファシズムと軍国主義に対する闘争の実践は、行為によって言葉が実行されるかどうかを示すであろう。共同の闘争への、統一した戦線の確立への本当の意志を示すためにＲＳＩはその会員に改めて全てのＳＡＳＩの行事への積極的な参加を要求し、他方でＳＡＳＩもその会員にパリやＲＳＩの他の全ての今後

の行事への参加を許し、彼らにそのために要求することを期待する」[18]。――このコメントはおそらくその当時に書かれたものであろうが、それを掲載した資料は発見されていない。

パリ集会を前にRSI書記局は国際解放委員会への公式加入を決議したことを「拝啓反ファシズムの友」の挨拶での同委員会宛の書簡で伝え、「同時に我々は八月一一――一五日にパリで行われるあらゆる方向の勤労スポーツマンの国際スポーツ集会を解放キャンペーンに奉仕するためにあらゆることをするでしょう」と述べた[19]。これへの返信で国際解放委員会書記局は同様の挨拶をもって「この数か月来我々は我々にスポーツ運動が繰り返し与えてくれる戦闘的反ファシズムの実証を喜んで指摘してきました。（中略）FSTのスポーツ場で数千のパリの労働者が数千の赤色スポーツマンと共に国際テールマン・デーに集まった七月二二日にあなたがたの書簡が届きました。朗読されたあなたがたの決議は長く続く歓喜によって歓迎されました」と答えた[20]。これはRSIの反ファシズム・スポーツ運動の展開を示す一つの記録である。

パリ集会そのものの同時代の各種報告についてはここでは省かざるを得ないが、次の報告だけは取り上げる必要がある。それは「八月一二日にはパリのパーシング・スタジアムにSASI第二会長ギュルヴィクが現れ、そこで労働者スポーツにおける統一の確立のためのRSIの合言葉を裏づけるための発言を行った」という報告である[21]。これは他の資料でも同様に、しかしより具体的に報告されている。「改良主義スポーツマンの書記、社会主義スポーツインターナショナルの幹部ギュルヴィクが聴衆の激しい喝采の下にこの壮大な示威に面して労働者スポーツの組織的統一を肯定する以外あり得ないと言明した。彼は、一〇月に開かれる社会主義スポーツインターナショナルの次の総会に

それにふさわしい提案を提出するという」[22]。――このギュルヴィク発言が次の段階へのテコとなるのである。

第三節　SASIカールスバード総会前後――一九三四年九―一二月

①　RSIのSASIへの九・二二書簡

RSI執行委員会は一九三四年九月二二日[23]、SASIへ次の長文の書簡を出した。それは「パリ集会の成功と下からの統一への大衆運動に支えられて［SASI］カールスバード総会の機会にSASIの事務局と会員に向けて出した」[24]ものであった。

「報道から我々は一〇月六、七日カールスバードでSASIの今後の政策と戦術の基本的な問題が扱われる社会主義労働者スポーツインターナショナルの定期総会が行われることを知った」。――これを書簡の動機として、統一の必要性、パリ集会の成果の一節の後、次のように述べた。「［パリ集会組織委員会］の招待状の返事として八月初めにSASIの事務局の書簡を組織委員会は受け取った。その中でSASIは現存する政治的意見の相違に関わらずファシズムと戦争に対する共同の闘争を拒否しないことが言明された。この返事はRSIとSASIの組織の間の恒常的なコンタクトの確立の問題を我々に持ち出すことを許した。この返事に支えられて我々は提案する、全ての労働者スポーツマンの統一戦線の確立に向けられる実践的措置の討議と実行に即座に着手することを。この共同の行動の過程で統一的な労働者スポーツインターナショナルへの全ての労働者スポーツ組織の統一が実現されるであろう」。その実践的措置は、「RSIとSASIのフェラインが存在する全ての地域で即座にこのフェラインの会員総会を開くこと、（中略）全国規模でRSIとSASIの組織の代表が我々の提案の共同の提案の共同の討議のために会合すること」であり、「共同の行動の形態として、共同のスポーツ行事と集会、共同のリレーチーム、共同の示威行動とデモ

ンストレーション、階級敵に対する闘争でのプロレタリアートの全ての一般的行動の支持、集会とデモンストレーションの他の闘争形態、なかでもストライキを提案する。自衛リレーとピケへの積極的参加、ストライキをしている同志への募金、極東への武器輸送の阻止、等々によるストライキ委員会の支持が含まれる」。「二つのスポーツインターナショナルの代表に国際スポーツ集会の統一的なカレンダーの仕上げのために会合することを提案する。我々は一九三六年モスクワでの世界スパルタキアードへの準備をこのカレンダーのための基礎として取り上げることを提案する」[25]。

この書簡の後半はＲＳＩの統一についての新たな見解の展開である。「ＲＳＩの執行委員会は今や全ての労働者スポーツ組織の統一の実現に歩み寄るのに決して本質的な障害を見ない。我々は労働者スポーツの統一に関する赤色スポーツインターナショナルの合言葉に賛成する社会主義労働者スポーツインターナショナルの隊列からの個々の組織と人物の言明を歓迎する。特に我々は、ＳＡＳＩの第二会長ギュルヴィクがＲＳＩのイニシアティヴで組織されたパリのパーシング・スタジアムでの集会で統一の問題を次の総会の議事日程に設定するだろうと言明したことを歓迎する。ＲＳＩの執行委員会は、この協議が共同のプロレタリア的反ファシズム・反戦戦線の強化と手を携えて進むように自らの全国組織に即座にＳＡＳＩの対応する全国支部との統一について交渉を始める指示を与えることが可能だとみなす」。次の部分が重要である。「統一的な労働者スポーツ組織では労働者民主主義、政治的意見の自由、指導的決定機関全体での現存の潮流の比例的代表が保証されるべきである。二つのスポーツインターナショナルの接近と統一の問題に最大限可能な成功を確実にするためにＲＳＩの執行委員会は、まだ決定されていない統一戦線と統一的労働者スポーツインターナショナルの創造の問題についての同志的な討論に限定する用意があることを言明する。ＲＳＩの執行委員会が、統一の問題を傷つけ［原文は des letzen だが、verletzen の誤り］、あるいは労働者スポーツの階

級敵のマヌーバーから妨げられて当該の統一を遅らせるようなＳＡＳＩの人物と組織（自らの役員と自らの組織も）への批判を行使する権利を保留することは自明のことである。この我々の提案の立ち入った理由付けとより迅速な実践的協議のために、あるいは起こり得る論争的問題の解決のために、ＲＳＩの執行委員会はＲＳＩの代表団をカールスバードでの目前に迫ったＳＡＳＩの総会に立ち入りを許すことを求める」[26]。――書簡の日付けは「一九三四年九月」だけで日が記載されていないが、次のＳＡＳＩの総会決議で二二日と分かる。

②　ＳＡＳＩカールスバード総会とＳＡＳＩのＲＳＩへの一〇・七書簡

スポーツプレス（アクサミット）編文書は一九三四年一〇月六・七日のＳＡＳＩカールスバード総会について次のように記述し、統一の反対者の報道としてのチェコの社会民主主義紙『プラーヴォ・リドゥ』の記事（日付けなし）の引用と、総会の決議と総会の名でのＳＡＳＩ幹部会のＲＳＩへの書簡を掲載している。まず文書の総会についての記述を見よう。「ＲＳＩの統一申し出はＳＡＳＩ総会で大きな議論を引き起こした。社会民主主義報道でさえ確認せざるを得なかったように、一日中ＳＡＳＩ総会はスポチンテルンによって提起された労働者スポーツにおける統一の問題について議論することを強いられた。ポーランドからのユダヤ人同盟の代表団ならびにパレスチナ、フランス、ザールラントの代表団は無条件にＲＳＩとの協力に賛成した」[27]。そしてチェコの社会民主主義紙『プラーヴォ・リドゥ』の次の記事を引用する。「論争全体を追うのは興味深かった。総会ではその喉全体を酷使して共産主義者との統一戦線を求めて闘った四人の代表がいた。彼らは何も新しいことを言わなかった。それによって要求されたのは、ＳＡＳＩもストライキを実施し、［プロレタリア］独裁を宣伝し、強力な内乱に準備せよという古くさい共産主義的フレーズだった。この純粋にボルシェヴィキ的イデオロギーを主張したのはポーランドからのユダヤ人同盟、さらにパ

レスチナ、最後にザール地方からの代表であった。非常に冷静だったのは、彼らと並んだフランスの代表ギュルヴィクで、彼は共産主義者との共同の行動のごく稀な経験を理由づけた。この少数の代表に対して他の全ての代表は最大の決意で反対した。それはチェコスロヴァキアの他にオランダ、スイス、イギリス、ベルギー、ポーランド、ウクライナ、フィンランドであった[28]」。

スポーツプレス（アクサミット）編文書は、それに対して「統一の反対者の抵抗にもかかわらず、SASI総会は会員大衆の下での気分を顧慮してRSIの申し出を簡単に拒否できなかった」として、「統一の即時の形成を要求した反対派代議員の五票の反対で採択された」決議を評価し、それを掲載した。総会の決議は次の通りである

「赤色スポーツインターナショナルの執行委員会は九月二二日の書簡でSASIに二つの組織の間の交渉の開始を要求した。SASIの第七回総会は二つのプロレタリア・スポーツ組織の協力の問題を真剣に良心をもって調べ、当方としてはそれを満足すべき解決に導くために可能なことをするであろう。SASIの第七回総会は今年の一月のチューリヒ事務局会議の決議に注意するよう指示する。この決議はSASIに加盟する全国組織にすでに一定の前提の下にロシアのスポーツ組織とのスポーツ交流を育てる可能性を与えている。SASIの第七回総会はその幹部会にRSIの執行委員会と、いかなる条件の下で二つの国際労働者スポーツ組織の間のスポーツ交流が可能であるか、交渉に入ることを委託する。そうしたスポーツ交流の自明の前提としてSASIの第七回総会はブルジョア・スポーツ連盟とのあらゆるスポーツ交流を原則的に拒否することとみなす。RSIとの交渉はもちろんSAI［社会主義インター］とIGB［国際労働組合同盟］と最も密接に協調して行われる[29]」。

総会の名でSASIの幹部会は次のRSIへの書簡を送った。日付けがないが総会閉会日なので一〇月七日であり、署名は「SASI幹部会を代表してJ・ドイチュ」である。

「ＳＡＳＩの第七回総会は昨日、あなたがたが統一戦線の未決定の問題と統一的な労働者スポーツインターナショナルの創造についての『同志的な議論』の用意があると言明した九月二二日のあなたがたの書簡を討議した。我々の総会はＳＡＳＩの幹部会に二つのプロレタリア労働者スポーツ組織の協力の可能性についてあなたがたと交渉を開始することを委託することを決議した。ところで本日、共産主義スポーツインターナショナル［ソ連の誤り］のチームがブルジョア・スポーツ組織と競技するためにプラハに到着したという知らせが届いた［原文 einlangte は einlaufte の誤り］。総会はそれに対してＳＡＳＩの幹部会にプロレタリア・スポーツ組織の協力の可能性についての交渉の開始前にブルジョア・スポーツ連盟とのあなたがたのスポーツ交流について解説を要求することを委託した。我々へのあなたがたの書簡であなたがたは我々が共同で『ブルジョア・スポーツによる大衆のファシズム化と軍国主義化に反して』闘うこと、さらに我々が『力強い要因』として『ブルジョア・スポーツに対置すべきである』ことを提案している。あなたがたが我々にそうした申し出を送り、同時に我々がいわば共同で克服すべきまさにあのブルジョア・スポーツ連盟にチームを派遣するというのは少なくとも奇妙である。ＳＡＳＩの第七回総会の委託で我々はこの案件の即時の解説を要求する。なぜなら我々にとって階級意識的なプロレタリア・スポーツ連盟がブルジョア・スポーツ連盟に広告サービスをすることには関わり合わないということはこれまで自明のことであったからである[30]」。

③　エルヴィン・レポート

このＳＡＳＩカールスバード総会についてのアルヒーフ資料がある。イギリスの代議員のジョージ・Ｈ・エルヴィンによる英文タイプレポート「社会主義労働者スポーツインターナショナル第七回総会。カールスバード、一九三四年一〇月六・七日[31]」（以下エルヴィン・レポート）である。その中で関連する部分を引用しよう。

「スポーツと政治：この項目は主にSASIとRSIとの間の関係に関する議論に関わった。ユリウス・ドイチュが議論を開始した。その主要な点は、一、用語の通常の意味での統一戦線はあるはずがない。二、SASIはその加盟組織と国民としてのロシアとの間のスポーツ競技会を準備することに努めるべきである。二つの主要な条件がどんな予備交渉においても明記されるべきである。（a）ロシアはブルジョア組織とのスポーツ関係を止めるべきである（見たところ例えば総会の時点でロシアはプラハでチェコ・ナショナルチームとフットボールのゲームをしていたというような関係も存在するらしい）。（b）ロシアはRSI加盟組織によるSASI加盟組織への反対が彼らのそれぞれの国で止めなければならないことを保証しなければならない。三、我々は必ずしも力の方面からのファシズムへの反対を言ったり考えたりすべきでなく、身体と同様に反対における精神を発達させなければならない。

ほとんど全ての国の代表が語り、全く接触のないフランスとザールによって主唱された『統一戦線』とは違う観点が、NWSA［イギリスの全国労働者スポーツ協会］の決議において敷かれたような『中央の』路線を主唱したチェコスロヴァキア、オランダ、イギリス、ベルギー、スイスによって支持された。種々の要素を含む決議は後に作成され、私が支持した修正をもって可決された。決定は次のようなものであった。（一）会長ドイチュは方針に従って、そして彼の開会演説で彼が言及した二つの特別な条件の下でロシアとの交渉に入る。（二）そうした交渉は国際労働組合同盟と社会主義インターナショナル［原文LSIは誤り］の事前の同意なしに入ってはならない。（これが上述した修正だった）

フランスとザールの代議員だけがこの決定に反対した。後者［ザール］のケースでその特別な政治的立場のために彼らにその国の共産主義スポーツ連盟との提携を続ける行動が許されることが承認された。これは彼らが最近見かけでは完全な成功と調和をもって従ってきた政策である。フランスの代議員は上記の問題の終了後すぐに会場を去り、

インターナショナルから脱退するという勧告で彼らの会員を脅した」。

エルヴィン・レポートは「SASIの数的勢力」を記述しているが、それはレポートに添付されたドイツ語タイプ資料「一九三四年のSASIの会員現勢」表にある「一九三二―一九三四年にSASIは一四九万九九〇六人の所属者の損失、すなわち約八〇パーセントの損失を記録した」[32]という記述と食い違っている。エルヴィン・レポートでは次のように記述される。「今SASIに加盟する組織は二一あり、全体の数的勢力は三六万三一一三人――一九三二年と比較して一八六万二三一九人の下落――で、この損失はもっぱらオーストリア、ドイツ、ラトヴィアの状況によるものである。二つの最大加盟組織は一三万八千人の会員のチェコスロヴァキアのプラハと、四万五千人の会員のチェコスロヴァキアのアウシッヒである（注意：チェコスロヴァキアは三つの分離した組織、プラハ、アウシッヒ、ATUSがあるので一つの国としては加盟していない）。二万人以上の会員の他の加盟組織はベルギー、フィンランド、スイスである。最小の加盟組織は七百人の会員のアメリカで、イギリスは八千人の会員でリストの中間以下である」[33]。

④　総会直後の往復書簡

スポーツプレス（アクサミット）編文書所収のカールスバード決議直後の往復書簡に先立つ記述によれば、「国際的交渉を進めようとするSASIの用意を歓迎し」、「RSIの書記局は即座にSASIの事務局に交渉の場所と期日を決めることを頼んだ。そのさいRSIは二つの労働者スポーツインターナショナルの代表の会合が直ちに実現されるべきであると述べた」[34]。

一九三四年一〇月二六日の書簡でSASI書記シラバがRSIに、「あなたがたの代表との交渉は、来月パリで行われる社会主義労働者インターナショナルの執行部の協議会に依存することを承知していただきたい」と伝えた[35]。こ

の書簡に対してＲＳＩの書記局は次のように答えた。所収した文書には日付けが明記されていないが、一〇月末から一一月初旬の間であろう。

「モスクワ、プラハあるいはあなたがたによって決められる別の場所で、直ちに交渉のために会合するという我々の提案があなたがたの同意を見なかったことを残念に思う。二つの労働者スポーツインターナショナルの代表の共同の協議の延期は、我々の意見によれば、労働者スポーツにおける国際的統一の即刻の確立のためにならない。全ての国で共同で進められる勤労スポーツマンの行動を越えて、ノルウェーとザール地域の労働者スポーツマンは組織的統一をもすでに実現し、フランスの二つの労働者スポーツ連盟は同様にすでに統一総会を召集した。この例は、労働者スポーツマン大衆の下に存在し全ての障害にもかかわらず勝利的に道を開く統一への強固な意志を示している。社会主義スポーツインターナショナルと赤色スポーツインターナショナルの代表の間の即時の交渉は、その他の国での統一の確立と国際的統一を早め、それによって労働者階級全体の統一の実現を精力的に支えることができる。したがって、我々はあくまで、社会主義労働者インターナショナルの協議会とは独立に、直ちに二つの労働者スポーツインターナショナルの代表の独自の交渉を進めることが可能であり、必要であるとみなす[36]」。

しかし、スポーツプレス（アクサミット）編文書は短くその後の状況を記述するだけである。「即時の交渉の開始へのこの繰り返しての提案はＳＡＩ［原文ＳＡＳＩ］の協議会の後も返答されないままであった。一九三四年一二月末、ＳＡＳＩプレッセディーンストに、ユリウス・ドイチュＳＡＳＩ会長がアメリカに旅立ち、彼の帰還を待たねばならない、と書かれていた。最初の交渉はそれから一九三五年春に初めて実現した[37]」。

小論は三四年一二月二三・二四日のフランス労働者スポーツ組織統一総会についての報告を重要な資料として次節

で提出する。

第四節　フランス労働者スポーツ組織統一総会と二つのスポーツインター

ＳＡＳＩの『国際スポーツ・プレッセディーンスト』一九三五年一月七日号の「フランスの労働者スポーツ組織の合併」という記事[38]は、この時期のＳＡＳＩのＲＳＩとの関係を知るのに重要な資料である。まず記事の前半を見よう。

「フランスの労働者スポーツ組織の合併はパリでの［一九三四年］一二月二三・二四日の二日間の総会で正式な締め括りを見た。参加は非常に多かった。かつての二つの組織からほとんど同数の代議員が出席した。したがって、かなり同じ勢力が存在するのである。その他にパリの多くの労働者組織が代表された。議論は提携の統一的意志を示した。興味深かったのは特にギュルヴィクとかつてのＦＳＴの代表デシャンの詳論であった。共産主義者トマソンの試みも興味深かったが、彼は特にＲＳＩのためにアジ演説をし、新しい組織がＲＳＩに所属することを決議するように試みた。演者は騒ぎと叫びの中で演壇を去らねばならなかった。対等の委員会の合併報告と規約が一致して採択された。ポストの配分が同様に一致して採択された。これは次の代表者の下にある。ギュルヴィク、ペパン、デラトル、その他」。

後半部分は特に国際的統一に関するデヴリーガー発言とＳＡＳＩ執行部の態度についての情報であり、重要である。「ＳＡＳＩのためのゲストとして参加した我々の同志デヴリーガーは、とりわけ我々の組織の自明な決断の自由を確認し、ＲＳＩの代議員からのＳＡＳＩによる『国際的交渉の引き延ばし』のかどでの非難を退けた。彼は、圧力や外見的マヌーバーなしに重要な決断のための時間のゆとりを与えることを要求した。彼は代議員に、国際的な統一運動を損なうようなことを企てないように請うた。彼はモスクワ［ＲＳＩのこと］の態度の変化を指摘し、彼らがそれ

を保持するならば、確かに国際的な関係を容易にし改善するものだと述べた。統一の理念の実現は、モスクワによって与えられる条件なしで、一方のインターナショナルの他方のそれへの従属なしで、生じることができなければならない。ＳＡＳＩの執行部は、デヴリーガーの興味深い報告とフランスの新しい状況について近く立ち入った態度決定をするだろう。フランスの情勢には最大の注意が捧げられるが、最後まで行使されたＲＳＩの幾つかのセクションの唾棄すべきやり口にもなお注意が捧げられる。これは統一の思想の宣伝とは著しく矛盾するものだからである。我々のフランスの同志との関係は今後とも友好的であり続ける」。

一方、ＲＳＩはどう報告したか。ここでは『ルントシャウ』一九三五年第一号の「フランス労働者スポーツマンの合同総会――統一連盟創立される。パリ、一二月二六日」という記事[39]を取り上げる。

「一二月二三日、パリで革命派と社会民主主義派に率いられた労働者スポーツ組織の合同総会が行われた。連盟のさまざまな地域とグループを代表する六百人の代議員が集まった。一致して労働者スポーツマンの唯一の連盟の創造が決議された。示威行動は統一意志によって自制された。トゥルーズの地域委員会の代表団だけが、代議員の下に配布したビラで、そして彼らの代表によって、共同の綱領に定式化されたような政党からのスポーツ組織の独立に反対した。以前の改良主義スポーツ連盟の書記長は南フランスからの代議員との議論のさいに、共産主義者には最大の不信がふさわしいと主張する社会主義労働者スポーツインターナショナルの書簡を公表した。この書簡は社会主義労働者スポーツインターナショナルにおける統一努力に関する南フランスの改良主義スポーツマンの問い合わせへの返事であった。トゥルーズの代議員の見解は他の全ての代議員、特に社会主義派も含めたそれから一致して拒否された」。――「以前の改良主義スポーツ連盟の書記長」とはギュルヴィクのことであろう。

ＳＡＳＩのプレッセディーンストと全く異なる記述として、「赤色スポーツ連盟が数的には改良主義スポーツ連盟

より強力だったのにもかかわらず、これは指導的機関の対等の配置に賛成すると言明した」という記述がある。この記述の方が正確である。これに続いて、「赤色スポーツインターナショナルの代表は、全世界の労働者スポーツの統一をめぐるＲＳＩの努力を描き、フランスのスポーツマンをその模範的行為のために祝う大演説を行った」とあるが、この代表の名は挙げられていない。第三の資料で明らかになるであろう。共産党、社会党、労働組合ＣＧＴＵの代表の挨拶があったことが示され、「赤色スポーツマンの機関紙『スポーツ』が、統一した労働者スポーツ運動の機関紙になり、全ての会員に予約が義務づけられた」ことが伝えられる。そして最後に、次の重要な記述を加えている。「なお、社会主義労働者スポーツインターナショナルが一人のオブザーバーしか総会に派遣しなかったという事実は触れておくべきである。彼は彼個人にしか賛成しなかった。彼はフランスにおける統一運動の大きな成功を承認せざるを得ず、彼の印象を労働者スポーツインターナショナル(ママ)に報告することを約束した。国際的統一に関する論争には彼は掛かり合おうとしなかった」。――ＳＡＳＩ代表がデヴリーガーであることは明らかであるが、ゲストあるいはオブザーバーとしての彼の出席に基づくＳＡＳＩ執行部への報告が約束されたことが、この二つの記事から確認できる。

第三の資料は、『国際スポーツ評論』第三年巻第二号（一九三五年二月）の「パリ総会でのＲＳＩとＳＡＳＩ」[40]である。これは、この総会に三人のＲＳＩ代表の一人として出席したアクサミットの演説と、デヴリーガーの演説を再録した記録文書である。

アクサミット演説は次の小見出しで再録されている。「フランスでの合併の意義」、「国際的統一をめぐる闘争」、「統一のためのＲＳＩのプラットホーム」、「一つの統一的労働者スポーツインターナショナルを求めて」。ここでＲＳＩの国際的統一の運動論が整理されていることが確認できるが、小論は「統一のためのＲＳＩのプラットホーム」の

次の部分のみを取り上げるに止めたい。「スポーツにおける統一が政党の統一に依存するというＳＡＳＩの見解を我々は取らない。むしろ我々は、労働者スポーツマンがスポーツ統一の確立によって労働者階級全体の全般的統一の創造に本質的に寄与することができるという見解を主張する。それゆえ、スポーツにおける統一をぐずぐずせずに、共産主義インターナショナルと社会主義インターナショナルの間の交渉とは独立して確立することが、ＲＳＩの努力なのである」。

デヴリーガー演説は小見出しなしで再録されており、内容もまとまりのないものであるが、『国際スポーツ評論』の編集者によれば「ＵＳＳＧＴの会員によって取られた公式のステノグラムに依る」ものであった。ここでは次の部分が注目すべきところである。「私はＲＳＩの代議員には従うことができない。ＦＳＧＴ幹部会はドイチュと連絡を付けなければならない。ドイチュはアメリカに旅行しているので、この総会に来ることができなかった。彼が帰って来なかったこと、彼がこの総会に参加しないことで、私は彼に悪意を持つべきだろうか。（中略）私は言う、統一戦線はアメリカへの旅行よりも重要だ、と」。この最後の言葉には念入りにフランス語も加えられている。明らかにドイチュ批判であった。それでもＲＳＩとの統一交渉にはまだ確答できないことを弁明したのであった。

しかしながら、フランス労働者スポーツの統一連盟ＦＳＧＴの成立を機に二つのスポーツインターの交渉の実現が目前に迫るのである。

（1） Sportpress, (Carlo Aksamit), Um die Einheit des Arbeitersports. S. 3-5.

（2） ibid., S. 7-8.

（3） Niederschrift über die Sitzung des internationalen Büros der Sozialistischen Arbeitersportinternationale in Prag

am 6. Mai 1933. in : Nachrichten der Sozialistischen Arbeiter-Sportinternationale. Nummer 2. Mai 1933, 1-11 Seiten. 以下、引用頁は本文中に記す。スタインバーグは、この会議についてSATUS-Sport, no. 20 (May 17. 1933) から人事の変更のみを取り上げている (p. 235)。

(4) Die internationale Lage der Sportbewegung und die Aufgaben der RSI. in : Internationale Sportrundschau. Jg. 1. Nr. 3. (Oktober 1933), S. 134-135.

(5) Aufruf an die sporttreibenden Arbeiter aller Länder. Anfang September 1933. Die Delegierten der internationalen Konferenz der RSI. in : ibid., S. 97-98. ; An die sporttreibenden Arbeiter aller Länder! Aufruf einer Konferenz der Roten Sportinternationale. in : Rundschau über Politik, Wirtschaft und Arbeiterbewegung. Basel, Jg. 2. Nr. 34. (15. September 1933), S. 1292. ミッチュによれば「一九三三年九月二、三日、アムステルダムでRSI国際会議（史料：『国際スポーツ評論』一九三四年一、二号）」(S. 206. 編訳二七七頁)。だが決議掲載号を挙げていない。なおこれに先立って「六月、パリでRSI執行委員会会議」とあるが、史料は挙げられていない。スタインバーグは、六月のRSI執行委員会の宣言で三三年から三四年八月に延期されたモスクワ世界スパルタキアードの「国際反ファシズム集会としての新たな意味付与」を『国際スポーツ評論』第一年巻第一号（三三年八月）一頁からと注記して記している (p. 240)。同号が欠号なので確認できないが、年間目次ではこの一頁からの論説は「資本主義世界恐慌とスポーツ運動」である。

(6) Aus der Arbeiter-Sport-Internationale. Tagung des Büro der Sasi in Zürich. "Russenspiele". in : Oesterreichische Arbeiter-Turn-und Sport-Zeitung. Jg. 11. Nr. 1. Jänner 1934, S. 2-3. ここでは S. 2. ; Sportpress. (Aksamit), ibid., S. 8. なお、次の論稿にもこの決議が引用されている。Alte LSI-Politik in neuer Auflage. in : Internationale Sportrundschau. Jg. 2. Nr. 3. (März 1934), S. 94-96.

(7) Sportpress. (Aksamit), ibid., S. 8.

(8) Bildet die Front gegen Krieg und Faschismus! Aufruf an die sporttreibenden Werktätigen aller Länder. Das Exekutivkomitee der Roten Sportinternationale. in : Internationale Sportrundschau. Jg. 2. Nr. 3. (März 1934), S. 81-83. ; Run-

dschau. Jg. 3. Nr. 20. (8. März 1934), S. 747-748.; Sportpress. (Aksamit), ibid., S. 9. スタインバーグは、『ルントシャウ』当該号から三四年二月ＲＳＩ執行委員会のパリ集会決定のみを取り上げ、『スポーツ』（FST）から「このときＲＳＩはまだＳＡＳＩと共同する用意がなかった。これは唯一正当な革命的スポーツインターナショナルだと言い張り続けたからだ」と記している（p. 242）。

（9） Sportpress. (Aksamit), ibid., S. 10.

（10） この日付けは、後出のパリ委員会宛のＳＡＳＩの書簡から明らかになる。

（11） Die Antwort des Vorbereitenden Komitees für das Pariser Treffen an die SASI. [9. Juli 1934] in : Sportpress. (Aksamit), ibid., S. 10-12. これと同文のものが次の資料にある。Internationale Sportrundschau. Jg. 2. Nr. 8. (August 1934), S. 311-313.

（12） 「首相の息子パンレヴェ」などの記述は、Das Internationale Sporttreffen gegen Faschismus und Krieg in Paris. in : Rundschau. Jg. 3. Nr. 53. (4. Oktober 1934), S. 2292-2293. による。

（13） Plattform der internationalen Sporteinheitsfront. Ein Appell an die werktätigen Sportler aller Länder und Organisationen. Juni 1934. Das Exektivkomtee der Roten Sportinternatioale. in : Internationale Sportrundschau. Jg. 2. Sonderbeilage der Nr. 7. (Jul 1934), S. 1-7. 引用頁は本文中に記す。

（14） Ein Schreiben der SASI an das Pariser Komitee [Anfang August 1934], gezeichnet von Dr. Julius Deutsch. in : Sportpress. (Aksamit), ibid., S. 13-14.

（15） ニッチュによれば「三四年七月七日、プラハでＳＡＳＩ技術家会議（史料：『ＳＡＴＵＳスポーツ』三四年二九号）」（S. 203. 編訳二七一頁）で、他の会議は確認できない。

（16） 「一九三四年七月五―八日、プラハで第三回チェコ労働者オリンピアード（史料：『ＳＡＴＵＳスポーツ』三四年二一号）」（ニッチュ、p. 203. 編訳二七一頁）。

（17） ドイチュ自伝によれば「一九三四年九月初めイギリスの協同組合は、百年前に協同組合運動を起こしそのために辛い迫害

を受けなければならなかったトルパドルの殉難者の名誉のための祭典を催した。行事の中心にウィマウスでの一般労働組合会議とドルチェスターでの大スポーツ祭典があった。私は労働者スポーツインターナショナルの会長としての私の資格で様々な行事でこれを代表することになっていた」という。Julius Deutsch, Ein weiter Weg. Lebenserinnerungen. Amalthea-Verlag, Zürich, Leipzig, Wien, 1960, S. 234. ちなみにドイチュが自伝でＳＡＳＩ会長としての活動に言及したのは上記の箇所だけである。

(18) Sportpress, (Aksamit), ibid., S. 15-16.

(19) RSI beschließt offiziellen Anschluß an das Internationale Befreiungskomitee. in : Rundschau. Jg. 3. Nr. 44. (9. August 1934), S. 1839.

(20) ibid., S. 1839.

(21) Sportpress, (Aksamit), ibid., S. 17. この報告が採られたのは次の資料である。Carlo Aksamit, Zu den Ergebnissen des Pariser Sporttreffen. in : Internationale Sportrundschau. Jg. 2. Nr. 9-10. (September-Oktober 1934), S. 362-366. 小論の引用部分は S. 363.

(22) Das Internationale Sporttreffen gegen Faschismus und Krieg in Paris. in : Rundschau. Jg. 3. Nr. 45. (16. August 1934), S. 1902.

(23) この日付けは後述のＳＡＳＩカールスバード総会決議で確認できた。

(24) Sportpress, (Aksamit), ibid., S. 19.

(25) Ein Schreiben der RSI an das Büro und den Kongress der Sozialistischen Arbeitersportinternationale, den [22]. September 1934. in : Sportpress, (Aksamit), ibid., S. 19. この書簡は次の二つの資料にも掲載されている。Internationale Sportrundschau. Jg. 2. Nr. 9-10. S. 357-359. ; Rundschau. Jg. 3. Nr. 53. (4. Oktober 1934), S. 2292-2293. スタインバーグは、Sport (FST), 2. 52 (October 3, 1934) : 6 からこの書簡を何の日付け表記もなく取り上げているが、上記の資料には触れていない。

(26) Sportpress, (Aksamit), ibid., S. 19-21.

(27) ibid., S. 22.

(28) ibid., S. 22-23. この"Pravo lidu"の記事は、次の資料にも掲載されている。Die Kongreß der Luzern Sportinternationale. in: Internationale Sportrundschau. Jg. 2. Nr. 11. (November 1934), S. 420-421. ここで記事が一〇月九日号であることが分かる。

(29) ibid., S. 23.

(30) Ein Schreiben des Präsidium der SASI an die RSI im Namen des Kongresses am 7. Oktober 1934. in: Sportpress, (Aksamit), ibid., S. 24. この引用の後半の「我々へのあなたがたの書簡で」から最後までの部分が注（28）の資料のS. 420.に引用されている。

(31) 7 th Congress-Socialist workers' Sports International. Karlsbad, October 6th & 7th, 1934. Report by George H. Elvin.: National Museum of Labour Hisfory. NMLH/372. 7. この資料発見・提供者は青沼裕之氏である。

(32) Mitgliederstand der SASI im Jahre 1934. in: Report by George H. Elvin.

(33) Report by George H. Elvin.

(34) Sportpress, (Aksamit), ibid., S. 24-25. この記述は、Aksamit, Einheit muss zur Tatsache werden. in: International Sportrundschau. Jg. 2. Nr. 11. (November 1934), S. 413-417. にもある。すなわち、「我々はこの言明とこの決議を歓迎する。RSIはすでに電報と文書でLSIの幹部会に、交渉の場所と期日を決めることを頼んだ。そのさいRSIは、二つのスポーツインターナショナルの代表の会合が直ちに実現されるべきであることに価値を置くということを表明した。」――宛て先が事務局と幹部会の違いがあるもののほぼ同文である。なおスタインバーグは、Sport (FST), 2. 57 (October 31, 1934): 6によって、ドイチュの「申し立て」に対するアクサミットの「一〇月遅く」の「返答」を挙げている（p. 254-255)。

(35) Ein Schreiben der SASI-Sekretär Silaba an der RSI am 26. Oktober 1935. in: Sportpress, (Aksamit), ibid., S. 25.

(36) Ein Schreiben des Sekretariat der RSI an der SASI [o. D.]. in: ibid., S. 25.

(37) Sportpress, (Aksamil), ibid., S. 25-26. ドイチュは自伝でアメリカ訪問について記しているが、労働組合関係の接触のみでSASI会長としての行動は伝えていない。
(38) Die Fusion der Arbeitersportorganisationen in Frankreich. in : Internation-aler Sportpressedienst. A1. Aussig, 7. Jänner 1935. S. 1-2.
(39) Der Verschmelzungskongreß der französischen Arbeitersportler. Der einheitliche Verband konstituiert. Paris, 26. Dezember. in : Rundschau. Jg. 4. Nr. 1. (3. Januar 1935), S. 31.
(40) RSI und SASI in der Pariser Kongreß. in : Internationale Sportrundschau. Jg. 3. Nr. 2. (Februar 1935), S. 52-61.

第三章　最初の交渉（一九三五年三月一日、プラハ）

第一節　交渉への始動

スポーツプレス（アクサミット）編文書は、一九三五年三月一日の二つのスポーツインターの最初の交渉の報告からこの章を始めているが、小論ではその直前の資料を取り上げて、この最初の交渉に向けての動きを少しでも明らかにしよう。

まず、『国際スポーツ・プレッセディーンスト』一九三五年一月三〇日号の「SASI—RSI」という記事に次のような注目すべき記述がある。「SASI会長・同志ドイチュ博士のアメリカからの帰還後、カールスバード総会によって決議されたRSIとの交渉が、モスクワに送られた書状によって始められる。RSIはその交渉者の告知を

求められる。最初の交渉の場所としてプラハが提案される。SASIプレッセディーンストは案件のその都度の状況について報告するであろう[1]。――これはSASIの交渉に向けての始動を告げるものであった。

次の資料は、スイスの『SATUSスポーツ』第二六年巻第一〇号付録（一九三五年三月六日）の「SASIから」という欄での二つの報告である[2]。

一つは、「SASIの幹部会の会議」の小見出しで「二月二三日土曜と二四日日曜にスポーツインターナショナルの幹部会の会議が行われた。これは国際スポーツ運動の全ての重要な問題について取り組んだ」という簡単な報告だが、おそらく三月一日の交渉に向けての会議であったろう。

もう一つは、「ヒトラードイツのナチスポーツをボイコットしよう！」というアピール的タイトルの報告で、そのタイトルに続く部分、「ノルウェーでドイツに対するスポーツ・ボイコットが全くの苛烈さで起こった」の小見出しに続く部分、「一九三六年ベルリンでのナチ・オリンピアードへのスポーツチームの派遣に対して」の小見出しに続く部分という三つの部分に分かれる。この最後の部分は資料的に確認できる最初のSASIのベルリン・オリンピック・ボイコット表明である。「［それに対して］全ての国の労働者スポーツマンは態度を決定しなければならない。労働組合や政党に組織される労働者がこの行事に参加するとすれば、一つのスキャンダルだろう。スポーツマンの派遣のための国家資金の承認に対しても異議が申し立てられねばならない。なぜならそれによってドイツ労働者階級への詐欺が承認され支持されるからだ。ドイツ労働者スポーツが禁止され、施設が盗まれ、スポーツ場が練兵場として利用され、外国が軍備によって脅迫されるかぎり、教養のある人間はドイツ・チームと競技を行ってはならない。このスポーツ・ボイコットの貫徹は労働者スポーツ組織にかかっている」。

『国際スポーツ評論』第三年巻第三号（一九三五年三月）に「ついにRSIとSASIの間の交渉」という短信[3]が

印刷時に挿入されたかのように掲載された。「赤色スポーツインターナショナルの書記局から我々に、ＳＡＳＩの事務局がＲＳＩの書記局あてに、ＲＳＩとＳＡＳＩの間の交渉が今や行われ得ると連絡があったと伝えられた」。次にＳＡＳＩの代表団の名前を挙げ、「交渉はきっと三月初めにプラハで始まる」と書いた。

第二節　交渉の記録

①　アルヒーフ資料と公刊資料の比較

三月一日、プラハでの最初の交渉について報告した資料は、スポーツプレス（アクサミット）編文書以外に『国際スポーツ・プレッセディーンスト』、『国際スポーツ評論』、『ルントシャウ』の三点がある。だが、最も重要な資料はプラハのアルヒーフ資料「プロトコル」と三つの添付文書であろう。小論では、アルヒーフ資料を基礎にしながら上記三点の公刊資料の記述をスポーツプレス（アクサミット）編文書の記述と比較して異同を確認する試みを行って、この最初の交渉の展開を描いてみたい。実はこのような資料条件が得られるのはここだけなのである。二度目の交渉についてはアルヒーフ資料がなく、「不発の」三度目については公刊資料の記述も乏しいからである。

「プロトコル」の正式表記は「一九三五年三月一日、プラハでのＳＡＳＩとＲＳＩの共同会議のプロトコル」[4]で、表記のすぐ下に「速記原稿（ステノグラム）は交渉の間になされた演説［発言］の逐語的再現ではない。多くの演説は短くされ、幾つかの対話はおよそ含まれない」という注記が加えられている。署名は、ＳＡＳＩのシラバ、ドイチュ、ＲＳＩのアクサミット、ドローヌ（パリ）だが、ＳＡＳＩからミューラー（アウシッヒ）も参加している。訳稿にして四百字詰十七枚の「プロトコル」の全文の掲載は断念し、特に他の資料が記述していないところを適宜取り上げることにする。三つの添付文書のうち二つはＲＳＩの協定提案とＳＡＳＩの協定提案で、これはスポーツプレス

（アクサミット）編文書と『国際スポーツ評論』第三年巻第四号[5]にも掲載されている。もう一つの文書は「コミュニケ草案」だが、これは『ルントシャウ』では「交渉の締め括りに共同のコミュニケが書式にされた[6]」と記述され、スポーツプレス（アクサミット）編文書では取り上げられず、『国際スポーツ・プレッセディーンスト』だけに「共同のコミュニケが決議された[7]」として全文が掲載されている。「プロトコル」によれば「今や共同コミュニケが仕上げられる（添付物の通り）[8]」とあり、その添付物はＳＡＳＩ機関誌に全文掲載されたものと全く同文である。

資料比較によれば、まず、スポーツプレス（アクサミット）編文書がもう一人のＲＳＩ代表について「ドイツからの第三の代表はプラハに来ることを妨げられた[9]」と記述していることは『国際スポーツ評論』での報告[10]にも同じ記述があるが、『国際スポーツ・プレッセディーンスト』での報告にはない。次に、同文書の「共同の提案を仕上げるというＲＳＩ代表団の提案は、ＲＳＩの提案に立ち入る権限がないと言明したＳＡＳＩ代表によって取り入れられなかった。また、協定なしに相互のスポーツ関係に取りかかり、特に共同でヒトラー・オリンピアードに対する闘争を進めるという提案も取り入れなかった[11]」という記述は『国際スポーツ・プレッセディーンスト』にはない。第三に、同文書が「ＳＡＳＩの提案で、ＳＡＳＩの事務局にＲＳＩ提案を第二インターナショナルと協議する可能性を与えるために審議は中断された[12]」と記述したのに対し、『国際スポーツ・プレッセディーンスト』の「二つのインターナショナルは今や提案の検査を受け、適切な時に交渉を続けていくことになった[13]」という記述と、『ルントシャウ』の「見解の完全な一致を収めることができなかったため、差し当たりいかなる協定も結ばず、一致してまず双方の側から提出された協定草案を二つのインターナショナルの指導部の取り扱いに提出することになった[14]」という記述が、微妙な違いを持ちながら同様の今後の方向を示したことを指摘することができる。

ここでのスポーツプレス（アクサミット）編文書の交渉報告の大半を占めるＲＳＩとＳＡＳＩのそれぞれの協定提

案の全文は「プロトコル」添付文書と一か所を除いて同一である。その一か所は、添付文書のＲＳＩの提案の前文「国際的なスポーツ政治的状況に関する全面的な意見の交換の後、ＲＳＩの執行委員会とＳＡＳＩの事務局の代表は、次のような一致に至った」という記述[15]である。双方の協定提案とは次のようなものであった。

②　双方の協定提案

ＲＳＩの協定提案――

（一）ファシズムと、勤労者の経済的・政治的権利に対する資本の攻勢、労働者スポーツのファシズム化と軍国主義化、新たな帝国主義戦争の差し迫る危険に対するプロレタリアートの統一的な闘争戦線の強化のために、労働者スポーツの統一を地方的、全国的、国際的規模で確立する最も粘り強い活動が必要である。ＳＡＳＩとＲＳＩの会合代表は、労働者スポーツ運動の統一の確立のための実践的措置の即時の着手には何も障害となるものがないことを確認する（一連の国々――フランス、ノルウェー、アルザス・ロレーヌ――では、かつてＳＡＳＩとＲＳＩに属した労働者スポーツ組織の統一がすでに実現した）。

これまで分裂していた労働者スポーツ組織のこの実際の統一は、二つの労働者スポーツ組織の指導的センターが正しく統一を追求すればこれは急速に確立されること、統一したスポーツ組織の活動の最初の開始から大きな成果をもたらすことを示している。

（二）二つのスポーツインターナショナルの統一のための具体的措置は、二つのインターナショナルの執行委員会の代表と二つのインターナショナルの最も重要な全国セクションの代表からなる一九三五年四月の特別な協議会で討議されるべきである。

（三）フランス、アルザス・ロレーヌ、ノルウェーの積極的経験を顧慮して、最初に二つのインターナショナルの統一会議の召集を待つのでなく、［あらゆる形での］地方的、全国的規模での労働者スポーツの統一の実現への二つのインターナショナルの全国連盟と地方組織のイニシアティヴが促進されるべきである。

（四）労働者スポーツの統一の確立を早め、容易にするために、二つのインターナショナルは統一総会の召集までその今後の活動において次の原則によって導かれるであろう。

（a）二つのインターナショナルとその組織のスポーツ集会と他の共同の行動を制限する決議全部は廃止される。

（b）二つのインターナショナルの組織は、ファシズムと企業家攻勢に対する労働者階級の利益の擁護に向けられる統一戦線機関（共産党と社会党の代表からなる委員会、結合（ジョイント）委員会、等）の全ての措置を支持する義務を負う。

（c）二つのインターナショナルの組織は、労働者スポーツ組織の自由と独立性のための、労働者スポーツのファシズム化と軍国主義化のあらゆる試みに反対する共同の闘争を進める。

（d）RSIとSASIの連盟とクラブは、共同のスポーツ集会とスポーツ示威行動を実施し、大衆「クロス」とリレー競走をデモンストレーション、集会、会合と同様に組織する。国際的、地方的スポーツ競技会のカレンダープランを編成し、労働者スポーツの利益の強化のための措置を仕上げる。

（五）SASIとRSIの共同の行動から生じるスポーツ方法的、組織的、財政的問題は、それぞれ具体的なケースにおいて、二つのインターナショナルの代表の協議で決定される。全国、地方組織の間の相互関係に関する類似の問題は、RSIとSASIの当該の全国、地方組織の相互の合意によって規則付けられる。

（六）達成される合意と結びついて、二つのインターナショナルは将来にわたって相互の攻撃を止め、なお未解決の統一戦線の問題についての同志的な議論に限定し、達成された合意の実施を妨げ労働者スポーツの統一の実現を阻

む組織と人物を批判する。同時に、ＳＡＳＩとＲＳＩの代表は、連盟の内的生活が民主主義に基礎を置く、すなわち、意見の自由と、規約の範囲内で自己の見解を主張する権利が認められ、指導的決定機関の選挙で比例的な代表が選ばれる、ということを確認する。

ＳＡＳＩの協定提案――

（一）ＳＡＳＩの全国組織は、ＲＳＩの連盟との競技会を開催する権限を認められる。

（二）ＳＡＳＩはＲＳＩと不可侵条約を結ぶ。それに従って、協定の持続する間、協定を結んだインターナショナルの人物と機構への公然たる攻撃は止めるべきである。

（三）協定の一方の部分に、他方の協定パートナーの成員の行動についての苦情が生じた場合、この訴えはＳＡＳＩあるいはＲＳＩの幹部会に提出されるべきである。当該の幹部会が、提出された苦情を訴願人の意味で解決しない場合は、これは、二つのプロレタリア・スポーツインターナショナルの設置されるべき対等の委員会に提出され、決定されることができる。

（四）ＳＡＳＩとＲＳＩは、それに加盟する全国連盟がブルジョア・スポーツ連盟との競技会を行わないことを合意する。

（五）この協定は一九三五年と一九三六年の間、有効である。この二年でなされた経験によって、ことによると必要になる新しい定式化を見出す可能性が与えられるであろう。

スポーツプレス（アクサミット）編文書が記録した「同時にＳＡＳＩ代表は次の意見を表明した」ということにつ

いて、その記録を引用しよう。

「ＳＡＳＩは単独で（第二インターナショナルの同意なしで）政治的行動についての協定を結ぶ権限がない。他のインターナショナルの活動に介入してはならないのである。代表団は総会決議によって縛られている。スポーツ的協力で始めなければならない。政治的議論は当分後景に置くべきである。ＳＡＳＩ代表団は、協力が組織的融合まで継続されるべきだということを知って嬉しく思う。だが、まず直接可能な事を問題にしたい。統一的スポーツ組織は政党の統一なしにはあり得ない。ＳＡＳＩ連盟は社会民主党と全く密接に接触している。これは全ての決定において政党の意見を聞かなければならない。まず信頼の雰囲気を作り、この信頼を成熟させる忍耐を持たねばならない。相互の闘いは止めなければならない、など」[16]。――これは「プロトコル」でのドイチュ発言の要約であることを後に見るであろう。

③「コミュニケ草稿」とそのイニシアティヴ

「コミュニケ」は、すでに述べたようにＳＡＳＩの『国際スポーツ・プレッセディーンスト』一九三五年三月四日号に再録されているが、小論は「コミュニケ草稿」を紹介することによって、これの作成のイニシアティヴがＳＡＳＩにあったという推論の実証を行いたい。「コミュニケ草稿」は、手書きで「ＳＡＳＩとＲＳＩの審議（公式コミュニケ）」[17]というタイトルが付けられている。内容はＳＡＳＩ機関誌での再録「コミュニケ」と同文であるが、いくつか手書きで修正、あるいは挿入されている箇所がある。

「今日三月一日、プラハに社会主義労働者スポーツインターナショナルと赤色スポーツインターナショナルの全権

的代表が共同の協議に集まった。

社会主義スポーツインターナショナルの名でドイチュ博士が赤色スポーツインターナショナルの代表に挨拶し、次に社会主義スポーツインターナショナルの意見にしたがって、二つのスポーツインターナショナルの協力が構築される基本方針を説明した。赤色スポーツインターナショナルの名でアクサミット［この名前が手書きで修正されている］が、労働者スポーツマンの統一はまず政治インターナショナルの統一努力を待たずに可能であることを詳述した。彼はまた、今日の交渉はただ始まりでしかあり得ず、見解を完全に明らかにするためにもっと後の時点で集まるべきであるという意見であった。さらに代議員ミューラーとシラバが社会主義スポーツインターナショナルに賛成して、ドローヌ［この名前が手書きで修正されている］が赤色スポーツインターナショナルに賛成して発言した。最後に二つのグループによって提出された協定提案は、二つのインターナショナルにとって権限のある決定機関に提出されることが合意された。

双方から、共同の関係を固め、そして［このundは手書きで挿入されている］信頼の雰囲気が作られるように［このdamitの前にコンマが加えられている］、すでに今全ての攻撃を止めることを喜んでする気持ちが表明された。二つのグループの代表によって、労働者スポーツ運動はファシズム［この語の前に手書きでdenが付けられている］に対する闘争における最も重要な手段の一つであることが説明された。この精神は労働者スポーツ運動において生き生きと保持されねばならない。同様に、国際的な［「戦争の危険と力を込めて戦うことは」――この部分が消えていて判読できないため、再録から補う］労働者スポーツマンの任務である」。

ＲＳＩ代表のアクサミットとドローヌの名が誤って綴られ（AksamitがAxamitとされ、Delauneの元の綴りは消されていて見えない）、手書きで修正されたこの草稿は、少なくともＲＳＩの側が作成したものではない。タイト

ルに括弧で入れられた「公式コミュニケ」の「公式」は、再録では削除されている。ＳＡＳＩの側が作成し、ＲＳＩ側が修正し、「公式」の表現の削除もしたのであろう。その結果、ＳＡＳＩが再録をし、ＲＳＩはこれを協定提案の再録に比べて再録の価値がないとみなしたのであろう。一方、ＳＡＳＩは協定提案の再録をしなかったのである。こうしたことからこの「コミュニケ」はＳＡＳＩのイニシアティヴで作成されたものであると思われる。ＲＳＩがこの「コミュニケ」に言及した資料を見れば、さらにこの「コミュニケ」の評価が明らかになる。それは、後に詳しく取り上げる予定のＲＳＩ執行委員会のＳＡＳＩ事務局への書簡（一九三五年四月一二日付け）[18]の中の一節である。それは「統一に関する交渉が決して積極的な形の具体的な結果を示さなかったことについて遺憾の意を表明する」と述べた後、「コミュニケ」からのものと明示せずにその文章を引用して次のように言っている。「同様に、ファシズムと帝国主義戦争の危険に対する労働者スポーツマンの共同の闘争の組織化に関する交渉が、ただ『労働者スポーツ運動はファシズムに対する闘争における最も重要な手段の一つである』、『国際的な戦争の危険と力を込めて戦うことは労働者スポーツマンの任務である』という確認をすることができただけだったのを残念に思う」[19]。すなわち、ＲＳＩにとって評価できないものであったのである。書簡は、「交渉の結果が極めて不十分だったとみなすことを隠したくない」とさえ述べている。

④　ＳＡＳＩの交渉報告と「プロトコル」

ここでＳＡＳＩの『国際スポーツ・プレッセディーンスト』での交渉報告「プラハでのＳＡＳＩとＲＳＩの最初の交渉」（一九三五年三月四日号）を改めて取り上げよう。交渉から三日後の速報である。これは「二つのパートナーの接触として特徴づけられる」と書き始め、「対立した意見が明確に表現されたとはいえ、交渉のトーンは双方によ

って全く同志的なものであった」という。以下、交渉の概要が示される。「同志ドイチュによって、過去の不快な出来事よりも未来のための活動を取り扱うという原則が提出された。ＲＳＩの代表が、スポーツインターナショナルの統一は政党の統一なしでも可能であるという意見を主張したのに対して、我々の代表は、社会民主党との我々の組織の密接な結び付きに注意を与え、すでに労働者スポーツの基本思想によって最終的な統一は政治的分野でも統一が生じるときにのみ生じ得るということを確認しなければならなかった。さらにＳＡＳＩ代表の見解は、大きな政治的考慮はこの交渉の問題であるべきでなく、現在解決できる問題のみが話し合われるということ、達成できる実践的活動が世界のための美しい演説よりも重要だ、とりわけ相互の攻撃が止められるべきだ、苦情は二つの幹部会に提出し得る、統一の構築は下から生じねばならない、ロシア人とのスポーツ交流が最初の始まりであるべきだということである」[20]。――これは報告の前半部分である

まずこの記述を「プロトコル」と比較しよう。「プロトコル」の冒頭は「ドイチュ博士が出席者に挨拶し、協議のテーブルに一緒につくことができたことの喜びを表し、協議が和やかな終末を迎えることを希望した。同時に彼は、ＲＳＩの最強の組織、ロシアが代表されていないことに不審を表した」というものである。次にアクサミットの長い発言があり、そこで彼は「ＲＳＩは交渉を始まりとしてのみ見ており、交渉の今後の進展においてＲＳＩはモスクワに代表を招待し、そこで交渉を継続したいと考えていると説明した。我々は手紙の内容に従って、交渉にはアクサミット、ドローヌ、そしてドイツからの一人の同志が参加すべきだと決定した。多分この同志がこちらに来ることは可能でなかったのだろう」と話し始め、「二つのインターナショナルの間には長い間およそ全く接触がなかった。我々は我々の最後の申し出を一九二七年ヘルシンキ［ＳＡＳＩ総会］に向けて出した。この今日の協議が労働者スポーツ運動の発展における新しい段階を、すなわち、我々が労働者スポーツ運動の分裂を終わらせ、我々が二つの組織の融

合で終えられるように協力を始めるという方向での新しい段階を意味することが我々の願いである。我々が長年協力してこなかったのにはその理由があったが、状況が変化した」と述べて、「このことから出発して、我々はあなた方にカールスバードでの総会に書簡を送った」こと、そして「我々がＳＡＳＩ事務局宛の手紙［一九三四年一〇月二六日のシラバのＲＳＩへの書簡に対する返信のこと］を送ったとき、いかなる観点に我々は導かれていたか。私はすでに一二月にパリで［フランス統一総会のこと］ＲＳＩの意見とは何かを語った」ことを指摘して、統一についての見解を次のように示した。「我々は、個々の国での政党が了解したり全く統一するまで待つべきでないという意見である。政党にとって統一は労働者スポーツ運動にとってよりもはるかに困難である。我々は、スポーツ上の統一の確立によって本質的に労働者階級の行動統一の確立に寄与することができるという意見である」。そして、「我々は手紙で、我々が［統一的な組織が運動すべき］基盤をどのように思い浮かべているかについて我々の意見を説明した」として、それを再論した。「我々はまた手紙で実践的形態についても語ったが、今日ここでなおこの問題を説明したいと思う」と、「スポーツ協力で始めるべきであり、この協力は合併まで続けるべき」こと、「ＳＡＳＩとＲＳＩの組織がある全ての国で、全ての地域で共同の集会を実施し、協力の問題について話す」こと、「ヒトラー・オリンピアードに対する行動を一緒に着手する」ことを提案した。「そうした共同の行動は時と共に、現存する原則的な意見の相違を解消するであろうし、我々は運動の組織的統一を作るところに至るであろう。」そして、「共同の国際的統一会議」で作られる「共同のスポーツインターナショナル」を目標としつつ、「個々の国で協力する」ことの可能性をフランスとノルウェーの例で示し、「個々の国で統一を実現することが可能であるとき我々はまず国際的会議を待つ必要はない。それ故我々は、フランスの同志がＲＳＩから脱退したいという彼らの歩みを承認した」ことを明らかにした。「個々の国での統一は民主主義の基礎に基づくべきだ」という原則、「我々が一致に出会うとき相互の攻撃が行われるべき

でない」との表明の後、この発言の最後を次のように締め括った。「もう一度、我々がプラハでのこの会合を始まりとみなし、我々がこの協議をモスクワで続けること、それによってあなたがたがロシアの同志と全ての問題を話し合うことができることを提案していることを強調したい」[21]。

このアクサミットの最初の発言に続いてドイチュが発言する。彼はまず、「私は会合以前の歴史をはっきりさせることに携わるつもりはない。差異は十分にあった。我々には過去が問題ではなく未来が問題なのだから」と、議論の対象から過去の問題をはずし、次にアクサミットの議論に対して、「あたかも我々がファシズムに対する闘争で別の見解であるかのように様々な形で述べられてきた」と反論している。そして、「もちろん我々は、政治的行動についての統一のみに当たる権限がないことは全く明白だと付け加えねばならない。我々は他のインターナショナルの活動に介入してはならない。我々は交渉を我々の活動分野に制限することができる」と、交渉議題から政治的行動の問題をはずすように仕向けている。「同志A〔アクサミットのこと〕はスポーツ協力で始めなければならないという一連の実践的提案をした。我々が政治的議論を差し当たり後景に置くときにはるかに先に進む」として、アクサミット提案についての議論の入口を示す。「我々は最初に、直接可能な事柄について語りたい。我々はここで実践的な活動に至ることを試みたい。同志アクサミットは実践的提案をした、日程カレンダーの編成、共同の集会、ヒトラー・オリンピアードに対する行動と。そして終わりに至ることができるまで相互の攻撃は止めなければならないと自ら強調した。私はこの実践的提案を議論の基礎として全く可能だとみなす。我々は同様の提案を提出してきた」。こうしてSASIの協定提案をここで示している。「プロトコル」は括弧で「添付物を見よ」と書いている。ただし、彼は「我々はいかなる締結もすることができない」と述べており、この交渉は何らかの締結を目的としないものであったことを語っている。ドイチュの発言の後半は、モスクワへの招待について個人的には感謝する（「私はソビエト同盟

の建設を知ることに大きな関心を持っているから」）が、「我々がそうした招待を受け入れることができるのは我々が締結に至るときだけであり、そうでなければむしろ出て行かないほうがいいということをあなたがたは理解するであろう」と、すぐには受け入れられないことの表明、次の交渉日程設定は誤りだとみなす理由として「我々は政治、労働組合インターナショナルの了解を取らねばならない。事務局を召集し問い合わさねばならない」という手続き、「我々がモスクワに行く前にまず信頼の雰囲気を作ることがより賢明だとみなす」という気分の問題の指摘をして、結局後者の問題を決定的なものとしている。すなわち、「あなたがたが我々と共に、我々がどんな背景思想もなしに信頼のこの雰囲気を作り、その点で実際に活動する用意があるという意見であれば、インターナショナルの統一はさらに先に進むことができる」と、ドイチュは彼のここでの発言を締め括ったのである。(22)

「プロトコル」はこの後ミューラー、シラバ、ドローヌのそれぞれ短い発言を記録しているが、ミューラー、シラバが共産主義者批判とチェコスロヴァキアでのヒトラー・オリンピアード反対闘争への着手について述べたのに対して、ドローヌがフランスの経験の教訓を具体的に述べたことが分かる。このドローヌ発言に対してドイチュが反論している。これは次の展開と関連するので後述したい。

『国際スポーツ・プレッセディーンスト』の交渉報告の後半部分は次のようである。「ＲＳＩの代表は労働者スポーツについての彼らの見解を物語った。彼らの組織は共産党の監督下になく、ＲＳＩのスポーツマンの約二〇パーセントだけが共産主義者だという。彼はソビエト・スポーツの問題と、なぜロシア人がブルジョア側と競技したかの理由を語った。またＲＳＩの代表は交渉をより密接な接触への第一歩として特徴づけた。彼らも、人物と組織に批判を加えることを留保するとしても、係争中の問題は同志的な形で解決されるべきだということに賛成である。なぜＲＳＩの最大のセクションのロシア人が出席していないのかという同志ドイチュの問いに、同志アクサミットは、ＲＳＩの

執行部全体の参加の下でモスクワで交渉を続ける意図があると述べた。それから、非常に基本的な発言においてもなお非常に多くの個別問題が十分に話し合われ、ＲＳＩから、そしてＳＡＳＩからもそれぞれ、統合の個別的問題を協議の基礎として設定する提案が提出された[23]」。

「プロトコル」でのアクサミットの二回目の詳論とそれへのドイチュの反論がこの部分に該当する。アクサミットは、「労働者スポーツ運動の性格の問題について若干の原則的な論評をしたい」と述べて、「政党政治的基礎の上では統一を確立することができない」こと、「スポーツ連盟においてあれこれの政党の綱領を承認することを条件にしてはならない。どんなスポーツマンもただ労働者階級と一緒に闘争を進める用意がなければならない。そうした基礎の上ですでに他の国では統一が作られた」、「スポーツ連盟は独立したものであり、そうした共通の基礎を作るべきだと信じる」と提起した。さらに、「あなたがたが繰り返し我々が共産主義組織であり、我々が個々の国で共産党に従属していると主張するとき、あなたがたは誤っている。我々の連盟には二〇、三〇、四〇パーセントの共産主義者がいる。無党派のスポーツマンも十分いる」と反論し、「我々がスポーツをプロレタリア階級闘争に奉仕するということでは我々の間にはいかなる意見の相違もない」のに「ブルジョア運動の一部となっているＳＡＳＩの多くの連盟がある」としてポーランド、ハンガリー、パレスチナの例、チェコスロヴァキアでのＤＴＪの防衛大会参加やブリュンのアイスホッケー・ゲームを挙げ、「我々は伺いたい、これら全ての交流は廃止されるのか」と、ＳＡＳＩのブルジョア・スポーツとの交流否定論の矛盾をついた[24]。ドイチュが「原則は明らかで我々はブルジョア組織とは結びつかない」と言葉をはさんだ[25]が、アクサミットは続けてポーランドの情勢の「そうあらざるを得ない」ことの理解から「例外の場合があること、顧慮しなければならない特殊な情勢があることを考慮の対象にする。そうした例外がソビエト同盟である」と、ソビエト・スポーツとブルジョア・スポーツの交流と労働者スポーツとの関係を次のように論じた。

「勤労スポーツマンをブルジョア陣営から我々の隊列に引き入れることに努める。だが、このスポーツマンが自分から我々のところにやって来るまで何もせずに眺め待っていることはできない。これが、なぜ我々とソビエト競技者がブルジョア・スポーツマンとゲームを行うかの理由でもある。それによって世間にソビエト・スポーツマンがどんなに高い水準にあるか、彼らがブルジョア・スポーツマンを打破できることを注意させたい。労働者運動と関係を持たない勤労者も、ロシアのプロレタリア身体文化がいかに高度であるか、よく考えるに違いない。（中略）ソビエト・スポーツマンは各国で労働者スポーツマンの意志に反してゲームをすることはしないであろう」と。そして「我々の組織に関して、私は情報として、二三の全国連盟を持っていることを伝えたい。合法的組織とファシズム諸国での非合法組織を持つ」と付け加えた。[26]

これに対してドイチュは次のように述べた。「政党の統一なしに統一的なスポーツ組織を持つことはできない。あなたがたは共産主義組織でないということを我々に信じさせようとしたけれども、真面目な人士とみなそうと我々は思う。（中略）我々はブルジョア側とのいかなるスポーツ交流もしないと提案した。あなたがたはブルジョア・スポーツマンの下にも労働者がいると言う。我々の経験では我々の側の人物が参加して影響を及ぼす最小の可能性もない。これは自己矛盾である。ソビエト・スポーツマンが彼らの水準がいかに高いかを示すためにこちらに来る。それを我々は全く欲しない。我々はそれに全く賛成しない。我々は記録システムを撃退する」。[27]――これは基本的なスポーツ観の問題の提起であったが、この点での議論はこれ以上なされなかった。

先に示したドローヌ発言とそれへのドイチュ反論を取り上げよう。ドローヌは「同志ドイチュは信頼の雰囲気を作ることが重要だと示唆した」と述べて、それに同意しながら、「フランスの労働者は直ちにRSIの要求を理解した。労働者組織の統一が労働者にとってだけでなくブルジョア・スポーツにとっても大きな影響を及ぼしたことに注意が

向けられる。ファシズムに対する闘争へのこの統一は三〇万人の会員を持つ左翼的方向のブルジョア組織に大きな印象を与えた。パリの協議会で協力の協定が決議された。この協定で最も重要な点は共同の競技会の開催だ。それがファシズムに対する闘争で重要とみなしたのでこの協定を決議したのである」と、その経験を示した。ドイチュは、それに対して「私はブルジョア組織と協定を結ぶことに反対だ。なぜなら、それからなんらの利益も得られないからだ」と反論した。ドローヌはすぐに「これはアマチュア組織であり、そうした協定を結ぶことができる」と切り返した。[28] ここでの議論は反ファシズム・スポーツ運動の組織論の問題であったが、これも切り結んだものとならなかった。

最初の交渉はこのようなものであった。

第三節　三・一交渉後の展開——四月の往復書簡

①　RSIのSASIへの四・一二書簡

前節で一部取り上げたRSI執行委員会のSASI事務局への書簡を改めて取り上げよう。スポーツプレス（アクサミット）編文書では日付け記載がないこの書簡は、後のSASIの返信で四月一二日付けであることが分かる。さらにロンドンのアルヒーフ所蔵のこの書簡の英文写し[29]から発信地がストックホルムであったことも判明する。この英文写しは要約的で、完全訳ではない。要点が示されている点で有益であるが、重要な認識の表明部分が省略されている点で不十分である。この点は以下で示していきたい。

書簡は、「二つの最も重要な問題に態度を決めたい。（一）国際労働者スポーツ運動の統一の問題、（二）ファシズムと帝国主義戦争に対する二つのスポーツインターナショナルの全ての組織の共同の闘争の問題」として、まず

（一）について三・一交渉でのドイチュ見解（「この見解は、統一的労働者スポーツ組織は政党と労働組合の前もっての統一なしにはあり得ないというものだ」）への不同意、むしろ誤った見解との指摘をし、次のような認識を表明し、提案をした。「労働者スポーツ運動における労働者民主主義を基礎に、どんな党や労働組合に属するかに関わりなく全てのプロレタリアが統一的スポーツ組織で共同のスポーツを実践し、ファシズムと帝国主義戦争の危険に対して闘うことができることを我々は思い浮かべることができる。この労働者民主主義を基礎に、その枠では国際労働者スポーツ運動に存在する綱領的、戦術的性格の相違も統一的労働者スポーツ組織において除かれることができる。（中略）そこから出発して我々はあくまで、労働者スポーツ組織の統一の即刻の確立が国内的規模でも国際的規模でも必然的であるばかりか可能でもあるという我々の見解を堅持する。それ故我々は改めて二つのインターナショナルの統一についての我々の提案を取り扱うための会合の問題を提起する。この課題は我々の見解によれば即座の決定を要求する。それ故我々は統一についての交渉を直ちに再開することを提案する」[30]。

ところがすぐに「二つのスポーツインターナショナルの統一の実践的追求の困難」を認めて「即座に統一の問題の所在の最初の共同の審議で交渉の最終結論を待たずに相互の協定を結ぶように我々の提案を改める」という方針転換が唐突に示されるのである。これについては当時の国際共産主義運動の動向との関連で理解することができるであろう。後述したい。今はこの書簡の言うところを続ける。「そうした協定の締結を容易にするために我々はあなたがたの提案から次の点を協定に共に入れたいという用意があることを言明する。（一）ＳＡＳＩの全国組織がＲＳＩの連盟との競技会を開く権限を認められる。（二）ＳＡＳＩはＲＳＩとの不可侵条約を結ぶ。これに従って協定の持続の間協定を結んだインターナショナルの人物・機構への公然たる攻撃は止める。（三）協定の一方の部分に他の協定パートナーの会員の行動について苦情がある場合、この訴えはＳＡＳＩあるいはＲＳＩの幹部会に提出されるべきであ

る。当該の幹部会が苦情提出者の満足のいくように苦情を解決しないならば、それは二つのプロレタリア・スポーツインターナショナルから設置される対等の委員会［英文写しでは合同委員会］の決定に委ねられ得る[31]」。

次に、三・一交渉でのＳＡＳＩ提案の第四項、「ＳＡＳＩとＲＳＩはそれに加盟する全国連盟がブルジョア・スポーツ連盟との競技会を行わないことを合意する」についての不同意の理由が表明される。ここでの英文写しは「（一）多くの労働者がまだブルジョア組織に所属しており、彼らをこれらの団体から労働者スポーツクラブに引き込むのに接触が何度も必要である。（二）労働者とブルジョアのクラブ間のスポーツ接触の目的は労働者のクラブの優位を際立たせることだ。これは特にロシアの場合に当てはまる[32]」となっているが、書簡原文では（二）のようなことは言われていない。英文写しの当事者の思いが書き込まれたとしか考えられない。書簡では（一）について詳しく論じられていて、「階級闘争の原則がスポーツ分野でも非妥協的に呵責なく維持されねばならない。（中略）ブルジョア・スポーツ連盟のこのプロレタリア会員をこの連盟の反動的な指導部と等置したり、彼らをブルジョア的影響に今後も委ねることは誤りだろう。だから我々はブルジョア・スポーツ組織からのプロレタリア大衆の切り離しの方向で働くような方法を適用するのだ。（中略）この方法の適用がブルジョア的影響からのプロレタリア・スポーツマンの解放のために拡大すべきだという意見である。」という見解が示される。ただし、「全体の行動の開始を容易にするためにこの問題はさしあたり保留して置くことができるし、協定に取り入れる必要はない」として、この問題の決着は当面の論点としないという方針を取った[33]。

同時に、三・一交渉でのＲＳＩ提案から協定に取り上げられるべき項目が挙げられる。「第三項目：二つのインターナショナルの指導部は協定の署名の瞬間から、二つのインターナショナルの統一を待たずに、あらゆる手段で全ての国で全国、地域規模での労働者スポーツ組織の統一を促進することが義務づけられる。第四項目のｂ：二つのイン

ターナショナルの全国組織は、共産党と社会党の統一戦線によって組織されるファシズムと戦争の危険に対する全ての行動に参加することが義務づけられる。第四項目のc：二つのインターナショナルの全国組織は労働者スポーツ組織の自由と独立のための、労働者スポーツのファシズム化と軍国主義化の全ての試みに反対する共同の闘争を進める」。

こうしてSASIとRSIの提案から取り出される合計六項目が討論項目となることが示されるが、さらに次の三項目が新しい会議で話し合うことが提案される。

「（一）一九三六年ヒトラー・オリンピアードに対するSASIとRSIの共同の闘争の組織化。（中略）（二）二つの労働者スポーツインターナショナルの統一への確固とした意志の強力な示威となる労働者スポーツの国際デーを実施すること。（三）RSI執行委員会はこの協議であなたがたのプラハ提案の第三項目に応じた対等の委員会を選出することを提案する」。――（一）の中略の部分は次のように言われている。「二つのインターナショナルは一九三六年ベルリンでのファシズム・オリンピアードに対する闘争をその当面の課題にしなければならない。このオリンピアードの準備はドイツ・ファシスト殺人一味の首謀者によってその対外政策的目的のために利用されている。彼らはこの準備によって様々な国のスポーツ運動との政治的結合をつけようと試みている。このオリンピアードでファシストはスポーツの成績で抜きんでるばかりかスポーツの軍国主義化とファシズム化の成功を示すことを企てている。この意味でオリンピアードの準備はドイツ・ファシズムの戦争準備の一部である。オリンピアードの組織者、ドイツ・ファシストは今日公然と帝国主義戦争、特にソビエト同盟への反革命的攻撃を準備している。ファシズム・オリンピアードに対する、全ての国でのその準備に対する闘争への労働者スポーツマンの統一と団結は今日かつて以上に必要なのである」[34]。――このベルリン・オリンピアード反対闘争論はその後の運動の基調となる。

書簡は「共同のメーデー行動に参加できるように五月一日以前にも会合を定めることを提案する」[35]と述べて終わる。英文写しにこの部分はない。

小論はこの書簡の日付けと最後の提案に注目したい。というのは、ウィーンの出版社が一九八六年に発行した『データでの国際労働運動史』の一九三五年四月一〇日の記述がこの書簡の重要な連関を示しているからである。すなわち、「コミンテルン執行委員会のSAIへの提案、ファシズムと戦争に対する統一的闘争組織を作り、五月一日に共同の示威行動を組織しようと。同時に、共同の呼びかけでヨーロッパの一〇の共産党、KJI（四月一二日）、RSI（四月一二日）と他の共産党が類似の提案で社会民主主義党と組織に向かった。SAI（四月一五日）、SASI（四月一六日）、SJI（四月末）のように主要な社会民主主義指導部は提案を拒否するか、それに答えないままであった。にもかかわらず五月一日には様々な国で統一的な五月デモが実施された」[36]［傍点、引用者］。

RSIの四・一二書簡は、国際的な五・一行動の共同の呼びかけの一環でもあったのである。もちろんこれは三・一交渉に基づく次の交渉への提案であったが。

② SASIのRSIへの四・一六返信

SASIはこれに対して四月一六日付けで返信を送った[37]。この返信にもアルヒーフ所蔵の英文写し[38]があるが、これは返信の後半部分のブルジョア・スポーツとの共同否定論の詳細な部分を省略している。

返信は冒頭で「SASI執行部は今年の四月一六日の会議で四月一二日のあなたがたの書簡を検討した」と書いているが、この会議について『国際スポーツ・プレッセディーンスト』一九三五年四月一七日号の「SASIの幹部会の審議」という記事が次のように伝えている。「この中で最も重要な点としてRSIとの交渉への態度決定が立ち入

って根本的に討議された。ＲＳＩから比較的長い手紙が提出された。これは、幹部会によって決議された返信とともにＳＡＳＩの全国連盟に査定のために提出された。我々は我々の返信を次のプレッセディーンストの号に公表することにする[39]」。

返信の前半はＳＡＳＩの統一論である。「我々の執行部はあくまで、戦争とファシズムに対する共同の闘争への労働者スポーツマンの統一を二つの労働者スポーツインターナショナルが統一的組織を結成することによって惹起しようとするのは正しい道ではないという意見である。むしろ、組織頂点の提携でなく大衆の共同の行動が我々の共同の闘争の始まりでなければならない。それに対してあなたがたが労働者スポーツマン大衆は頂点組織の提携を望んでいるという意見を表明するのであれば、我々は我々の方があなたがたよりも我々の大衆の気分をよく判断することができると言わなければならない」。「同志ドイチュがすでに三月一日の会合で述べたように、建設されるべき組織改造は屋根でなく土台から立て始められることがより正しいと我々はみなす。それ故、存在する労働者スポーツインターナショナルの協定の締結によって共同の闘争戦線を作ることが合目的的であると思われる。組織の融合はそうした闘争共同体からのみ組織的に成長することができる」。

後半はブルジョア・スポーツとの共同否定論である。「個々の協定の項目に関しては我々はとりわけブルジョア・スポーツマンとの労働者スポーツマンの競技会に関するあなたがたの提案を受け入れることができないことをはっきり言う。我々はブルジョア組織との全ての競技会の全般的な禁止を望んでいる。この禁止はまさに二つのプロレタリア・スポーツ組織の共同の活動の基礎であると我々は思う。プロレタリア・スポーツマンがブルジョア・スポーツマンと共同の行事に並ぶとき、労働者スポーツの思想にとってどんな利益が生まれるのか我々は理解することができない。特にこれはソビエト同盟の労働者スポーツマンに当てはまる」。――これから後のエリート論は注目すべき議論

である。「ソビエト同盟では労働者スポーツマンからエリートを養成することが可能である。このエリートは全世界にとって模範的でなければならない。しかし、このエリートが独立の労働者スポーツの思想を高く掲げる代わりにブルジョア・スポーツマンと共同で登場するなら、これは労働者スポーツに利用されずに逆にそれを非常に傷つけるものである。どこかで小さな大したことのない労働者スポーツフェラインがブルジョア側との競技会なしではやっていけないと信じるのは不快である。だがソビエトの大きな強大なスポーツ組織がブルジョア側と結びつくときはどうだろう！　この結びつきは我々によって拒否されねばならない。あなたがたがこれに競技会が行われる当該の国の何らかの小さい労働者スポーツ組織の同意を引き合いに出すことによって偽装を施すときでも。この我々の立場がＲＳＩによって分かち合えられるならば、我々のすでに長年に渡って存続する決議に基づいて直ちにソビエト・スポーツマンとのスポーツ交流が始まり得る」。

最後に、「我々は今や、我々に加盟する全国組織にあなたがたの書簡を態度決定のために伝えることにする。全国連盟のこの態度決定なしには我々の執行部は国際的頂点スポーツ組織が新たに会合に集まるのは全く不毛だとみなす。我々の全国連盟がそれほど迅速に返事することも、二つの労働者スポーツインターナショナルが五月一日以前に会うことができることも、我々にはありそうもないと思われる」。

③　ＲＳＩのＳＡＳＩへの六・二書簡

ＳＡＳＩの四・一六返信に対するＲＳＩの書簡[40]は六月二日付けで、ＳＡＳＩの返信から一月半が経過していた。その内容は、返信での「存在する労働者スポーツインターナショナルの協定の締結によって共同の闘争戦線を作ることが合目的的であると思われる」という部分を捕らえてそれを「満足をもって承った」として、一九三四年九月二二日

の書簡での提案、一九三五年四月一二日の書簡での協定提案の六項目への総括を想起させつつ（その部分省略）、四・一二書簡での「そのような協定の締結のための会合に達する提案」について「ＳＡＳＩの事務局は四月一六日の書簡ではこの具体的提案を沈黙で無視している」と、ＳＡＳＩの言行不一致を批判し、「再度できるだけすぐに統一的な闘争戦線を二つのインターナショナルの間の協定の締結によって確立するために会合することを提案する」ということにとどまらず、大半の議論をＳＡＳＩのブルジョア・スポーツ・ボイコット政策とソビエト・スポーツ封鎖廃止条件に対する反論に費やし、最後に改めて次のような提案を加えたものであった。「ブルジョア・ファシズム・スポーツ運動に対する闘争の高揚への願いによって導かれて、今一度、二つのインターナショナルの代表の会合を提案する。この協議で行動統一協定の締結を討議すること、二つのインターナショナルの統一の問題での意見交換を続けること、一九三六年ヒトラー・オリンピアードに対する共同の闘争の計画を仕上げることが必要だとみなす。ＳＡＳＩ事務局が統一と行動統一協定の締結の問題について決定を下すために必要とされる全権を自由に使えない場合は、ＲＳＩ執行部は、ただ一九三六年ヒトラー・オリンピアードに対する共同の闘争の問題を議事日程に設定することだけを提案する。ＳＡＳＩ事務局に、二つのインターナショナルの代表の討議の時間と場所を自ら確定し、我々にできるだけ早く知らせるよう、依頼する」。

ＳＡＳＩへの反論部分に立ち返ってみよう。まず、ＳＡＳＩのブルジョア・スポーツ・ボイコット政策批判論。「四月一六日の書簡であなたがたは我々の組織とあなたがたの組織の間の共同の行動の障害として、ブルジョア・スポーツの克服の方法と手段の問題での現存する意見の違いを前面に出している。あなたがたはあたかもＲＳＩとソビエト同盟身体文化最高評議会がその行動によってブルジョア・スポーツを支持しているかのように見せかけようとしている」と、ＳＡＳＩの議論を「言いがかり」的なものと捉える。そして、ブルジョア・スポーツに対するＲＳＩの

闘争がファシズムの中で進められていることを述べ、「ＲＳＩ組織がどこで公式のファシズム組織と結びついているか、あるいはその活動によってスポーツのファシズム化と軍国主義化を促進しているか、ＳＡＳＩ事務局はただ一つの事実も挙げることができない」と言う。続けて「ＲＳＩはブルジョア・スポーツフェラインにいる勤労者スポーツマンをファシズムに対する闘争に組み入れるために、彼らの獲得のために闘うし今後も闘うであろう。しかしＳＡＳＩ事務局はブルジョア組織におけるこの勤労スポーツマンをボイコットすることを勧める。だがそのようなボイコット政策はとりわけドイツ、オーストリア、その他の国の反ファシズム労働者スポーツマンとのあらゆる結合が断たれねばならないという帰結になるだろう。というのは彼らはファシズム・スポーツ運動に対する彼らの大胆な闘争をファシズム・スポーツ組織そのものの内部で進めているからである」と、ＳＡＳＩの政策を批判するが、ここにはまだ人民スポーツ運動の論理はないと言わなければならない。

次は、ソビエト・スポーツ封鎖廃止条件批判論。「四月一六日のあなたがたの書簡でブルジョア・スポーツとの関係をなお別の連関で持ち出している。あなたがたの立場の採用をＳＡＳＩ執行部側のソビエト同盟に対するスポーツ封鎖の廃止のための条件として提起している」ことに、こんなことが「なお問題になり得るのか」と反論する。その実証をフィンランドＴＵＬ、ノルウェーＡＩＦとソビエト同盟身体文化最高評議会とのスポーツ関係協定の締結、チェコスロヴァキアＤＴＪの一九三五年一月二六日書簡（シラバ署名）とソビエト同盟身体文化最高評議会の同意、ＤＴＪのモスクワ招待の返事、ベルギーも同様の提案（デヴリーガーの参加の下で）などといったＳＡＳＩ連盟の行動によって示し、「これらの事実は、国際スポーツ運動へのソビエト同盟のスポーツ運動の力と影響の増大がＳＡＳＩ連盟でも労働者スポーツマンの広範な層の最大の反響を見出していることを示している。したがって、実践においてＳＡＳＩ執行部によって出されたスポーツ封鎖はあなたがたの組織によってずっと以前にもはや実施されていないの

である」と言う。この中で「社会主義建設とプロレタリア・スポーツと身体文化の嵐のような飛躍の国、ソビエト同盟」という表現が現れており、ソビエト擁護・代弁論が顕著である。

この書簡を再録した『国際スポーツ評論』第三年巻第七号の編集者後記は重要である。なぜこれをスポーツプレス（アクサミット）編文書が収録しなかったのか不思議である。

「この書簡へのSASI事務局の返事が届くはずなのに、編集締め切りまでに我々は何の知らせも受け取っていない。六月六日、プラハでSASIの幹部会が開かれた。社会民主主義系報道によればこの会議で次のことが決議された、『RSIとSASIの次の会合を八月中にプラハで行うことを提案する』と。九月にプラハでSASIの国際協議会が行われる予定で『ここでRSIとの今後の交渉が目論まれる』。我々はRSIと交渉しようとするSASI指導部の用意を歓迎する。だが今問題なのは単に交渉自体ではなく、二つの労働者スポーツインターナショナルの共同の行動と統一的な労働者スポーツインターナショナルへのSASIとRSIの統一のための実践的措置の執行である」[41]。――このSASI幹部会について『SATUSスポーツ』一九三五年七月三日号が記事を掲載している[42]。「RSIの書簡。RSIとSASIの代表の次の会合を八月の予定でプラハで行うことを提案することが決議された。交渉項目が確定された。国際協議会が九月にプラハで開催され、RSIとの交渉に関する報告を受け取り、その上でRSIとのそれ以上の交渉が目論まれる」。この幹部会でSASI前技術部長カール・ビューレンの回状が議論された[43]。彼は、参加できなかったSASIの四・一六幹部会で決定された返信に対する批判と提案の書簡をアウシッヒから四月二〇日にSASI事務局に送り、事務局からは辞任すべきだとの返事を受け取っていた。「スポーツプレス（アクサミット）編文書」では不十分な引用のビューレン「声明」[44]について『国際スポーツ評論』第三年巻第八号のビュー

レン（モスクワ）自身の論説「誰が統一を阻んでいるか」[45]が上記四月二〇日書簡の全文再録を含んで詳論している。六月二日のＲＳＩの書簡に対するＳＡＳＩの六月二一日の書簡、それに対するＲＳＩの六月二九日の書簡から九月六日の二度目の交渉までの展開は、章を改めて論じよう。

（1）SASI-RSI. in : Internationaler Sportpressedienst, A, 3, Aussig, 30. Jänner 1935. S. 1.

（2）Aus der Sasi. in : Satus-Sport, Jg. XXVI, Beilage zu Nr. 10 (6. März 1935). S. 7. "Sitzung des Präsidiums der SASI", "Boykottiert den hitlerdeutschen Natisport!"

（3）Endlich Verhandlungen zwischen RSI und SASI. in : Internationale Sportrundschau, Jg. 3, Nr. 3 (März 1935). S. 118.

（4）Protokoll der gemeinsamen Sitzung der SASI und RSI in Prag am 1. März 1935.この文書はプラハのチルシュ博物館文書室の「ＦＰＴ－ＦＤＴＪ」文書ダンボール数十個の一つにあり、まだ文書番号も付いていなかった。一九九四年九月の切刀俊雄氏との共同調査による。なお、以下、Protokollと表記。

（5）Um die Einheit der Arbeitersportbewegung. (Von den Verhandlungen zwischen der RSI und der SASI). von Carlo Aksamit, Prag. in : Internationale Sportrundschau, Jg. 3, Nr. 4 (April 1935). S. 141.

（6）Um die Einheit der Arbeitersportbewegung. in : Rundschau, Jg. 4, Nr. 15 (28. März 1935), S. 783.

（7）Die ersten Verhandlungen der SASI und RSI in Prag. in : Internationaler Sportpressedienst, A, 7, Aussig, den 4. März 1935, S. 1.ロッカニケ全文はS. 1-2.

（8）Protokoll, S. 6.

（9）Sportpress, (Aksamit), ibid., S. 26.

（10）注（5）と同じ。S. 141-143.

(11) Sportpress, (Aksamit), ibid., S. 29.
(12) Ebenda.
(13) 注（7）に同じ。S. 2.
(14) 注（6）に同じ。S. 783.
(15) Beilage: Vertragsentwurf der RSI. この記述はSportpress, (Aksamit), ibid, S. 26-28.; Internationale Sportrundschau, Jg. 3, Nr. 4, S. 141-143. での全文掲載にも見当たらない。
(16) Sportpress, (Aksamit), ibid., S. 28.
(17) Beratung der SASI und der RSI. (Offizielles Communique).
(18) Ein Schreiben des Exekutivkomitee der RSI an das Büro der SASI, den 12. April 1935. in: Sportpress, (Aksamit), ibid., S. 29-35. その年間目次でこの書簡が掲載されたことが確認できるInternationale Sportrundschau, Jg. 3, Nr. 5 (Mai 1935) が欠号である。
(19) ibid., S. 30.
(20) 注（7）に同じ。
(21) Protokoll, S. 1-2.
(22) ibid., S. 2-3.
(23) 注（7）に同じ。
(24) Protokoll, S. 4-5.
(25) ibid., S. 5.
(26) Ebenda.
(27) Ebenda.
(28) ibid., S. 4. スタインバーグの三・一交渉とその後の往復書簡についての記述はSportpress, (Aksamit), ibid. の当該部分

の不十分な要約で，極めてあってはいないものである（p. 255-259）。

(29) Secretary of the Red Sports International to S. A. S. I., Stockholm, April 12 th. 1935.: National Museum of Labour Hisfory. Communist Party Archive, Miscellaneous non-party organisations. CP/ORG/MISC/6/5.

(30) 注（18）に同じ。S. 31.

(31) ibid., S. 32.

(32) 注（29）に同じ。

(33) 注（18）に同じ。S. 32-33.

(34) ibid., S. 33-34.

(35) ibid., S. 34-35.

(36) Geschichte der internationalen Arbeiterbewegung in Daten. Hrsg. Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED (Berlin, Mai 1984), Globus Verlag Wien 1986, S. 311.

(37) Die Antwort der SASI an der RSI. Prag, den 16. April 1935. in: Sportpress, (Aksamit), ibid., S. 35-37.; Der Brief der SASI. An der Sekretariat der roten Sportinternationale. in: Internationale Sportrundschau, Jg. 3, Nr. 6. (Juni 1935), S. 221-222.

(38) Secretary of the Socialist Workers' Sports International to Secretary of the Red Sports International, Stockholm. Prague, April 16th. 1935.: Nationl Museum of Labour Hisfoy. Communist Party Archive, Miscellaneous non-party organistions. CP/ORG/MISC/6/5.

(39) Beratung des Präsidiums der SASI. in: Internationaler Sportpressedienst, A, 11, Aussig, 17. April 1935, S. 1.——公表を予告された号は欠号である。

(40) Ein Schreiben des EK der RSI an die SASI vom 2. Juni 1935. in: Sportpress, (Aksamit), ibid., S. 37-42.; Kommt die Einheit im Arbeitersport? Ein Brief der RSI vom 2. Juni 1935 an die SASI. in: Internationale Sportrundschau, Jg.

3, Nr. 7. (Juli 1935), S. 281-284.

(41) Kommt die Einheit im Arbeitersport?, in: ibid., S. 284.

(42) Aus der Sasi. in: Satus-Sport, Jg. XXVI, Nr. 27. (3. Juli 1935), S. 15.

(43) ibid., S. 15.「ビューレン問題が根本的に休みなく討論され、次のことが確認された。ビューレンが六月一日になお幹部会に関する不正確な叙述を含む回状をドイツ人亡命者等に送り、彼の役職の辞任にもかかわらずなお技術部長として署名しているということである」。

(44) Karl Bühren legt seine Funktion als SASI-Techniker nieder. in: Sportpress, (Aksamit), ibid., S. 42.

(45) Wer hindert die Einheit? Karl Bühren, Moskau. in: Internationale Sportrundschau, Jg. 3, Nr. 8. (August 1935), S. 302-305.

第四章　二度目の交渉（一九三五年九月六日、プラハ）

第一節　三五年六月の往復書簡

①　SASIのRSIへの六・二一書簡

前章第三節の後半で取り上げたRSIの六・二書簡に対して、SASIは六月二一日にRSIに宛てて書簡を送った。(1)

それは「六月二日のあなたがたの手紙から我々は満足をもってあなたがたが今やまず一度二つのスポーツインターナショナルの共同の実践的活動で始める試みを企てる立場に立っていると受け取っている」と書き始め、「将来のた

めの地盤を準備することに移りたいと思う」という態度を表明する。「我々のインターナショナルの決議に従えば、我々のインターナショナルに加盟する各国連盟とソビエト・ロシアとの間のスポーツ交流の即時の採用は何も邪魔するものがないことを我々は繰り返し指摘してきた。我々は相変わらずこのスポーツ交流で始めるのが最善ではないかという意見である」。こう述べたうえで、「我々が一連の共同の行事を経験していれば直ちに我々は再び歩みを続けることができるために必要な経験を集めていたことであろう。我々はこれによって行動の統一を確立することが初めて可能になる信頼の雰囲気を作りたいと思う」と言う。この「信頼の雰囲気」という言葉がその後の交渉へのキーワードであった。「この確信から我々は、八月か九月のうちに赤色スポーツインターナショナルと社会主義労働者スポーツインターナショナルの代表の次の会合をプラハで行うことをあなたがたに提案することを決めた。次の会合で実践的成果が達せられるように交渉対象を限るのは目的に適っていると思う。それゆえ我々は交渉項目として提案する。（一）ヒトラー・オリンピアードに対する共同の行動の準備、（二）ソビエト同盟とのスポーツ交流の規則、（三）今後の交渉についての非公式の相談」。「我々は次の会合の成果を九月に行われるＳＡＳＩの国際協議会に提出するつもりである。我々の国際協議会によって受け取る指示に従って、我々はあなたがたとその後の交渉に現れるであろう」。「我々は、ただ実践的考察に支えられ、それゆえ全ての理論的対決がさしあたり問題にならない次の会合のためのこのプログラムをあなたがたが承認されることを望む。我々はあなたがたのすぐの返答をお待ち申し上げる。社会主義者の挨拶をもって。労働者スポーツ・身体文化国際社会主義連盟　会長ユリウス・ドイチュ　書記Ｒ・シラバ」

②　ＲＳＩのＳＡＳＩへの六・二九書簡

このＳＡＳＩ六・二一書簡に対して、ＲＳＩは書記アクサミットの六月二九日の書簡で答えた。[2]「すぐの返答」で

あった。まず「我々は六月二一日のあなたがたの手紙をまさに拝受し、あなたがたが共同の活動の組織化と相互の協力に関するＳＡＳＩとＲＳＩの間の新たな交渉についての我々の提案に同意していることを知って満足している。あなたがたは二つの労働者スポーツインターナショナルの代表の次の会合を八月か九月に再びプラハで行うことを提案している。我々はこの提案を承認し、原則的に提案された交渉項目をも了解した」と、二度目の交渉への合意を表明する。しかし、続いて交渉課題について異論を唱えた。「交渉課題の第二項目について、我々の見解によれば、それはソビエト同盟とのスポーツ交流の規則だけに限られずに、むしろＳＡＳＩとＲＳＩの全ての連盟のスポーツ協力の組織化にも及ぶべきだということを書き留める。我々はそうした協力が幾つかの連盟によって、例えばベルギーとスイス、フィンランドとスウェーデン等ですでに着手されたことを指摘するものである。それゆえ我々はプラハ協議の課題を、二つのスポーツインターナショナルの組織間のスポーツ交流を更に広く展開することを決議することに認める」。さらに次のように交渉への代表の問題を指摘する。

「あなたがたはそれぞれの側からどれだけの代表がプラハに集まるかについて何ら提案していない。我々は、来たるべき協議は三月一日の会議よりも幾らか広くあるべきだという意見である。」具体的な次の提案は初めて提出されたもので、その後繰り返し追求されるが、ここではＳＡＳＩの反応を見るような提案である。すなわち、「決議されるべき共同の行動を考えに入れて、我々は交渉にはＳＡＳＩとＲＳＩの最も重要な連盟の代表、ならびにその協力が共同の行動においてはなくてはならない二つのインターナショナルの外にいる連盟の代表、すなわちフランスＦＳＧＴとノルウェーＡＩＦの代表、が出席することが必要だとみなす。我々はあなたがたが我々とこの問題で一致することを望む。にもかかわらず、あなたがたが、協議は再び二つのスポーツインターナショナルの事務局の代表の参加の下でのみ行われるべきだという見解を主張するならば、我々は、後の時期にそうした広範な共同の国際的協議が目論

まれると希望して、それに了解したと言明する」。

最後に「やがて我々の執行委員会が来たるべき協議の交渉項目に態度を決めるために集まることをあなたがたに伝える。その後あなたがたに個々の点でのＲＳＩの具体的な提案を提出することを許していただきたい。プロレタリア・スポーツの挨拶をもって。ＲＳＩ書記局を代表して　カルロ・アクサミット」――まさにこの書簡は至急の返信であったことが分かる。ともかく二度目の交渉実施の合意が成立したのである。

スポーツプレス（アクサミット）編文書はここからすぐに二度目の交渉についての報告を掲載しているが、小論は、その直前の情勢とＲＳＩの立場を示す資料を取り上げる。

第二節　二度目の交渉を前に

①　三五年八月の二つのアクサミット論説

一九三五年八月、二つの雑誌にほぼ同じタイトルと内容の論説が掲載された。一つは、『ルントシャウ』第三六号（一九三五年八月八日）でのアクサミット「赤色スポーツインターナショナルと社会主義スポーツインターナショナルの間の新たな統一交渉を前に」[3]、もう一つは、『国際スポーツ評論』第三年巻第八号（一九三五年八月）での無署名論説「新たな統一交渉を前に」[4]である。これがアクサミットのものであることは明らかである。だが、この二つの論説には幾つかの異同が見られる。小論は以下、（＊）の箇所で異同の所在を示し、［　］で『ルントシャウ』論説＝Ａ、『国際スポーツ評論』論説＝Ｂとしてその異同を明示する。以下はＡをベースにした全文訳出である。（／は改行）

「社会主義労働者スポーツインターナショナル（ＳＡＳＩ）の事務局は赤色スポーツインターナショナル（ＲＳＩ）の繰り返しの提案に遂に同意して答え、（＊）すでにＲＳＩとＳＡＳＩの代表の次の会合を八月のうちに実施するこ

とを言明した。交渉は十中八九、八月三〇日、プラハで行われる。[(＊) 以下はBでは次のような記述である。「次のように伝えた。すなわち、SASIの事務局はその考慮によって赤色スポーツインターナショナルと社会主義労働者スポーツインターナショナルの代表の次の会合が八月か九月のうちに再びプラハで行われることを決めたということである。労働者スポーツにおける国際的統一の創造のためのその弛まぬ闘争においてその提案がどんなに拒否されても、どんなに攻撃されても、落胆させられなかったRSIの努力は、こうして、統一の問題が改めてSASIとRSIの共同の協議の交渉の対象にされることを達成したのである」。] ／二つのスポーツインターナショナルの代表の最初の会合は丁度五か月前のことである。この短い時間のうちに労働者スポーツマン大衆の統一戦線は一連の一層の勝利を戦い取った。イギリスの赤色サイクリストは、英国のSASI支部に協力的に加わっているクラリオン連盟と共に統一的な労働者サイクリスト同盟に統一した。スイスのSATUSが四月のその総会で赤色スポーツ統一闘争共同体との統一を拒否したにもかかわらず、バーゼルの赤色スポーツマンとSATUSのスポーツマンは五月一日に共同で行進し、同じ日に統一的なスポーツ行事を実施し、その後も密接に協力している。スイスの赤色スポーツマンはベルギーのSASI支部へのゲストとしても参加したし、同様に、スウェーデンのRSI連盟とフィンランドとデンマークのSASIスポーツマンとの間で活発な協力が発展し始めている（＊）。[(＊) Bでは以下の一文が加わっている。「七月二一日にストックホルムでRSI連盟と、SASIに加盟していない社会主義スポーツグループとの間で行われた統一総会は、ついでだが、自国でも労働者スポーツマンの統一戦線が前進していることを明らかに示している」。] ／七月初めにチェコスロヴァキアの二つのSASI連盟の代表は、SASIの新しい技術部長［ビューレンに代わるシュメク］をトップにして身体文化最高評議会との交渉のためにモスクワに赴いた。統一戦線をこれまで決定的に拒否していた二つの連盟の代表がいたことを我々が考慮するとき、すでにこの旅行だけでも、交渉の成り行き

は全く度外視しても、一定の転換を意味する。[5] 同時に、チェコスロヴァキアのＡＲＵＫ（ドイツ人社会民主主義サイクリスト連盟）は赤色スポーツマンに書簡を出し、その中で彼らと一緒に統一を確立しようと思うと言明している。カールスバードのＡＲＵＫ同盟祭典はすでに赤色サイクリストの積極的な参加の下で実施された。／ドイツの赤色スポーツマンと、かつてのＡＴＳＢスポーツマンは、お互いに彼らの組織のファシスト抑圧者に対する共同の闘いに手を差し出した。ＡＴＳＢスポーツマンの指導者カール・ビューレンは、統一の問題でのＳＡＳＩの態度に対する抗議として、ＳＡＳＩ技術部長としての彼の職務を辞め、スポーツ教師としてソ連に行った。同じくオーストリアの労働者スポーツマンは反ファシズム統一闘争にまとまった。／統一をめぐる闘いにとって最大の意義を持つのは、フランスとノルウェーの二つの大きな、二つのスポーツインターナショナルの外部にいる連盟の最近の総会の決議である。ノルウェーのＡＩＦが六月の総会で、またフランスのＦＳＧＴが七月の全国協議会で、一致して、明白に労働者スポーツにおける国際的統一の確立の問題でのＲＳＩの提案に賛成する立場を取ったのであった。／最近の時期からのこれら全ての例は、極めて明瞭に統一への労働者スポーツマン大衆の熱望の強まりを実物で証明するものである。とりわけそれは、統一の思想がＳＡＳＩスポーツマンの大衆に深く浸透したことを証明している。それゆえ、ＳＡＳＩとＲＳＩの間の来たるべき交渉は労働者スポーツマン大衆のこの意志を無条件に考慮に入れなければならない。三月一日、プラハでのＳＡＳＩとＲＳＩの代表の会合は、ただ最初の接触の性格を持ち、結果として共同の宣言［コミュニケのこと］のみを得たが、今や次のことが重要である。すなわち、決定的な歩みを前進させること、実践的な協力と行動についての具体的な決議を共同で採択し、実行すること、そして個々の国で発展しているか存在しているスポーツ統一戦線を国際的に形成することである。（＊）［（＊）以下、ＡになくＢで詳述された文章。「ＲＳＩの統一のプラットホームは我々の雑誌の紙面で豊富に一般に普及されてきた。それゆえ、それをもう一度詳しく説明することは余

計なことである。それは短い筆法では次のようなものである。RSIは、SASIとの統一によって一つの統一的な労働者スポーツインターナショナルを作ろうと努めており、同様に、各国の二つのインターナショナルの組織の統一によって国内的規模での統一が確立されるべきであるというものである。統一は、資本の攻勢、ファシズムと戦争に反対し、平和、自由、進歩を求める労働者階級の闘争の強化のために生じる。その会員に全ての民主的権利を認める統一した労働者スポーツインターナショナルとその連盟は、断固としてブルジョアおよびファシズム・スポーツに反対して、労働者スポーツ組織の自由と独立を求めて、スポーツのファシズム化と軍国主義化の全ての試みに反対して闘う。二つのスポーツインターナショナルの接近を促進し、その統一を進めるために、RSIはSASIに協力と共同の行動の遂行についての相互の協定の締結を提案してきた。RSIはこの協定において、SASIによって定式化されたスポーツ集会、不可侵条約の締結、場合によっての紛争の規則に関する項目をも受け入れる用意があることを言明した。RSIは、最後に、必要であればSASIと個別的な問題だけでも合意を取り決める用意があることを言明した。例えば、ヒトラー・オリンピアードに対する共同の闘争の問題のように。」／SASIの事務局はその書簡〔一九三五年六月二一日付け〕で、来たるべき協議のために次の交渉項目を提案している。一、ヒトラー・オリンピアードに対する共同の行動の準備、二、ソ連とのスポーツ交流の規則、三、今後の交渉についての情報を与える協議。さらに、SASIの手紙には次のように書かれている。／『我々は、我々のインターナショナルの決議に従えば、我々のインターナショナルに加盟する各国連盟とソビエト・ロシアとのスポーツ交流の即時の採用に何も邪魔するものはないことを繰り返し指摘してきた。我々は相変わらずこのスポーツ交流で始めることが最善ではないかという意見である。我々が一連の共同の行事を経験していれば我々はこれによって行動の統一を確立することが初めて可能になる信頼の雰囲気を作りたいと思う』。／それによれば、来たるべきプラハでの相談では――相互の会話以外に――

ただ、唯一の実践的課題しかないということである。すなわち、ソ連とのスポーツ交流の規則である。共同の行動の実施、すなわち、行動の統一は、ＳＡＳＩの手紙で書かれているところでは、我々が一連の共同のスポーツ行事を経験すれば直ちに、そして信頼の雰囲気が形成されて初めて可能になるという。それゆえ、おそらく最初に提案された交渉項目はヒトラー・オリンピアードに対する共同の行動の準備しか語っていないのであろう。／我々は、ＳＡＳＩがＲＳＩと新たな交渉に入る用意があることに心を込めて歓迎することを強調する必要はない。同時にしかし我々は、我々が、また我々と共に労働者スポーツマン大衆が、ＳＡＳＩとＲＳＩの来たるべき協議から単にソ連とのスポーツ交流の規則よりも大きな実践的成果を期待していることを確認する。／まず第一に、即座に一九三六年ヒトラー・オリンピアードに対する労働者スポーツマンの行動統一を作ることが必要である。オリンピアードは間近に迫っており、冬季オリンピアードはもうあと半年で行われる。それゆえ、ドイツ・ファシストのこの行事に対する共同の闘争はどんなことがあっても遅らせてはならない。今日至る所で形成されている反オリンピアード戦線が巨大な強化を経験するかどうかは、［今度の］プラハ交渉にかかっている。ＩＧＢの総会の折にＲＳＩの代表はオリンピアードに対する闘いの支援についてＩＧＢと協議した。ＩＧＢの代表は、ＳＡＳＩもこの行動に加わるという前提の下でＲＳＩの提案を了解したと言明した。それゆえ、ＩＧＢの数十万の会員が反オリンピアード戦線に入るかどうかはＳＡＳＩの責任である。／ＳＡＳＩによって提案された交渉日程の第二の項目に関しては、我々の見解は、それがソ連とのスポーツ交流の規則にのみ限定されるのでなく、むしろＳＡＳＩとＲＳＩの全ての連盟のスポーツ協力の組織化に及ぶべきであるということである。（＊）そうしたスポーツ交流はすでに部分的に存在しており、プラハ協議の課題はそれを二つのスポーツインターナショナルの全ての組織に拡大し、ならびに一連の共同の国際的スポーツ行事を組織することを決定することにあるのでなければならないであろう。［（＊）以下の文章は、Ｂでは次の通り。「我々がさらに上

に言うように、例えばスイスとベルギーの間に、ならびにスウェーデン、フィンランド、デンマークの間にすでにそうしたスポーツ交流が存在しており、プラハ協議の課題は二つのスポーツインターナショナルの組織の間のスポーツ交流をさらに広範に展開し、ならびに一連の共同の国際的スポーツ行事を組織することを決議することにあるのでなければならないであろう」。」／第三項目においてＳＡＳＩは、ＲＳＩとの今後の交渉を見込んでいる。ＲＳＩは、情報を与える協議をたしかに、労働者スポーツにおける統一の確立の問題への自らの立場を改めて説明し具体的な提案をするために利用するであろう。唯一正しいのは、双方の側から定式化された項目を含む提案としてすでにあるように、相互の協定の採用であろう。それを越えて、共同の常設委員会の設置、これはフランスでの以前の同権の委員会（パリテーツコミッション）の例に従って協定の実施を監視し、共同の活動と行動を率い、統一の実現へのより一層の措置を準備するものである。／最後に、ＲＳＩはＳＡＳＩに、決議されるべき共同の行動に関してＲＳＩとＳＡＳＩの最も重要な連盟の代表も、フランスＦＳＧＴとノルウェーＡＩＦの代表も交渉に招くことを提案した。その国でスポーツ統一をすでに確立したこの二つの連盟はそれ自身国際的統一の実現を助けることに強い関心を持っている。（＊）そして、交渉への幾つかの重要な全国連盟の招待についてのＲＳＩの提案は全くＳＡＳＩ組織の希望にも一致していることは、ベルギーの社会主義スポーツ連盟の指導部の見解が証明している。これはＳＡＳＩとＲＳＩとの間の来たるべき交渉に関して、共同の協議会が広範な性格を持つべきだと要求している。『統一の大問題が四方の壁の間で幾人かの人物によってのみ議論されるのはうまくない』とベルギーの社会主義スポーツマンは言明する。我々は完全にＳＡＳＩスポーツマンのこの言葉を強調するものである。［（＊）以下ここまでの文章は、Ｂでは次の通り。「そして、交渉への幾つかの重要な全国連盟の招待についてのＲＳＩの提案は全くＳＡＳＩ組織の希望にも一致していることは、ベルギーからの印象画が実例を挙げて説明している。それを我々は別のところで再現する」。」／国際労

働者スポーツ運動は重要な決定の前に立っている。ファシズムの攻勢と新たな血まみれの世界虐殺の危険に面して、その隊列の統一を作り出そうとする労働者スポーツマン大衆の熱い意志に面して、プラハでの共同の協議会からは大きな意義（＊）［（＊）Bでは「強力な歴史的意義」］を持つ決議が期待される。RSIの態度は全てのスポーツマンに知られている――これは労働者スポーツ運動の闘争統一を実行にするために全てのことをしている。決定はもっぱらSASIの責任である。SASIとRSIがその力とその組織を統一すれば、それは労働者スポーツの陣営全体をその利益のために根本的に変えることができる一つの力（マハト）になる」。

文字どおり交渉を前にしたRSIの情勢認識、立場、見解が全面的に示されていることが分かるであろう。

② SASIの交渉前の動向

一方、SASIの交渉前の動向を示す資料は見出されないが、交渉と連続するSASI幹部会についての報告がある。それは『国際スポーツ・プレッセディーンスト』一九三五年九月九日号の「SASI幹部会の協議」[6]という記事である。（ちなみに『SATUSスポーツ』一九三五年一〇月二日号にも同タイトル、同文の記事がある。[7]）

「プラハで九月四、五、六日にSASI幹部会の重要な協議が行われた。その中で重要なスポーツ政策的、技術的問題が取り扱われた」。――この中で一九三七年アントワープ労働者オリンピアードの準備が報告されているが、「SASIの全ての重要な継続的問題は、来月プラハで行われる国際協議会に決議採択のために提出される」と書かれた後に、「最後に、幹部会はRSIとの交渉のための準備を行った」とある。その内容は全く不明である。そして、記事は「金曜日にSASIとRSIの代表が集まった」として、九月六日の二度目の交渉での「共同コミュニケ」と

「呼びかけ」（「ヒトラー・オリンピアードのボイコット」）の掲載によってその結果を伝えている。これは次節で取り上げたい。ここではSASIが交渉にあたって幹部会を開催し準備したことを知るだけで十分である。

第三節　九・六交渉とその結果

①「共同コミュニケ」と「呼びかけ」（ベルリン・オリンピアード・ボイコット）

前節の最後に指摘し、本節で取り上げることとした『国際スポーツ・プレッセディーンスト』一九三五年九月九日号の記事に掲載されたSASIとRSIの九・六交渉の「共同コミュニケ」は、『国際スポーツ評論』にもスポーツプレス（アクサミット）編文書にも掲載されていない。その意味でもこれは重要な資料である。「呼びかけ」は『国際スポーツ評論』第三年巻第一〇号のアクサミット「統一への序幕（SASIとRSIの間の交渉について）」[8]においても再録されている。このアクサミット論説については後述する。『国際スポーツ・プレッセディーンスト』同記事の後半を改めて引用すると、「金曜日にSASIとRSIの代表が集まった。協議に含まれたのは、ソビエト・スポーツマンとの競技会、ベルリンでのオリンピアード、その他の問題であり、それについては以下の共同コミュニケと呼びかけが決議された」という記述である。

「共同コミュニケ」[9]

「SASI会長ユリウス・ドイチュ博士とモスクワの身体文化最高評議会の代表ショルダク［原文ではJoldak となっている］の議長の下に、今日二つの労働者スポーツインターナショナルの共同の会議が行われた。数時間の発言の後、一九三六年ベルリン・オリンピアードのボイコットへの共同の呼びかけを公布することが決議された。

ソビエト同盟とヨーロッパのブルジョア・スポーツ連盟の間で進行中のスポーツ交流はＳＡＳＩに組織された労働者スポーツ連盟との交渉を困難にするのに役立つだけであるという立場がＳＡＳＩの代表によって主張された。

それに対して、ソビエト同盟のスポーツ組織の代表は、身体文化最高評議会はＳＡＳＩのあらゆる全国連盟と直ちにスポーツ交流に入る用意があることを言明した。

これと関連するのがＳＡＳＩとＲＳＩの全国組織とのスポーツ交流である。この問題複合体全体はＳＡＳＩの次の国際協議会に提出されることになる。

相互の情報の交換の後、二つの労働者スポーツインターナショナルが互いに接触を続けるという約束で会議は締め括られた」。

「呼びかけ」は以下の全文である。(10)

「ベルリン・オリンピアードをボイコットしよう！　労働者スポーツインターナショナルの共同アピール

一九三六年ベルリンで行われるオリンピアードは、純粋なスポーツ行事の範囲を凌ぐものである。ドイツの権力者はオリンピアードをファシズムのための一つの宣伝事業に利用している。オリンピアードにその刻印を付けているのはドイツ人民ではなく、ドイツ人民の征服者である。その国の労働者を野蛮に征服し、ドイツ人民の自由を破壊し、同時にヨーロッパでの戦争の危険を極度に高めながら、今や全世界のスポーツマンを、血なまぐさいテロルの、野蛮な暴力の、恥ずべき無法の帝国となった第三帝国の首都に招待するのはドイツの権力者なのである。

ファシズム国家のスポーツは、鍛えられた青年の平和的競技ではなく、戦争準備に奉仕する。ファシズム諸国におけるスポーツは、大衆の文化的向上ではなく、その慰撫と支配に捧げられる。

それ故に、自由な人民の自由なスポーツのために働くことを目標とする二つの労働者スポーツマンの国際的な連盟は、ファシズムのスポーツ行事の強制的性格を断固として拒否する。オリンピアードのような国際的スポーツ行事を敢えてファッショ的暴力政策の目的のために利用しようとすることに対して抗議する。

全世界のトゥルナーとスポーツマンに、ベルリン・オリンピアードをボイコットするようアピールする［原文ゴチック］。

二つの労働者スポーツインターナショナルは、全ての国の社会主義と自由の党派に、ベルリン・オリンピアードのためのいかなる国家手段も承認しないように要求する。ファッショ的暴力政策の敵である全ての人に、ベルリン・オリンピアードをいかなる形でも支えるなと呼びかける。

二つの労働者スポーツインターナショナルは、全世界の労働者階級に、ヒトラー・ファシズムの観閲式にほかならないベルリン・オリンピアードに対する最も断固とした闘争に加わることを求める。

社会主義労働者スポーツインターナショナル　赤色スポーツインターナショナル」

② ＲＳＩの交渉総括――ＳＡＳＩへの書簡と無署名論説

スポーツプレス（アクサミット）文書は、この交渉の結果の総括を明らかにするものとしてＲＳＩ執行委員会のＳＡＳＩ事務局宛の書簡［日付けなし――特定できず］を掲載した。「これは、イワン・ショルダク（ソ連）、カルロ・アクサミット（チェコスロヴァキア）、クリンケ（ドイツ）からなるプラハ協議に派遣されたＲＳＩ代表団の報告のために決議されたもの」[11]であった。以下、要約的に引用する。

まず、共同の呼びかけの採択を歓迎するが、「我々はそこに国内的国際的規模での真の行動統一が続かねばならな

い共同の行動への最初の歩みしか見ない」として、「ベルリンでのファシズム・オリンピアードに対する闘争、その粉砕のための闘争での統一を」と呼びかける。次に、プラハ協議でのRSI代表団の「二つのスポーツインターナショナルが大きな国際的スポーツ行動を実施する」という提案を、「SASIは一九三七年の予定でアントワープでの労働者オリンピアードを設定した。我々はあなたがたにこのオリンピアードを共同で実施し、それを世界の全ての進歩的スポーツマンの強力な行動に形作ることを提案する」と再提案する。また、RSIの「一九三六年に共同の国際的スポーツ競技会をフットボール、重競技、トゥルネン、アイススケート、スキーの分野で実施するという提案」について、「あなたがたのインターナショナルの事務局はRSIのこの提案を拒否しなかったが、それに関する最終的決定を一九三五年一一月三〇日に行われるSASI組織の国際協議会に委ねた」ことを確認して、「あらゆる制限的条件なしにソビエト同盟のスポーツ組織とRSIのその他の組織とのスポーツ競技会を実施することをSASI組織の自由裁量に任せるであろうと期待する」のである。次の文章は『国際スポーツ評論』第三年巻第一二号の巻頭無署名論説「行動と組織の統一のために！」[12]にも同文が見られる。「全ての国々での反動分子はベルリン・オリンピアードへの準備をスポーツ運動におけるファシズムの影響の強化に利用している。」「アビシニア人民に対するイタリア・ファシズムの戦争、メーメルランドの併合へのヒトラーの努力、中国人民に対する日本帝国主義の攻撃は新しい世界戦争の勃発の危険を鋭くした。それと関連して全ての国々のファシストと軍国主義者は凶暴なテンポでスポーツを手段にしてファシスト一味と帝国主義軍隊の新しい予備軍の準備を押し進めている。そのためにベルリン・オリンピアードの準備と連関してのスポーツ生活の一定の活気付けが利用される。これら全ては、ベルリンでのオリンピアードに対する闘争のためのスポーツ運動における全ての反ファシズム勢力の最大限の努力を要求するものである」。「共同の行動は最も近い将来に労働者スポーツ運動の国際的統一の創造に寄与するであろう。RSIの代表団はプラハ協議

で統一の問題［論説ではこれに「一つの統一的労働者スポーツインターナショナルへの世界の全ての労働者スポーツマンの統合」が加わる］を提起した。ＳＡＳＩ事務局は労働者スポーツ統一の問題の討議のための二つのスポーツインターナショナルの特別な協議の召集に同意した。ＲＳＩの執行部は、モスクワでのこの協議の召集についてのＳＡＳＩ会長ユリウス・ドイチュ博士の提案を受け入れ、ＲＳＩの書記にそれの実施のために必要とされる実践的措置を始めるよう勧めた。ヒトラー・オリンピアードに対する闘争とアントワープ労働者オリンピアードの準備の過程で全ての非・反ファシズム・スポーツマンを含む真の大衆スポーツ運動を創造する可能性が差し出される」。――以上が同一の文章である。

書簡は、続いて反ファシズム・スポーツ運動の基礎付けを示した。「ブルジョア・スポーツ組織に都市と農村の数百万の労働者、勤労者が属している。この組織の中に反動分子と並んで非・反ファシスト勢力も包括される。ファシズム独裁の国々には自由なスポーツ運動は存在しない。スポーツにはただファシズム・スポーツ組織の枠でのみ携わることが許される。一連のこの組織において実際のファシストと並んで労働者も強制的な形で組織されている。これら全てからスポーツ組織とチームにも、個々のスポーツマン、ファッショ的その他のブルジョア・スポーツ組織の会員にも、差異を付けた接近が必要だと思われる。ブルジョア・スポーツ組織でも、ベルリンに行こうとは思わない、他の国にオリンピアードを移転せよと要求する非ファシスト・スポーツマンの運動が強まっている。労働者スポーツはベルリンでのオリンピアードの実施に対するこの反対派運動と協力することを心得なければならない」[13]。「この考慮から出発して、そしてスポーツ運動におけるファシズムと一九三六年ヒトラー・オリンピアードに対する闘争のために、ＲＳＩ執行部はＳＡＳＩに共同の呼びかけの採択を越えてヒトラー・オリンピアードに対する行動全体を共同で実施することを提案することが必要だとみなす」[14]。

③　アクサミット論説「統一への序幕」

「呼びかけ」を再録したアクサミット論説「統一への序幕」の本文を取り上げよう。これは上記の書簡よりも詳細に九・六交渉を総括したものであった。「第一の最も重要な交渉点をなしたのは一九三六年ベルリン・オリンピアードに対する闘争の組織化」で、この点でドイチュが「興味ある解説をした」（その内容は省略）が、「この問題でのＲＳＩ代表団の主演説者はドイツからの代表［クリンケ］であったが、彼はＲＳＩの具体的な提案を説明した」（その内容も省略）こと、「ＲＳＩのこの提案はゲストとして協議に立ち会ったフランスの代表［ドローヌ］の提案と一致していた」ことが明らかにされる。「ファシズム・オリンピアードに対して取られるべき共同の実践的措置に関してはさしあたり何ら一致するに至ることができなかった」が、その理由は「防衛戦のための統一的な方針を出すには情勢は余りに困難で多種多様だ、実践は各国で違ってなされざるを得ない、それ以外にＳＡＳＩはその国際協議会の決議に縛られているので一つの国際的な委員会に加入することができない」というＳＡＳＩの意見であった。代わりのＳＡＳＩの提案は「その意見を交換するＳＡＳＩとＲＳＩの事務局の一種の活動共同体の創設」であった。「実り多い討論の結果、次のことが確認あるいは決定されることができた」ものとして記される四項目は、すでに引用した「共同コミュニケ」とは違う。「一、ヒトラー・オリンピアードの性格に関してＲＳＩとＳＡＳＩに統一的見解が支配すること、それに従ってオリンピアードに対する闘争が進められなければならない原則については明らかであること。二、ヒトラー・オリンピアードに対するＲＳＩとＳＡＳＩの闘争を調整するために二つの労働者スポーツインターナショナルの活動共同体が形成される。共同体はこの闘争のために全ての進歩的志向の勢力を把むことにも向かう。（中略）三、協議は、ＳＡＳＩとＲＳＩによって署名され直ちに世界の報道に渡されたヒトラー・オリンピアードに

反対する共同アピールを決議した。四、一九三七年アントワープ労働者オリンピアードの共同の実行に関してはSASIの来たるべき国際協議会が決定する」。そして「次の交渉点として相互のスポーツ交流の問題が議論に上った」が、「この問題は二つの部分に分かれる。一つは、資本主義国でのRSIとSASIのスポーツ交流。もう一つは、ソビエト同盟とのSASIのスポーツ交流」である。第一の問題へのRSIの提案で次のように言う。

「一九三六年のために、ノルウェーでの二月の冬季スポーツ集会、復活祭の日のヘルシンキでの重競技者集会、プラハでの器械体操競技会、最後にパリでの決勝戦の労働者フットボール世界選手権の開催が提案される」。「SASIの代表団はこの提案に決して否定的に対立しなかった。それでもそれに関する決定はSASI国際協議会（一九三五年一一月頃）に委ねられるものとした」。これについてのドイチュ、シラバの肯定的発言が記され、「これによってSASI協議会がRSIとのスポーツ交流を自由にし、それによって労働者スポーツにおける統一へのさらに重要な歩みをなすだろうという希望があると言っていい」と総括された。「この問題の第二部、ソ連とのSASIのスポーツ交流は徹底的な討論を必要とした」として、ソビエトスポーツマンの「ブルジョア陣営」とのスポーツ交流へのSASIの異議とそれへのショルダクの反論が記されるが、これは「ソビエト・スポーツマンの行動についてSASIの同志を啓蒙する機会」として位置付けられた。だが、ドイチュ提案によれば、「ソビエト・スポーツマンがSASIの組織と競技をするとき、この期間同じ国のブルジョア陣営とのゲームを行うべきでない、ソビエトにおいても、SASI組織とのゲームが行われる国においても」というもので、「何時間もの討論は実りのないものだった」という。

この論説がこれまでの議論と異なる新たな論理を示すのは、実にこの後の議論である。

「この交渉項目において二つの根本的に異なった見解が示された。すなわち、RSIは大胆に全ての非ファッショ・スポーツマンの広範な人民スポーツ戦線の形成に向けての路線を展開しそれを実践的に実現するのに対して、S

ＡＳＩは相変わらず労働者スポーツマンはブルジョア・スポーツ運動の内部の勤労者と彼らが労働者組織に加わらないかぎり何ら共通のものを持たないという古いセクト的路線を主張する。そして、ＲＳＩ路線の実行が、ブルジョア組織のスポーツマンの大衆が反ファシズム戦線に加わり、スポーツにおけるファッショ化に抵抗し、労働者スポーツマンと一緒にスポーツの自由と、国家、自治体の負担でのスポーツ活動の条件改善のために闘うという成果を得ているのに対して、ＳＡＳＩの路線は労働者スポーツ運動の外部の数百万のスポーツマンからの労働者スポーツマンの孤立化にしか通じていない。実際にこの路線は――数多くの国からの例が実証するように――具体的状態、今日的条件に合致しないが故に、突破される。だが、この原理的な意見の相違にもかかわらず、ＲＳＩはＳＡＳＩとの共同行動を可能かつ必要とみなす。我々がどこで一致するか、あるいは特別な困難がなければ直ちに一致できるのはどこか、というかぎりで問題があるだけである。一致が直ちに可能でないのはどこかという問題ではそれぞれの組織は、それが正しいとみなすかぎりで自主的に活動すべきである[15]」。

「人民スポーツ戦線形成路線」対「古いセクト的路線」という「原理的な意見の相違」と一方での「共同行動」、他方での「自主的活動」の論理は、一九三〇年代の二つのスポーツインターナショナル関係史の発展を見る上で重要な枠組みを与えるものである。ＲＳＩあるいはアクサミットは二度目の交渉を通じて路線を明確にしてきたことが分かる。

さて、論説は、「統一の問題を次の共同協議の議事日程に乗せることで一致した。十中八、九この協議は一九三六年春にソビエト同盟への大ＳＡＳＩ代表団の巡業と結びついて行われるであろう。（中略）この［二度目の］協議はＳＡＳＩとＲＳＩの間の最終的一致への良い序幕と呼ぶことができる[16]」という記述で締め括られる。すなわち、三度目の交渉は最終的なものとみなされていた。

④　交渉についてのプロレタリア運動世界への報告

九・六交渉についての別の資料がある。それは『ルントシャウ』第四年巻第六八号（一九三五年一一月二一日）のアクサミット「労働者スポーツにおける統一をめぐって」[17]である。「プロレタリア運動の全ての部分のうち労働者スポーツ運動はこれまで統一の確立において最も広く進んだ」ことを三・一と九・六の交渉に基づいてプロレタリア運動の世界に報告するものであったが、ここで注目すべきところは以下の記述である。

「［九・六交渉で］他のいかなる実践的決議も採択されなかったのは、ＳＡＳＩがＳＡＩと結びついていること、さらにＲＳＩの提案をＳＡＳＩの国際協議会に討論させたいという理由からである。ＳＡＳＩの執行部はこの間会議を持った[18]。一一月末の予定でプラハにすでにＳＡＳＩの協議会も召集されている。この会議の結果で労働者スポーツにおける分裂が最終的に除去されるであろうか？」。重要なのはこれに続く記述である。

「ＳＡＩの指導部がＳＡＳＩとＲＳＩの間の統一交渉にどんな立場を取ったかは知られていない。にもかかわらず、ＳＡＩのブリュッセルでの会議の直後にチェコ社会民主主義紙の中に、来たるべきＳＡＳＩ協議会で統一問題がどのように解決されるべきかに関する以下の短信を我々は見出した」。

その短信の引用に進む前に、ＳＡＩのブリュッセル会議について小論は『データでの国際労働運動史』の記述[19]を『コミンテルン資料集』第六巻の関連資料[20]で補って（その部分を［　］で示す）引用したい。「一九三五年一〇月一一・一二日、ブリュッセルでＳＡＩの執行部の会議。ＫＩ第七回大会に対して、およびファシズム・イタリアのエチオピア［アビシニア］への奇襲に反対する一九三五年九月［二五日］と一〇月［七日］のコミンテルンの統一戦線申し出に対して態度を決定する。とりわけフランス、イタリア、オーストリア、スイス、スペインの党の代表はＫＩと

の共同行動に賛成した。それに反対したのはデンマーク、イギリス、オランダ、スウェーデン、チェコスロヴァキアの党の代表であった。多数は反共的少数の圧力に屈服し、執行部はＫＩの具体的な統一戦線申し出を突き返した。新しい（三五年三月以来の）議長ルイ・ド・ブルケールと書記長Ｆ・アドラーに単にＫＩとの『情報的協議』のためにのみ権限を与えた。十月十八日、ＫＩの代表Ｍ・カシャン、トレーズとＳＡＩの代表ルイ・ド・ブルケール、Ｆ・アドラーとの間のパリでの会合。国際情勢と、イタリア・ファシズムのエチオピア侵攻に対する行動の調整の可能性についての意見交換。ＳＡＩ代表はＫＩ提案の二つのインターナショナルの共同の行動を拒否した」。――ここでのＫＩ提案への反対党が問題となる。

さて、チェコ社会民主主義紙（紙名も日付けも不明）の短信とは次のようなものであった。「我々のＤＴＪ連盟とドイツ人ＡＴＵＳとのソビエト・スポーツマンの友好的関係を付けることを目的とする交渉は大層うまくいっている。合意を実践に移すことができるには幾つかの細部が取り扱われることが残っているだけである［これにアクサミットの疑問符（?―C. A.）が付く］。そのために各国連盟の協議会が一一月三〇日と一二月一日にプラハで行われ、これにソビエト身体文化［最高評議会―原文はSovjetphyskult］の代表も招待される。／これによってソビエト・ロシアとの我々の友好的関係は労働者スポーツでも拡大されるであろう、共産主義スポーツインターナショナルを顧慮しないでも。これはＫＩのスポーツセクションへの我々の労働者トゥルナー・スポーツマンの態度を何ら変えないということを意味する。ＳＡＳＩは政治・労働組合社会主義インターナショナルと一致して進む。なぜなら、それは、国際的な政治・労働組合センターの協力のための前提がないかぎり、スポーツにおける協力も考えに入れることができないということを自覚しているからである」。

この短信についてのアクサミットの論評が上記のＳＡＩブリュッセル会議と関連させたものなのである。「この短

信は公然とチェコ社会民主主義が労働者スポーツにおける統一の即時の形成に寄与することを考えていないことを表現している。それは、SAIのブリュッセル会議で或る社会民主主義クライスがRSIとSASIの今後の統一交渉に反対したという報告と一致しているかもしれない。それは、KIの統一提案の採用を妨げたあの五つの党、イギリス、オランダ、スウェーデン、デンマーク、チェコスロヴァキアの社会民主党であったのか？」――SAIブリュッセル会議の資料をまだ見ることができないので残念ながらこの推論は実証できないが、少なくとも連関は明確であり、いずれにせよチェコ社会民主主義が統一の妨害の当事者であることが確認できる。アクサミットは続けて言う。「しかし、これらの国のうちチェコスロヴァキアにのみスポーツを実践する労働者の大衆運動が存在する。強固な社会民主主義政党を持つその他の四つの国には数的に極めて弱小の労働者スポーツ運動しかない。オランダでは数年前に労働者スポーツ連盟が社会民主党指導部の意志に反して創立され、スウェーデンでは社会民主党は今日までそこでの労働者スポーツ連盟に敵対的に対立している。言うところでは、あらゆる労働者はブルジョア組織でスポーツを実践し得る、それもスポーツと政治は共通のものを持たないからだという理由で。まさにこの時スウェーデンの社会民主主義者の首相が彼の五十歳の誕生日の折にブルジョア・フットボール連盟の名誉会員に任命されたのである。よりにもよってこの党が労働者スポーツにおける統一の実現を邪魔しているのか？」

論説は次のように論じる。「SASIとその連盟の政党政治的結合、社会民主主義的党派スポーツ組織への転換が数年前の労働者スポーツ運動の分裂の原因の一つであったが、これが統一への発展を妨げている。チェコ社会民主主義紙が強調するところでは、労働者スポーツマンは政治インターナショナルと政党が同意するまで待つべきだという。だが、スポーツマン大衆はこれまでの経験が示している通りはるかにもっと早く同意することができ、うまく統一することができる。労働者スポーツ運動は再びそれがかつてそうであったものでなければならない。すなわち、プロレ

タリア階級闘争の地盤、戦争とファシズムに反対し平和と自由のための闘争の地盤、に立ち、しかし狭い党派スポーツ運動ではない広範な運動、いかなる政治的見解を主張するかに関わりなく全ての勤労者の・自由に思考するスポーツマンを捉える大衆運動、要するに労働者階級全体のスポーツ運動でなければならない。これこそ今日何が問題であるかの決定的なことである」。

最後に「最新の国際的交渉でＳＡＳＩの代表団はＲＳＩの具体的な提案を国際協議会に責任を持って提出することを約束した。プラハでのＳＡＳＩ協議会がこれに積極的な結果を得られんことを」[21]という期待の表明で締め括られた。

(1) Ein Schreiben der SASI an die RSI am 21. Juni 1935. in : Sportpress, (Aksamit), ibid., S. 42-43.

(2) Ein Schreiben des Sekretariat der RSI an die SASI am 29. Juni 1935. in : Sportpress, (Aksamit), ibid., S. 44-45.

(3) Aksamit (Prag), Vor neuen Einheitsverhandlungen zwischen der Roten Sportinternationale und der Sozialistischen Sport-Internationale. in : Rundschau, Jg. 4, Nr. 36 (8. August 1935), S. 1737-1738.

(4) Vor neuen Einheitsverhandlungen. in : Internationale Sportrundschau, Jg. 3, Nr. 8 (August 1935), S. 297-301.

(5) 『ＳＡＴＵＳスポーツ』一九三五年の二つの号に関係記事がある。七月二四日号で「代表団はＤＴＪの三人の代表（シュメク、ムラチェク、フィシェル）とＡＴＵＳの代表（ポカチカ、ウルマン）」であること、しかし「モスクワでのこの討議は、二つのインターナショナルの計画される討議とは一切関連がない」こと、八月七日号で「これは最終的な協定関係をもたらさなかった。ロシア人が、我々のインターナショナルだけが決定し得る譲歩を我々の使節から要求したからであった」ことが報道されている。――SATUS-Sport, Jg. XXVI, Nr. 30, 24. Juli 1935, S. 11.; ibid., Nr. 32, 7. August 1935, S. 12. ――スタインバーグはInternationaler Sportpressedienst, July 9. 1935. を資料に同様の記述を与えている（p. 264）。この号は小論では欠号である。同時にこれは一九三三―三五年の資料として彼が唯一利用したものである。

（6） Beratungen des SASI-Präsidiums. in : Internationaler Sportpressedienst, A 20, Aussig, 9. September 1935, S. 1-2.

（7） Aus der Sasi. Beratungen des SASI-Präsidiums. in : SATUS-Sport, Jg. XXVI, Nr. 40, 2. Oktober 1935, S. 10. スタインベーグはこれについて他の資料を挙げることなくSATUS-Sport, September 10, 1935. のみを挙げている（p. 260）が、この出典表記は誤りである。九月一〇日号はなく、あるのは九月一一日号で、そこには関係記事がないからである。

（8） Carlo Aksamit, Prag, Ein Auftakt zur Einigung. (Von den Verhandlungen zwischen SASI und der RSI). in : Internationale Sportrundschau, Jg. 3, Nr. 10 (Oktober 1935), S. 385-391.「呼びかけ」再録は、S. 390-391. ――ここでのタイトルは "Boykottiert die Berliner Olympiade! Gemeinsamer Aufruf der Arbeiter Sport Internationalen". 『国際スポーツ・プレッセディーンスト』九月九日号、『SATUSスポーツ』一〇月一日号での再録のタイトルは "Boykott der Hitler-Olympiade. Aufruf". 小論はアクチッット論説での再録タイトルを取る。

（9） Gemeinsame Komunique. ――注（6）に再録。

（10） "Boykott der Berliner Olympiade" のタイトルでの Aufruf の写真版は Bilder und Dokumente aus der deutschen Turn-und Sportgeschichte. Wilhelm Beier (verantw. Redak.), Berlin 1956, S. 253. に掲載されている。

（11） Ein Schreiben des EK der RSI an das Büro der SASI (o. D.). in : Sportpress, (Aksamit), ibid., S. 45-48.

（12） Für die Einheit der AKTION und Organisation! in : Internationale Sportrundschau, Jg. 3, Nr. 12 (December (ママ) 1935), S. 465-466.

（13） 注（10）に同じ。S. 47.

（14） ibid., S. 48.

（15） 注（8）に同じ。引用部分は S. 389-390.

（16） ibid., S. 390. .

（17） Carlo Aksamit (Prag), Um die Einheit im Arbeitersport. in : Rundschau, Jg. 4, Nr. 68 (21. November 1935), S. 2654.

(18) この会議についての資料は、『国際スポーツ・プレッセディーンスト』の一九三五年一〇月の号が小論では一〇月一九日号以外欠号なので、おそらくその欠号のなかにあると思われる。

(19) Geschichte der internationalen Arbeiterbewegung in Daten. Globus Verlag Wien 1986, S. 316, S. 317.

(20) 『コミンテルン資料集』第六巻、村田陽一編訳（大月書店　一九八三年）、資料二三a「ファシストの戦争放火に反対し、労働者階級の行動の統一のために（電報）（社会主義労働者インタナショナルへの呼びかけ、一九三五年九月二五日）」（一八七―一八八頁）、資料二三c「戦争をやめさせるための統一行動のために！（社会主義労働者インタナショナル書記局への呼びかけ、一九三五年一〇月七日）」（一九一―一九二頁）。

(21) 注（17）に同じ。S. 2654.

第五章　SASIプラハ国際協議会（三五年一一月三〇日・一二月一日）

①　事前報道から

『国際スポーツ・プレッセディーンスト』一九三五年一〇月一九日号に「一九三五年一一月二九、三〇日、プラハでSASIの国際協議会」[1]という短信が掲載されている。「議事日程は以下の項目を含む。一、報告、二、ベルリン・オリンピアードに対する闘争、三、ロシアとのスポーツ交流とRSIとの交渉。〔四―八は省略〕第三項目においてはソビエト同盟の代表も出席することが許される」。

『国際スポーツ評論』第三年巻第一一号（一九三五年一一月）の「SASI、重要な会議を前に」[2]の記事は、「報道によれば」として上記の短信と同様のことを記し（ただし日程を「一一月三〇日と一二月一日」と実際の通りに記した）、「周知のようにこの協議会には今年の九月のSASIとRSIの間の交渉の成果が検査に提出される。一方で、

ＲＳＩとのスポーツ交流の解除とソ連とのスポーツ関係の規則が問題であり、他方で、協議会は二つの労働者スポーツインターナショナルの統一と、そこから生じるべき労働者スポーツにおける統一の祭典としてのアントワープ・オリンピアードの実施についてのＲＳＩの提案に態度を決めることになる。これら全てから明らかなことは、ＳＡＳＩ協議会がいかに重要な決定を行うかということである」と、その意義を確認する。そして、ＳＡＳＩカールスバード総会へのＲＳＩの提案以来の一三か月を「それ以来労働者スポーツ運動の像はＲＳＩの提案に有利なように根本的に変化した」と特徴づけ、「主要にこれに寄与したのはフランスにおける発展である」が、他の国でも統一への意志の公然化、具体化が見られることを挙げ、「ＳＡＳＩ協議会はこの『現状』を証明し、ＳＡＳＩとＲＳＩの共同の協議で提起された提案の採用によって労働者スポーツにおける分裂に終止符を打つだろうか。協議会がこの結末を取るならば、労働者スポーツ運動全体とその将来の効果的な発展のためになるだろう」と締め括った。

② 協議会についての報告

一一月三〇日、一二月一日に開催されたＳＡＳＩ国際協議会についての第一次資料は入手できていないが、『ＳＡＴＵＳスポーツ』一九三五年一二月一八日号の「ＳＡＳＩ国際協議会」特集記事[3]に決議が再録されている。小論はスポーツプレス（アクサミット）編文書の記述[4]＝Ａと、『国際スポーツ評論』第四年巻第一号（一九三六年一月）の「ＳＡＳＩの国際協議会とその決議」[5]＝Ｂ（この二つとも決議を再録する）を比較しつつ、この協議会についての報告を再構成する。

Ａは、「ＳＡＳＩとＲＳＩの間の交渉の問題について、ソビエト同盟とのスポーツ交流とヒトラー・オリンピアードに対する闘争について、主要な議論が集中した」と報告するが、「この議論は、ＳＡＳＩのどの連盟に、統一に対

する決定的抵抗をし、この抵抗をソビエト同盟への途方もない攻撃と結びつける勢力があるのかを示したかぎりで注目すべきものであった」という観点からのものである。この記述はBの後半にも見られ、以下の部分は全く同一である。「例えばソビエト同盟に関するオランダSASI連盟の代表の詳論は反革命運動から慣れっこの水準に立っていた。ソビエト同盟へのこの攻撃における特別な圧巻はドイツ労働者スポーツマンの自称代表であった。後にこの人物は、ドイツ労働者スポーツマンの何らかのグループの名前で語ることを委任されもせず、その権限も与えられてもいないことが確認された。『議論の自由』でそうした演者の許可がなされたのである」。なお、Aではこれに続いて、「協議会の冒頭でフィンランドの代表コスチアイネンが、デンマークとスウェーデンの社会民主主義政府がヒトラー・オリンピアードの準備を財政的に支援していることを遺憾だとしたときには、彼の演説は直ちに中断された」と皮肉っている。それからAは協議会の決議を再録するが、これは後に引用しよう。Aの後半の、かなりの分量の部分は、ソ連代表として出席、演説したショルダクの演説の抜粋である。その小見出しについては小論の第一章で記した。

Bは、協議会での「個々の事柄を特に論じて労働者スポーツの問題へのSASIの態度決定の意味を示すことは、他の論説に委ねられねばならない」から、ここでは「一般的にしか論じられ得ない」と報告の主旨を示す。「先に言えば、SASIの国際協議会は一連の決議を採択したが、それは速いテンポで労働者スポーツ運動の行動統一を実現することには決して向かっていない。たしかにこの決議は以前に比べて一定の進歩を意味するが、それでもそれは、労働者スポーツの統一によってできるだけ早く行動能力ある人民スポーツ戦線に至るための努力を効果的に支持するものでは決してない。SASIの国際協議会がこの方向での最終決定をするところではないことは確かである。それは労働者スポーツマン大衆次第であり、その意志が結局、現在の時代にスポーツ運動にとって何が重要であるかを貫くであろう。SASIの国際協議会がより積極的に決議すれば人民スポーツ戦線の形成の事業をより早く構築するの

を助けたろうに」。――この先言はBの後半で展開される「労働者スポーツとスポーツ人民戦線」論につながる。

協議会に「一一か国の代表が出席した」とBは報告するが、人数は記していない（『SATUSスポーツ』一二月一八日号では「六〇人」と記されている）。Bは協議会に第二インター、国際労働組合同盟、チェコ社会民主党の代表、ソビエト同盟のスポーツ運動の代表ショルダクが出席したことを伝えた後、「RSIとの統一交渉とソ連とのスポーツ交流」についてのドイチュ報告とショルダクの詳論、「ソビエト・スポーツと国際スポーツ運動」、「ヒトラー・オリンピアードに対する闘争」についてのショルダクの議論を総括する。ここではドイチュ報告の部分を要約的に取り上げよう。ドイチュは「この一四年間のSASIとRSIの間の労働者スポーツ運動における対立に関する概観を与えた」が、「彼の詳論の結論は、会員大衆によって繰り返し要求されている組織的統一の確立をSASIは拒否するということであった」。彼はまた「ヒトラー・オリンピアードに対する闘争を共同で進めるというRSIの要求を分析し、この行動統一も拒否するという帰結に達した。公式のスポーツ連盟からのチームとのソビエト同盟の競技の問題との関連で、ソビエト同盟に対する一連の攻撃を売りつけようとして、新たに、このスポーツ的結びつきが人民スポーツ戦線の創造のためにもたらした具体的な成果を否認した」。Bはこのように総括した後、「ドイチュ報告について国際協議会は以下の決議を提出した」と記す。これはAが再録したものと同一である。Bはその後ショルダクの詳論をAの抜粋と重なる形で要約する（もちろん異同がある）が、そのさい丸括弧で「演説全体は小冊子として特に出版される」と注記している。これがスポーツプレス（アクサミット）編文書での収録となったのか、あるいは単独の小冊子が実際に出版されたのかという問題が浮かぶけれども、その小冊子の存在が不明なので、小論は前者の可能性があると考える。紙幅の関係でショルダクの議論については省くことにする。

③　協議会決議

ここでＳＡＳＩ国際協議会の決議を引用しておこう。それは次の八項目であった。

「一、ＳＡＳＩの国際協議会［以下、協議会］はＲＳＩとの交渉についての幹部会の報告を同意して承知する。

二、協議会は、ソビエト・ロシアのスポーツ組織とのＳＡＳＩの個々の全国組織によって始められる交渉がすぐに積極的な結果を示すであろうとの期待を表明する。協議会はソビエト・ロシアとの活発なスポーツ交流を喜んで歓迎するであろう。

三、協議会は、加盟する全国連盟に、その国にあるＲＳＩ支部とのスポーツ交流を規則づけることを委ねる。この規則あるいはこれに関連する協定の締結についてはＳＡＳＩ事務局に時宜を得て知らせるべきである。

四、ＳＡＳＩに加盟する全国連盟は、その本国でＳＡＳＩの全国連盟との協定を締結したＲＳＩの支部とのみスポーツ交流に入ることができる。

五、協議会は、ＳＡＳＩに加盟する全ての連盟とその連盟会員に、ＲＳＩの機関と人物への攻撃をやめることを指令する。

協議会は、ＲＳＩの所属員がＳＡＳＩの所属員に対して同様に行動するであろうことを期待する。

六、協議会はＳＡＳＩ幹部会に適切な時期にＲＳＩとの交渉の継続のためにモスクワに赴く全権を与える。そのさい協議会は、最終的な決議がＳＡＳＩの総会によってのみ生じ得ることを忘れないように注意する。

七、協議会は、ＳＡＳＩ幹部会によってＲＳＩと共同で始められたベルリンでのヒトラー・オリンピアードに対する行動を歓迎する。これはＳＡＳＩに加盟する連盟にこのオリンピアードに対する闘争を最大の力と最も粘り強いエネルギーをもって進めることを義務づける。

八、協議会はＳＡＳＩ事務局に、ＲＳＩの所属員が一九三七年アントワープでのオリンピアードに招待されるべきか、そしていかなる前提の下においてかについて、ＳＡＩとＩＧＢの事務局ならびにベルギー社会党の指導部と交渉に入ることを委ねる」[6]。

④　総括における「労働者スポーツとスポーツ人民戦線」論

最後に、この協議会の総括から理論的に発展するＢの後半の「労働者スポーツと人民スポーツ」論を取り上げよう。

まず、「ＳＡＳＩがその決議において第二インターナショナルに従属し、それによって指導部が労働者スポーツの独立した大衆組織の形成の道を遮るかぎり、統一の確立には繰り返し困難が行く手に横たわるであろう」と、この段階での状況の認識が示され、「労働者スポーツマンの願いと要求に完全に添わずに採択された決議に関しては、ＳＡＳＩとＲＳＩの連盟の協力に関する現存する可能性を利用し尽くすことが重要になる」との課題認識が提起される。そのうえで次のような運動論が論じられるのである。「ＳＡＳＩ指導者の側の労働者スポーツの決定的な問題への誤った態度に対する同時的な闘争において、労働者スポーツマンの統一戦線は一歩一歩スポーツ人民戦線の創造をめぐる粘り強い闘争と結び付いて形成されなければならない。ＳＡＳＩの責任ある役員が、ファシズム・スポーツマンと反ファシズム・スポーツマンの間の分離は可能ではないと指摘するならば、それには、ファシズムと戦争の危険こそ勤労大衆にとって主要な危険をなすということが反論として持ち出されねばならない。労働者スポーツマンがこの主要な危険に対してスポーツの分野で効果的に闘おうとするならば、どんな連盟にいるかを問わず全ての反・非ファシズム・スポーツマンと結び付かなければならないし、それだけがスポーツへのファシズムの影響と帝国主義戦争のためのスポーツ運動の利用と効果的に闘って克服することのできるスポーツ人民戦線が作られねばならない。ＳＡＳＩ

国際協議会の決議はこの必然性の遥か後に遅れている。この認識が至る所で根を下ろすことが重要である。その時にのみ労働者スポーツマン大衆がスポーツ運動の利益になる要求をめぐる具体的な闘争で団結する可能性があり、その時にのみ労働者スポーツの統一戦線においてスポーツの自由を求め、その一層の発展のために、その没落を意味するファシズムの勢力と闘う用意のある全ての勢力を加える前提が存在するからである」。

「ＳＡＳＩ国際協議会でＲＳＩはソビエト同盟の代表によって労働者スポーツの今日的任務への原則的立場を明らかにした。この分野ではＳＡＳＩ指導者によって主張される見解に対するいかなる譲歩もあり得ない。なぜならそれは労働者スポーツ運動の進歩でなくその孤立化を意味するからである」。――「スポーツ人民戦線の仕事は労働者スポーツの統一戦線の反対者と公認のスポーツ運動におけるファシズム勢力とに対する闘争において完成されるという保証が与えられる」[7]。

この「労働者スポーツとスポーツ人民戦線」論は、すでに『国際スポーツ評論』第三年巻第一一号（一九三五年一一月）のアクサミット論説「労働者スポーツマンとスポーツ人民戦線」[8]で九・六交渉での論争点の理論的整理として展開されたものであった。さらにさかのぼれば『国際スポーツ評論』第三年巻第八号（一九三五年八月）の論説「人民スポーツ戦線と国際的スポーツ統一――七月六、七日のＦＳＧＴの全国評議会会議について」[9]も関連する。この二つの論説については第二部での「人民スポーツ」をめぐるドイチュ・アクサミット論争のなかで取り上げていく。

スポーツプレス（アクサミット）編文書は、一九三六年一月二一日のＳＡＳＩ事務局のソ連身体文化最高評議会あての書簡の掲載と、それに関わって同年三月七、八日のＲＳＩプラハ国際協議会の折のモスクワ交渉（三回目の）について予備交渉があったというだけの記述、後はＲＳＩ国際協議会の二つの決議の掲載で閉じられている[10]。小論はこの文書が閉じる直前の時点からの展開を第二部の第一章から論じていくつもりである。本稿はひとまずこれで止める

ことにする。

（1） Länderkonferenz der Sasi am 29. und 30. November 1935 in Prag. in : Internationaler Sportpressedienst, A 25, 19. Oktober 1935, S. 1.

（2） Die SASI vor einer bedeutsamen Tagung. in : Internationale Sportrundschau, Jg. 3, Nr. 11 (November 1953), S. 456-457.

（3） Die Länderkonferenz der Sasi. in : Satus-Sport, Jg. XXVI, No.（ママ）51, 18. Dezember 1935, S. 1-2.

（4） Sportpress,（Aksamit), ibid., S. 48-49.

（5） Die Länderkonferenz der SASI und ihre Beschlusse. in : Internationale Sportrundschau, Jg. 4, Nr. 1 (Jänuar 1936), S. 6-14.

（6） 注（3）のS. 2.、注（4）のS. 48-49.、注（5）のS. 7-8. に再録されている。

（7） 注（5）と同じ。S. 13-14.

（8） Carlo Aksamit, Prag. Arbeitersportler und Sportvolksfront. in : Internationale Sportrundschau, Jg. 3, Nr. 11 (November 1935), S. 425-428.

（9） Für Volkssportfront und internationale Sporteinheit. Von der Sitzung des Nationalrates der FSGT am 6. und 7. Juli. in : ibid., Jg. 3, Nr. 8 (August 1935), S. 306-311.

（10） Sportpress,（Aksamit), ibid., S. 66-70. ――なお、三月の予備交渉をミッチュは「第三回共同討議」とし、「両インターナショナルの行動の統一への決議という成果があった」と記した（S. 207、編訳二七八―二七九頁）が、これは誤りである。史料は小論と同じスポーツプレス（アクサミット）編文書であるが、おそらくRSI国際協議会の決議と混同したことと、予備交渉を過去二回の交渉と同様に数えたことの結果であろう。